千葉商大論叢　第 56 巻　第 1 号（2018 年 7 月）pp. 61-134

〔論　説〕

渋沢栄一における欧州滞在の影響
―パリ万博（1867 年）と洋行から学び実践したこと―

関　水　信　和

目次

〈序論〉
〈本論〉
第 1 部　渋沢栄一が洋行で学んだこと，影響を受けたこと
　第 1 章　渋沢の生い立ちと渡欧
　　第 1 節　渋沢の生い立ち
　　第 2 節　フランスへの出港
　　第 3 節　フランスへの上陸
　第 2 章　パリ万博，サン＝シモン主義
　　第 1 節　パリ万博見学
　　第 2 節　パリ万博とサン＝シモン主義の関係
　第 3 章　欧州各国歴訪，幕府崩壊により留学中止
　　第 1 節　欧州各国歴訪
　　第 2 節　幕府崩壊により留学中止
　第 1 部「小括」
第 2 部　渋沢栄一が日本で実践したこと
　第 4 章　官と民の関係，貨幣と度量衡など国の基本的な事項
　　第 1 節　官と民の関係
　　第 2 節　貨幣と度量衡
　第 5 章　合本組織・銀行業・倉庫業
　　第 1 節　合本組織
　　第 2 節　銀行業
　　第 3 節　倉庫業
　第 6 章　造船業
　第 7 章　海運業・鉄道事業
　　第 1 節　海運業
　　第 2 節　鉄道事業
　第 8 章　新聞事業・製紙事業
　　第 1 節　新聞事業
　　第 2 節　製紙事業
　第 9 章　病院・社会事業・社交・劇場・その他
　　第 1 節　病院

第2節　社会事業
第3節　社交
第4節　劇場
第5節　その他（洋行したことが間接的に影響したもの）
第2部「小括」
〈結論〉
資料　渋沢栄一が出発した当時の日本及び日本人の様子
まとめ
〔参考文献〕

〈序論〉

渋沢栄一は明治期に多くの企業を設立し日本の近代産業の礎を築いた人物である。彼は，江戸末期に徳川昭武に随行してフランスを始めとした欧州に滞在した。その洋行（以下，「洋行」）が，「自分の一身上一番効能のあつた旅」だったと，後年，彼は述べている(1)。この洋行は彼が満27歳の時の初めての海外渡航で，強い印象を受けたと思われる。この27歳という年齢は語学習得には遅すぎる年齢と言えるが，社会勉強という意味では基本的なことを理解した時期であり留学に相応しい年齢と言える(2)。筆者も社会人となって数年後に，渋沢と同年齢の時期にスペイン等に約1年間留学した。筆者の場合，日本は既に先進国となっており，渋沢のように日本よりも進んだ文化を学ぶようなことにはならなかったが，初めて異文化に接し外国で生活したことは，その後の人生に大変強い影響があったように感じている。具体的には，異文化圏の人を理解したり，物事を渡航前よりも柔軟に考えるようになったりするなどの変化が自分の中に生まれたと思える。筆者の場合，留学して既に数十年も経っているが，その影響は現在に至るまで変わっていない。

渋沢は明治維新の前に近代産業が皆無であった日本より洋行し，欧州の進んだ技術・文化に接したわけで，その影響は計り知れないと思われる。渋沢の洋行の生涯における影響はあまり過大評価できないというような見方もあるが(3)，筆者には，滞在期間は短くとも渋沢は洋行の経験から生涯を通じて極めて強い影響を受けたと思えてならない。しかし彼の洋行の影響に関する研究は未だ十分なされていないように思える。

第1部では，まず渋沢の生い立ちから，初めて見る西洋の風景，街並，文化の様子を概観する。渋沢がパリで受けた印象をより良く理解するために，渋沢らが宿泊したホテル・

(1)　渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265号），12ページ。
(2)　木村昌人「渋沢栄一研究のグローバル化―合本主義・『論語と算盤』」（『渋沢研究』27号），68ページには，「論語を中心とする江戸時代に広く武士が学んだ中国古典や日本史の思想や知識をもち，家業の藍玉の販売を通じて金融の知識や商業センスを身に着けた栄一には，ヨーロッパで進んだ文明や経済の仕組みを十分理解するだけの素地があった」と記されている。
(3)　公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，50ページは，渋沢の欧州滞在について「実質一年半という期間で，また随員という立場である栄一が，実際に欧州で学んだものは限定的なものであると思われ，過大評価は避けなければならない。ただ幕末の渡欧体験は，栄一にとっては衝撃的なものであり，後の活動に与えた影響は決して小さなものではなかった」と洋行の影響をやや限定的なものと評価している。

下宿アパートなどの定点写真による分析も試みた。そして渋沢が見学したパリ万博の様子と万博とサン＝シモン主義の関係を検証する。そして渋沢が，欧州各国歴訪時と帰国の際に見たり経験したりした内容を検証する。

第２部では，帰国後の渋沢は洋行の経験を日本の近代化にどのように役立てようとしたのか。また洋行で得た知識・経験をどのような仕事に役立てたのかを検証する。これらの作業を行うことにより，洋行がいかに彼の生涯に強い影響を与えたかを検証できると考えた。

〈本論〉

第１部　渋沢栄一が洋行で学んだこと，影響を受けたこと

第１章　渋沢の生い立ちと渡欧

第１節　渋沢の生い立ち

渋沢栄一は，1840 年に武蔵国血洗島村（現在の埼玉県深谷市）で農民の子として生まれた。少年時代の渋沢は，本を読むことが大好きで，11～12 歳の頃には『通俗三国史』『南総里見八犬伝』などを好んで読み，17～20 歳頃には『日本外交史』『十八史略』などを読み，自分も世の中のために役に立ちたいという志を持つようになった(4)。渋沢が 17 歳の時に父親の代理で代官所に出向いた折に，ご用金を上納するように指図する代官の農民を軽蔑した態度に立腹し，当時の政治体制に強い不満を持つようになった(5)。渋沢は，1863 年（満 23 歳）に，郷里の縁者らと倒幕の野心を抱き過激な行動に走ろうとしたが，寸前で思いとどまった。そして身の処し方に困った末，縁あって一橋家に士官した。しかし，事情はどうあれ，倒幕という当初の考えとは全く異なる御三家の家臣という立場となり，そのことについて，渋沢は悩んでいた(6)。そんな折（1866 年 11 月），一橋家にて世話になっていた重役を通じ，徳川昭武が洋行するので，随員として使節に参加しないかと打診がなされた。科学技術など全てが進んでいるヨーロッパに行く絶好の機会であることから，学問好きの渋沢はこの知らせに大いに歓喜したようである。後年，渋沢は「自分はこの洋行の内命を大いに喜んで，郷里の父へもその事を文通した」と述べている(7)。また出発まであまり時間がないことから，洋服を慌てて入手したが，なにが必要かなど分からず，渋沢は，「その頃は何も様子は知れずまた指図を受ける人もないから，我が思うままの旅装を整え」たと後に述懐している(8)。急いで出立のための身の回りの整理ないし知人などへの挨拶などを行なった。そして，語学教師のフランス人，ビランに招かれたときに初めて洋食を食

(4)　公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，15 ページは，「書物に登場する英雄豪傑を自分の友のように思い，天下国家のために何かをしたいという志を強くしていった」と記している。
(5)　公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，17 ページを参考とした。
(6)　渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，124 ページは，渋沢は一橋家の家臣となって「日に増し境界が面白くない，何となく世に望みが薄くなって来た」。「今一，二年の間にはきっと徳川の幕府が潰れるに相違いない」，「ついてはここを去るより仕方がないが，ここを去るにはどうするのがよかろうか，とただ屈託して居たが，何分思案が付かぬ」，と述べている。
(7)　渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，126 ページ
(8)　渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，126 ページ

べたとのことで[9]，洋行するような立場の人にとっても，当時は，まだ洋食は珍しいものであったことが窺える。

第2節　フランスへの出港

慶応3年1月11日（1867.2.15），渋沢栄一は，徳川昭武に随行してフランスの郵便船アルヘー号に乗り，日本を離れた。この船について，渋沢は，「今から見れば殆んど問題にならぬほどの小汽船であるが，当時の私共の目から見るときは，設備万端実に至れり盡せりで，吾々の陸上の住居よりも遥かに贅沢なものであった」などと述べている[10]。船中においては，食事など全てフランス式であったが，コーヒー，紅茶，ハムなど全てが，彼等には珍しいものであったようで，ハムのことを「豚の塩漬」，バターについて「ブールという牛の乳の凝たるを，パンへぬりて食せしむ味甚美なり」などと日記に書いている[11]。バターのことを初めて知った渋沢が「味甚美」と感じるのは，かなり意外なことで，明治期の日本人は，「バタ臭い」などの表現から分かるように，普通，バターの味に親しむのに時間を要したと思われる。さらに，コーヒーに関して，「食後カツフヘーという豆を煎じたる湯を出す砂糖牛乳を和して之を飲む頗る胸中を爽にす」と日記に書いている[12]。この点も渋沢の反応はかなり普通とは異なっているように思える。渋沢の西洋文明に対する順応性の高さが現れているようにも思える。またこの日記には，食事・お茶の回数や食事の内容についてはデザートにいたるまで，かなり細かく記されている。渋沢の西洋文明を観察して，吸収しようという態度の現れと言えよう。

西洋文明を理解するためには，外国語の習得が重要と渋沢は考え，「早く外国の言語を覚え外国の書物が読めるようにならなくちゃいけないと思った。」「兵制とか医学とか，または船舶，器械とかいうことはとうてい外国には叶わぬという考えが起こって，何でもあちらの好い処を取りたいという念慮が生じて居ったから，船中から専心に仏語の稽古をはじめて，彼の文法書などの教授を受けた」などと記している[13]。進んだ西洋文明を吸収しようという積極的な姿勢が感じられる。

〈電信などの新しいシステムの効能に注目〉

横浜を出港して4日後の1867年2月19日（以下，西洋暦）に一行は最初の寄港地である上海に到着した。当時の上海は欧米列強が居留地として租界を作り，近代的な街並みとなっていた。渋沢らが見た初めての西洋的な街並みであった。後に渋沢は，「航海中，各地に寄港して視察したが，何れも初めて接する外国の風物の事であるから，一つとして珍しからぬはなく，中には眼を瞠らしむるものも尠くなかつた」と記している[14]。特にガス灯や電信設備に驚いたようで，欧州の土を踏むに先だち，上海で西洋人の科学知識の遥かに進歩していることに渋沢は気が付いた。またガス，電信という新しいシステムに渋沢

(9)　渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，127-128ページ
(10) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，130ページ
(11) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，4ページ。
(12) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，4ページ。
(13) 渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，128ページ。
(14) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，133ページ

が着目し，それを理解しようとした点が重要である。

〈産業全般の発展の重要性を認識〉

渋沢の日記など（航西日記，青淵回顧録）によると，上海は多くの中国人，欧米人，が往来し，大いに繁栄していたが，街路は汚物などが散乱し不潔で異臭を放っているとのことである。そして，西洋人と中国人の関係について，「西洋人の支那人を使役する有様を見るに，恰かも牛馬を駆使すると等しく，鞭をもつて督呵して居る。而も此の支那人たるや，敢て之れを怪しまないのみか，寧ろ当然の如く心得て居るらしい。」と記し，西洋人がアジア人を支配しつつある現実を目の当たりにしている。そして中国について，「東洋名高き古国にて幅員の広き人民の大き土地の肥饒産物の殷富なる欧亜州も固より及ばざる所といへり」「世界開化の期に後れ独其国のみを第一とし尊大自恣の風習あり」「貧弱に陥るやと思はる」と東洋の大国であっても文明開化に遅れ自国が一番だと決め込むと国力が貧弱となり，西洋列強の思うままとなってしまうと記している(15)。日本も同様のことが起こるという危機意識を持ったのではなかろうか。

〈教育の重要性を認識〉

1867 年 2 月 24 日（以後 1867 年を省略）に一行は香港に到着した。上陸して，市街を見物し造幣局，刑務所などを視察した。当時の香港は日本人には十分と異国情緒あふれる街並みだった。しかし市街の様子などは日記などにもほとんど触れず，渋沢は刑務所について，「善悪応報の道を説いて罪人を懺悔せしめ」，「其の懇切切実なるは全く感服の外はなかった」などと述べ，囚人に対する教育制度を褒めている(16)。香港は以前には小さな漁港であったところをイギリス人が港湾設備を整えて急速に発展した都会であるが，渋沢はそのようなことよりも，囚人の教育に興味を示しており，教育の重要性を認識していたことが，窺える。

〈財政健全の重要性を認識〉

一行はサイゴンに 3 月 1 日に入港し，フランスが植民地として道路の修理を行っている様子を見学した。しかし，製鉄所，学校，病院，造船所などの建設を行っているが，年間の「収税額僅に三百万フランクに過ず」などと渋沢は述べている(17)。渋沢の上海における日記には，税収について「旧来の弊を改め歳入の数も倍増し凡一歳五百万弗にいたれり」などと述べている部分がある(18)。渋沢が外国において施設などを視察した際に，その裏側にかならず存在する資金の流れに早くも着目している点に大いに注目したい。

3 月 5 日に一行はシンガポールに入港した。シンガポールについて，「船は波止場に横着けとなる良港で，流石に英国が東洋に志を伸べんとする根拠地」などと後に簡単に記し，「上海，香港，サイゴンといふ風に，漸次見聞を広めて来たので，格別新奇に感ずる程の印象もなかった」と後に記している(19)。一行はフランスに向かう途中，列強の影響が少し見られる街から影響が強い街を順番に訪問したことから，渋沢も西洋文明に少しずつ慣

(15) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，10 ページ。
(16) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，137 ページ。
(17) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，17-18 ページ。
(18) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，7 ページ。
(19) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，139 ページ。

れていった様子が良く分かる。

3月12日に一行はセイロン島に到着し，オリエンタル・ホテルに宿泊した。渋沢の回顧録には，住民の皮膚の色や衣服などの様子が描かれている他は，仏教寺院の涅槃像を見学したことなどの記載があり，「市中を散策したが，特に珍しいと印象する程のこともなかった」などと書いている[20]。しかし食べ物は気に入ったようで，「結構なり産物多し就中果物佳品魚類も鮮にて食料頗る芳美なり棕櫚芭蕉の実黄桃」など「良好なり。カレイとて胡椒を加えたる鶏の煮汁に，桂枝の葉を入れるものを，また名物とす」などとかなり詳しく記載して褒めている[21]。何事にも冷静で興味旺盛な渋沢の性格が感じられる。

〈資本を合わせる仕組み（合本組織）の重要性を認識〉

3月21日，一行はアラビア半島のアデンに入港した。渋沢の回顧録には原住民は朽ち果てた家屋に住んでいるが，欧州人は別天地のような良い所にいるなどと記している[22]。

3月26日，一行はスエズに入港した。上陸して陸路カイロに向かった途中，渋沢は運河の工事を目の当たりにした。そして，渋沢は「私は其の工事の大規模であることよりも，寧ろ泰西人が独り一身一為のためのみならず，国家を超越して，進んで斯くの如き規模の遠大にして目途の宏壮なる大計画を実行する点に感服せざるを得なかった」と述べている[23]。

渋沢にしてみると，故国では国の中で争っているのに，西洋と東洋を結ぶというとても国を越えた大きな利益のために工事が行われていることに驚いたのである。さらに工事には莫大な費用が必要であり，渋沢は，会社という組織が株式や社債を発行して，大きな資金を集めることができることを知らなかったことから，大規模な事業が行われていることに，感心したのである。そして，この事業をレセップスというフランス人が指揮していることを恐らく船上で知り，渋沢はフランスという国の制度・技術を勉強したいという意欲が益々湧いたことであろう。

渋沢はスエズからカイロを経由してアレキサンドリアに行く時に初めて汽車に乗った。汽車の窓にはガラスが入っていたが，一行は見たことがなく，後に渋沢は「皆硝子と云ふものを知らぬので，汽車に乗つてから窓外を見ると全然すき通つて見えるので，何もないと思ひ，一行の或者が窓の外へ捨てる積りで蜜柑の皮を何度も投げた。すると隣席に居た西洋人が憤つて何か云ひ出したが，言葉が通じないからお互に云ひ合つて居るうち遂に立上つて腕力沙汰になつた」が，「結局硝子のあることを日本人が知らなかつたから起こつた事と判つて，双方とも笑つて事済になつた」などと述べている[24]。俄かには信じられないようなエピソードであるが，窓ガラスというものの存在を知らないとこのようなことが起こるのかも知れない。一行にとって全てが初めての経験であったということなのであろう。一行は3月27日の未明にカイロを通過した。そのことについて，後に渋沢は，「何分カイロの通過は夜中だつたので停車の時間はあつたけれども視察せず，且つ有名なるピ

(20) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，140-141ページ。
(21) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，24ページ。
(22) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，142ページ。
(23) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，143ページ。
(24) 公益財団法人渋沢栄一記念財団，『雨夜譚会談話筆記』（「渋沢栄一伝記資料別巻第5」），551-552ページ。

ラミツドやスフインクスの奇観を遠望する事さへ出来なかつたのは遺憾であつた」[25]などと述べている。ピラミッドなど一行や渋沢の旅行目的と関係ないが，見たかったのであろう。何事にも興味を示す，渋沢の人柄が良く表れている。

第３節　フランスへの上陸

3 月 27 日朝，一行はアレキサンドリアに到着し，市内の博物館などを見学した。そして，3 月 28 日朝，一行は，汽船サイド号に乗り，4 月 3 日午前 9 時半マルセイユに入港した。一行が到着すると，祝砲で歓迎された。その時の状況について，後に渋沢は，「一行を乗せた汽船サイド号が仏国のマルセイユに入港すると，予て電信を以て『何月何日の何時頃に入港する』旨を当地の官憲まで報じてあつたので，愈々入港するや，祝砲を放つて歓迎の意を表した」などと，かなり細かく述べている[26]。渋沢は電信の働きについて，強い印象を持ったことが窺える。また渋沢が残した公式日記である航西日記においては，電信のことを「電線」と記述しており[27]，渡仏当時は，日本語の表記すら定まっていなかったことが窺える。一行はマルセイユに数日滞在し，近くの軍港町のツーロンに出向き，武器類を見学した。その際に，渋沢は大砲を試射しているが，日記には「我輩にも大砲試発せしめ」[28]とのみ書き，余り興味を示していない。むしろ，その時に見た潜水服に興味を示し，「人を海底へ沈没せしめ暗礁其外水底に在る物を具に見留る術」などと説明し，興味を示している[29]。

一行は，マルセイユを立ち，リヨンで一泊し，4 月 11 日夕方，横浜を出発してから 56 日目にパリに到着し，開業（1862 年 5 月）したばかりのグランドホテルに投宿した。このホテルは，現在も当時とあまり変わらない姿で営業を続けている（当時と現在の写真①，②，③，④参照）。今日の日本人が見ても，十分に立派な建物であり，“江戸”から来た渋

写真①　グランドホテル（定点写真）
左は当時の写真（馬車が写っており，開業の頃），右は現在の写真。

絵葉書　裏面に 19 世紀末の表示あり
Le café de la Paix(photofinXIXèmesiècle)

絵葉書と同じアングル。馬車が車となっている。
2014.1.1 筆者撮影

(25) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，145 ページ。
(26) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，148 ページ。
(27) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』39 ページ
(28) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』40 ページ
(29) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』40 ページ

写真②　グランドホテルの全景

開業当時の全景
出典：Grand-Hotel Café de la Paix　58-59 頁

現在の全景
2014.1.6 筆者撮影

写真③　グランドホテル内部

開業当時の Café de la Paix
出典：Grand-Hotel Café de la Paix　62 頁（部分）

現在の Café de la Paix
2014.1.3 筆者撮影

沢は驚いたことであろう。

一行は，パリに到着してから，半月ほど経った 4 月 28 日にフランス皇帝ナポレオン 3 世に謁見するために，ホテルからチュイルリー宮殿に向かった。彼等の服装は，「何れも純日本式の礼装を着用に及んで参内した」[30]。そのこともあり，フランス人には珍しく，「都下の老若男女は勿論，近郊からも夥しく観覧者が押しかけて，ホテルから王宮に至る道路の両側は，是等の群集のため殆ど人を以て埋めらるるの盛観を呈したのであつた。何しろ頭には丁髷を結ひ，衣冠，狩衣などの装束をした異国人がパリーの目抜きの街路を繰り出したのであるから，外国人に取っては定めし奇観であつたであろう」[31]。フランス人から日本人を見るといかに珍しい人たちであったかを物語っている。そのことは，同時に，日本人から見たフランス人ないし文物が同様に珍しいものであったことを意味するであろう。

この写真⑥は，その後，グランドホテルから転居したペルゴーレ街の館にて撮影したものであるが，宮殿においてもこのような衣装であったろう。

(30) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，154 ページ。
(31) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，154 ページ。

写真④　グランドホテルの大食堂

開業当時の大食堂
出典：Grand-Hotel Café de la Paix　62 頁（部分）

現在の大食堂
2014.1.3 筆者撮影

現在の大食堂
2014.1.3 筆者撮影

現在の大食堂
2014.1.3 筆者撮影

写真⑤　とてもおいしいパンを出す Grand-Hotel1 階のレストラン

2014.1.1. 筆者撮影

写真⑥　ペルゴーレ街の館にて

ペルゴーレ街53番地の徳川昭武、1867年ディスデリ撮影
出典：外国人カメラマンの見た幕末日本Ⅰ22ページより複写

ペルゴーレ街53番地の山高信離、1867年ディスデリ撮影
出典：外国人カメラマンが見た幕末日本Ⅰ23ページより複写

〈劇場の効能を認識〉

一行は，5月3日，皇帝主催の観劇に出向いた。「此の劇場を看るは欧州一般の祝典にして凡重禮大典等畢れば必其帝王の招待ありて各国帝王の使臣等を饗遇慰労する常例[32]」となっていた。そしてバレエは「娥眉名妓五六十人裾短き彩衣繡裳を着し粉妝娼を呈し治態笑を含み皆細軟輕窕を極め手舞足舞踏轉跳踊一様に規則ありて百花の風に寮繚乱する如し」，「舞台の情景は，ガス灯を五色の瑠璃に反射させ，色を自由に映し出し」たりして，「舞台の景象瓦斯灯五色の瑠璃に反射せしめて光彩を取るを自在にし又舞妓の容輝後光或は雨色月光陰晴明暗をなす須臾の変化其自在なる真に迫り観するに堪たり」と渋沢は記している[33]。工場や病院，軍事施設などを訪問した時の記述のトーンと異なった力を込めた詩的な表現を渋沢はしている。印象的なオペラ体験であったに違いない。

渋沢は，一行の全員がホテルに泊まるのは，費用が嵩むとして早々に渋沢と書記官の木村と杉浦3名の下宿を探す。後に渋沢は，「有名なグランド・ホテルに止宿せられたが，私共両三人は，ホテルに居るのは不経済であるといふので，パリーに着すると間もなく貸家を探して其処に移つた」と述べている[34]。渋沢は一行の会計係であり，経済人らしい一面が窺える。そしてシャルグラン通り30番地にアパートを見つけ5月15日に移った。このアパートは凱旋門の直ぐそばにあり，徳川昭武が泊まっているグランドホテルからも

(32) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，51ページ。
(33) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，51-52ページ。
(34) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，153-154ページ。

近い，閑静な高級住宅地に位置している。現在も写真のような建物が残っているが，当時のままの建物か，それとも再建されたものか定かでないが，周囲はとても良い環境である。渋沢も，「シャルクランの館舎へ引移りぬ　此のシャルクランは市外幽雅の地にてボアデプロンギユへ続く地なり」と記している(35)。現在の東京に住んでいる者から見て，かなり贅沢な雰囲気の場所と言える。渋沢らは，教師を雇ってフランス語の勉強を始めている。「毎日教師を招いて親切に教授を受けたから，一箇月ばかりの後には片言ながら簡単な日用語位は出来るやうになり，買物に行っても半分は手真似で用を弁ずる程になつた」(36)ようである。随員の山内六三郎はフランス語ができ，一行は，少しずつ行動を広げていたのであろう。渋沢が残した『航西日記』の5月17日には，「曇午後英国公使館の舞踏を看る」とのみ記されている。日記の書き方から見ても，渋沢が初めて万博会場に行くのは，6月20日のことと考えられる。

写真⑦　シャルグラン通りのアパート周辺

2014.1.5. 筆者撮影

写真⑧　シャルグラン通り30番地のアパート

2014.1.5. 筆者撮影

(35) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』60ページ
(36) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，154ページ。

写真⑨　凱旋門よりシャルグラン通り付近を望む

2014.1.5. 筆者撮影

このころのパリは，万国博が開催されていることから，「各国の帝王や皇族其他の貴顕が続々入府し，仏帝ナポレオン三世は其の応接に忙殺さるる有様で」，「国賓の滞在中は殆んど連日に亘つて種々の催しがあり，昨日は夜会，今日は舞踏，明日は競馬といふ風」で「私も縷々其の陪従の光栄に浴した」と渋沢は後に述べている[37]。渋沢は，身分の違いや語学力などの問題もあり，多くの欧州の上流階級の人たちと交流したとまでは言えないものの彼らの行動などをいろいろと観察することができたはずである。

〈社会事業の重要性を認識〉

一行は，6月1日，仏皇帝がロシア皇帝のために開催した競馬を観戦した。そして「此の日仏帝と魯帝と十萬フランクづゝの賭ものせしが魯帝の方勝たりしかば其十萬フランクを以て魯帝より直に巴里貧院に寄付せし」[38]ということがあった。これは渋沢が帰国後に行った社会事業のきっかけになったのかもしれない[39]。

〈病院の重要性を認識〉

一行は，6月8日に病院を視察している[40]。その様子について，渋沢は，「一房毎に病者数十人牀を聯ね臥す臥牀皆番号あり臥具都て白布を用ひ専ら清潔を旨とす」などと日記に書いている。さらに「幽室あり六七箇の臥牀に死尸を載せ木蓋して面部の所は布もて掩ひ側に牓札あり是皆病者の病源の分明ならず衆医疑案を存せしものにて其標札に死者の名年齢より病の症体を精しく記し死尸日を経て必ず其病の在る所より腐敗するのをもて験按発明の一端となすといへり」などと記し[41]，後学のために熱心に見学した様子が伝わってくる。そして「此の病院は巴里の市内に或る富豪の寡婦功徳の為若干の金を出して創築せし由にて其写真の大図入口に掲けてあり」，「此地にては病者はかならず病院に就て療養を請じ医療の過ちにて天殞なく其天然の齢を遂るを得せしむといふ是人命を重んずるの道

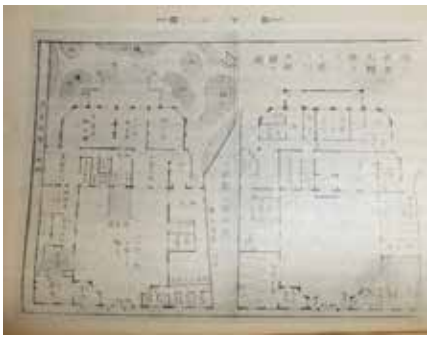
(37) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，157-158ページ。
(38) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』66ページ。
(39) 島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，27ページ。
(40) 渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，139ページでは，6月4日となっているが，渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』では，6月8日となっている。前後関係から見て，6月8日が正当であろう。
(41) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』75-76ページ。

写真⑩　ペルゴーレ街の館の入り口

2013.12.31. 著者撮影　ペルゴーレ街 53 番地の入り口

写真⑪　Rue Marbeau より撮影したペルゴーレ街 53 番地の入り口

イラスト①



一行が利用した部屋の間取り図、馬車の記載がある。尾佐竹猛「慶応三年の遣仏使節に就て」龍門雑誌 486 号 56 頁より複写

写真⑫

2013.12.31. 著者撮影　ペルゴーレ街 53 番地の中庭
扉が高く馬屋として利用されていたことが分かる

写真⑬　内部の馬小屋の跡（背の高い扉）

2013.12.31. 著者撮影

写真⑭　ペルゴーレ街の館の内部

2013.12.31. 著者撮影　ペルゴーレ街５３番地の内部、階段付近

といふべし」と述べている[42]。後年，渋沢が日本赤十字社，聖路加病院などの設立に関わった原点が，この病院の見学にあったと言えよう[43]。

一行がパリに到着して，2ヶ月ほど経過し，徳川昭武のホテル住まいは，費用が嵩み後の財政問題の原因となった。徳川昭武は，6 月 13 日には，グランドホテルからペルゴーレ街の館に転居した[44]。この建物は，現在，高級アパートとして利用されている。前ページに示したイラスト①「徳川民部大輔フランス国パリ御旅館の図」を見ると，入り口の近くに馬屋があり，2 階には家庭教師のヴァレットの居所，昭武の部屋がある。この建物は現在も当時とあまり変わらないようで，写真⑫，⑬の通り，今でも馬屋の跡が残っている。建物の内部，階段付近などを見ると，高級ホテル並みの豪華な内装となっている。渋沢に

(42) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』76-77 ページ。

(43) 稲松孝思，松下正明『渋沢榮一の第三回パリ万博参加体験と明治前期の福祉・医療事業への関与について（一般口演，一般演題抄録，第 41 回日本歯科医史学会・第 114 回日本医史学会合同総会および学術大会）』（「日本歯科医史学会会誌」），195 ページは，「渋沢が関与した福祉医療事業は，パリ・ヨーロッパ滞在中の渋沢自身の体験や，人脈が関与する例が多い」としている。

(44) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』79 ページには，「（西洋 6 月 13 日）雨午後 2 時巴里パツシイ郷ペルゴレイズ街 53 番といふへ転宿せり……」と記されている。

とって，シャルグランのアパートもこのペルゴーレ街の館も，立派な建物であり，日本との格差を強く感じたのではなかろうか。

第２章　パリ万博，サン＝シモン主義

第１節　パリ万博見学

いよいよ，6 月 20 日，午後 2 時より一行は博覧会場を見学した。渋沢も同行している。後年，渋沢は「博覧会の評判が非常によいので，各国から観覧者が続々と入り込み，パリーの賑ひは一通りでない。徳川民部大輔は例のアレキサンドル狙撃事件があつてから約二週間後，フランセス・ミラ氏の先導で博覧会に赴かれた。私も随員の一人としてお供をしたが」，「オランダに留学して居る邦人学生も来着し滞在中であつたので，相共に随従して観覧したのであつた。博覧会場はセーヌ河畔の広場で，周囲一里余もある場所であつた」と述べている[45]。

イラスト②

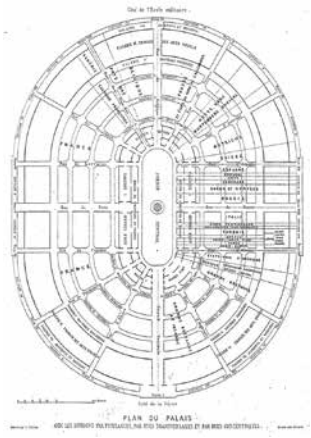
万博メイン会場の全景イラスト
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P. 12（著者所蔵）

メイン会場の外周には，100 以上の店舗やレストランが並び，人気を博した。これが，後の万博に娯楽的な要素を取り入れるきっかけとなった[46]。次ページの写真⑮の手前に並ぶ建物が，それらの店舗と思われる。

会場には，後年の第 4 回パリ万博で建築されたエッフェル塔の近くのシャン・ド・マルスの 14 万 6,000 平方メートルという広大な敷地があてられた。日本の出展について，渋沢は，「東洋の部に属して居るうちでは日本の出品が一番陳列の場所を広く取つてゐた。此の博覧会には普通の出品の外に我日本式茶店が設けられてあつたが，奇風奇俗が大分人

(45) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，167 ページ。
(46) 国会図書館の電子版「博覧会」http://ndl.go.jp/exposition/s1/1867.html を参考とした。

イラスト③



万博メイン会場図面
出典：国会図書館ホームページ　博覧会一覧より
http://ndl.go.jp/exposition/s1/index.html

写真⑮

万博メイン会場の周辺の写真
Exposition Universelles 1855 Paris 1937, P34

イラスト④

万博会場の日本スペースにいた日本人
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P.368

気を呼んでゐた」と後年に述べている[47]。

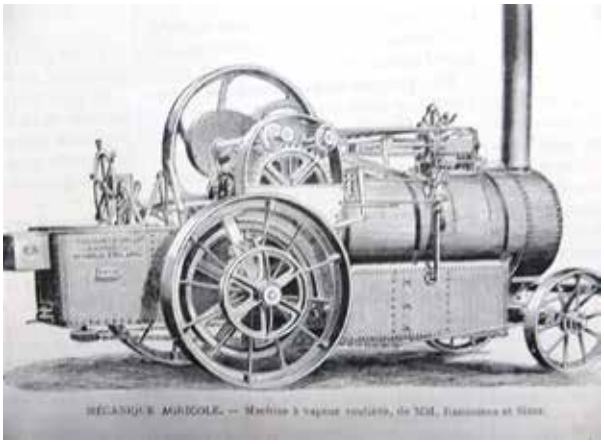
公式日記である『航西日記』の 6 月 20 日には，博覧会の様子が 18 ページに亘って，丁寧に書かれている[48]。そこでは，まず会場の広さ，場所，そして日本のスペースと展示品に日用品と「呼器珍品」が多く含まれていることなどが書かれている。つづいて，「人工の精しく学芸の新なる欧州競ふて著鞭（巧名：著者注）の先を争ふ故に此の会に出せる物品は何れも巧智を究め奢靡（異常な贅沢：著者注）を尽し，声価を世界に博めむとす」

(47) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，167 ページ。
(48) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』80-97 ページ。

と，蒸気機関などの素晴らしい最新技術が競って展示されているが，「我輩其学に達せざれば其理を推究する能はず雲烟過眼に看了すること遺憾といふべし」と，技術の理論・内容を理解できないことが残念と述べている。そして，同日の日記の他のページにおいても，「学術器機」や医療関係の道具，測量機器，通信機器などの新発明の製品が多く並んでいて，ヨーロッパ人でも一週間はないと十分と見ることはできないと思われるが，「我輩語言通ずる能はず識見凡劣なる加ふるに交際公務ありて数日縦観するを得ざるにより全く夢裡の仙遊其光景の一班を模糊に記すのみ」(49)などと，語学力と知識がなく時間もないことから，様子を不鮮明に書くことしかできないと重ねて書いている。素晴らしい機械，理解したい技術を目の前にして，語学力，知識，時間がなく，吸収できず残念だという渋沢の気持ちが，良く表れている記述である。

そして，6 月 20 日の日記は，展示品について，次のような機械類，絵画，貨幣，織物，植物などについて説明がなされている(50)。まず「亜米利加より出せる耕作器械紡績器械は就中其尤たるものと称すべし英国は之に亜ぐの説あり」と，耕作器械，紡績器械は米国製が最高で次が英国製らしいなどと記している。展覧会で器械を見て，渋沢が判断したのではなく，だれかから聞いた情報を書いている。

イラスト⑤



万博会場に展示された農業器械（英国製）
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P. 316

会場には大砲などの大型な武器も展示され，大きな機械や迫力のある音が出るような器械もあったはずであるが，そのような記述は全く見られない。

(49) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』86 ページ。
(50) 6 月 20 日の日記は，渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』80-97 ページに亘っている。

イラスト⑥

万博会場に展示された大砲（プロシア館）
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P. 177

イラスト⑦

万博会場に展示された蒸気機関車
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P. 101

むしろ，絵画について，「油絵は価貴く方丈室に掲ぐべきは小額にても工みなるは千フランクに下らず其上等なるは亦推知すべきなり」などと，詳しく説明しているが，写実の技法ないし色彩などの評価ではなく，渋沢が値段を気にしている点が興味深い。

〈度量衡の重要性を認識〉

つぎに展示されている各国の計り器具や貨幣について，「尺度量衡も各国現に用ふる所を聚めて列せり」と記述し，さらに「貨幣は万国交通の本資なれば。各国其制を異にするには四海一家の誼に於て欠典なれば」「之を同規一致に帰せしむること至便の念を生せしめ(51)」るとし，度量衡と貨幣の各国の共通化が大事と説いている。渋沢が後に携わった度量衡と貨幣の政策には，この時の着想が関係したように思われる。最新鋭の珍しい機械類が展示されている博覧会で，国毎に異なる貨幣を見て，展示品の中では地味であったに

イラスト⑧

万博会場で展示された絵画（オランダ館）
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P. 193

も拘わらず，その共通化を述べている渋沢の思考に特に注目すべきである。つぎに，医療器具，測量器，通信機，絹織物の展示があったと記している。そして，世界中の動植物を集めた建物があるという記述にも注目すべきである。これは渋沢が度量衡など国策に直接影響があるような制度だけでなく，産業には直接関係がないような自然科学の研究のための制度にも興味を示したことを意味する。

その他のものについては，3つを除いて，場所の番号と展示品の名前のみが簡単に記されている。その3つとは，ダイヤ細工所，各国の演芸，そして日本の茶店の展示に関するものである。ダイヤについては，宝石の中で最も高価なもので，婦人の指輪・首飾りに使われるなどと説明している。各国の演芸に関しては，たまたまアフリカの踊りを見たのか，遠くから見るだけで十分などと全く興味を示していない。見ることができた展示についてのみ日記に記したのであろう。

さらに会場の様子について，「場中排列する物品其価の幾千万にして其貨幣にても得難き希代の珍宝等諸邦より運輸回漕して丘陵のごとくなれば防火の用心を厳にして内部は火を禁じ地下は水を繞らし備えとす」と記し，「此の会は物品の優劣工芸の精疎を比較考訂するのみならず学芸上の諸科も世界の公論と日新の智識とに由て古来よりの疑団を決し或は霊妙の新説を諮問する為」各国より鑑定人を集めて，評価し，褒賞することとなっているとし，その鑑定人の国別の人数を記述している。これは，渋沢が青年時代に藍の葉を買い集める際に，藍の出来に応じて宴席の席次を決め農家の競争意識を高め，良い藍の生産を奨励した経験から，博覧会において表彰制度があることに着目して，詳説したと思える。

ところで，渋沢は，徳川昭武に随行して，博覧会場に，この6月20日の他に，7月3日の午後にも訪れ見学している。徳川昭武はさらに，9月1日と10月12日にも博覧会を見学しているが，この2回の見学に渋沢が随行したかどうかは，はっきりしない。6月20

(51) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』84ページ。

日以外の日記には，いずれもせいぜい同道者の名しか記されていない。6月20日の記述はとても詳しい。他の日に見学した場所なども纏めて，この日の日記に記した可能性もあろう。一日で見学しきれないような内容となっている。

7月1日，一行はナポレオン三世より博覧会の表彰式に招待された。式典ではメダルなどが各国に授与され，その際のナポレオン三世が行った演説は，およそ以下のような主旨の内容であった(52)。「万国博覧会を12年ぶりに開催し，その表彰式のために朕は来場した。もし古代オリンピックの式典を祝うギリシャ人の詩人が，この表彰式に参列していれば，進歩のための知恵の競争を見てどのように言うのであろうか。いろいろな物を集めて，物質的な興味だけが，博覧会の目的ではなく，調和と文明に基づく知恵のコンクールとなっている。ここで国々は集うことで，知り合いとなり，憎しみは消え，互いの価値を評価することとなる。正にユニバーサルの名に相応しく，最先端の商品と古くからある実用品が揃っている。従来，労働者階級のためのものに関心が集まったことなどなかった。彼らの物質的要請，教育，生活用品などの全てが対象となっている。このように，全ての分野の物が改良され，科学が素材を自由に制御できるようになれば，人類は偏見や悪い感情を克服できるようになるであろう。」そして，各国の代表団などに対する礼で結ばれた。

このナポレオン三世の演説の内容については，渋沢が公式記録として記した『航西日記』に日本語訳が掲載されていて，上記の主旨と同様の内容となっている(53)。ところが，晩年に口述筆記された『青淵回顧録』を見ると，内容がかなり変化し，つぎのような内容の部分が加わっている(54)。「『凡そ人智の進歩を図るには，種々の方面から種々の方法が行はれる。或ひは書籍によって研究するも一つの方法であるし，耳を以てするも亦一つの方法である。併しながら実物を供へて直接目を以て見，手を触れて知る事は何れの方法よりも最も感じが深く，効果が多い。百聞一見に如かずの譬へがあるのも之れを裏書していゐる。』『若し之れを見て感奮興起せざる者があるならば，此の社会に生存して居つても何等益する処がないから，寧ろ死んでしまつた方がよいと思ふ。』」とナポレオン三世が述べたというのである。実際には述べていない内容が渋沢の回顧録に加わったのは，直前の大臣などの演説が混ざって，一体となったという理解もできる。大臣らの演説にそのような趣旨の発言が含まれていた可能性もある。しかし，欧州では，万博は以前にも行われており，出品物に「手を触れて」興奮したのは，渋沢本人で，渋沢の感想をナポレオン三世に言わせてしまった可能性が高いと思われる。渋沢は，万博で，新しい技術・文明に直接触れ，大変感激し，感激しなければ，「死んでしまった方が良い」などの表現となったとも考えられる。

(52) M.Fr. Ducuing, L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier,『1867年万博』P.298-299の7月6日付けの記事“Après ce discours, l'Empereur prononça les paroles suivantes;”（著者が抄訳）による。

(53) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』110-113ページ。

(54) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，176-177ページ。

イラスト⑨

褒賞授与式のイラスト 左中央にナポレオン三世が居る
L'Exposition Universelle de 1867 Illustée, Tom Premier P.296-297

〈新聞の便利性を認識〉

現地の新聞（Le Temps 紙）は，万博の記事を EXPOSITION UNIVERSELL とタイトルを付けて連日のように報じている。例えば，7 月 1 日には，「フランスでも外国においても，あまり知られていないが，万博は発案から 50 年経ち，いろいろな物を展示して教える場所である」という書き出しで，万博の意義などを詳しく説明している[55]。

このころの渋沢の日記には，新聞記事の内容を数ページにわたり翻訳して紹介している。例えば 7 月 18 日の日記には，前日の新聞が万博の日本館の様子を伝える記事を紹介し，7 月 22 日の日記には，日本の手品師や展示品について説明した記事の内容がかなり詳細に翻訳されて書かれている。渋沢は，この時フランスで初めて新聞というものの存在を知り便利なものと考えた。それが帰国後に彼の新聞社設立に繋がった[56]。

1867 年 8 月 8 日の Le Temps 紙には，次ページのような広告が出ている。左が美容院で右がチョコレートの広告である。このころのパリには，現在と変わらないような消費文化が既に花開いていたことが，この広告から読み取れる。

ところで，当時，写真はまだあまり普及しておらず，新聞などの挿絵もイラスト画がほとんどであった。当時のパリの様子を撮影した珍しい写真が残っている。セピア色に変色しているが，既に現在の街並みとほとんど変わらないような建物が並んでいることが分か

(55) 1867 年 7 月 1 日の Le Temps 紙の書き出しは，"Pendant plus d'un demi-siècle, tant qu'on ne conhaissait, en France ou à l' étranger, que des expositions de l'industrie, il ne serait venu à l'idée de personne de réclamer, parmi les objets exposés, une place pour les méthods d'enseignement." としている。

(56) 渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，137 ページを参考とした。

イラスト⑩

1867年8月8日のLe Temps紙の広告欄

写真⑯　1866年のパリ

Charles Marville p.99

る。馬車が写っていなければ，古い写真と分からないはずである。

後年，渋沢は，パリのファッションについて詳しく新聞が連日のように報じていたと述べている(57)。当時の日本人には，なかなか理解できないような華やかな都会であったろう。そのような中で，渋沢は，いろいろと珍しいものに触れながらも，それらのものにはあまり興味を示さず，特に新聞という仕組みに興味を持ち高く評価していた点に注目すべきである。

第2節　パリ万博とサン＝シモン主義の関係

パリ万博はサン＝シモン主義者により企画されたものと言える。サン＝シモン主義とは，1760年にパリで生まれたクロード・アンリ・ド・ルヴロワ・サン＝シモン伯爵が提唱した考えを彼の死後に弟子たちが広めたものである。サン＝シモンの考えは，国王がフランスを統治する体制を認めつつ，農業者・製造業者・商人などの産業者に経済の運営を任せるべきとし，「平和的手段，つまり議論，論証，説得という方法こそ，公共財産の管理を貴族，軍人，法律家，不労所得者，役人たちの手から離させて，最も重要な産業者の手に移させるために産業者たちが用いる，あるいは支持する，唯一の方法である(58)」と提唱した。その理由として，「産業者は国民の二十五分の二十四以上をなしている。それゆえ，彼らは肉体的な点で優越している。すべての富を産出しているのは産業者である。それゆえ，彼らは財力をもっている。産業者は知性でも優越している。なぜなら，彼らの才覚こそ，公共の繁栄に最も直接的に寄与しているからである(59)」と彼は主張した。彼は，公共財産の管理を貴族などから産業者に移すべきと主張しながら，王制の維持に配慮し，「フランス国王は今日と同じように，フランスおよびフランス人の王であろう。最も重要な産業者たちが公共財産の管理の役に任じられるということからただちに結果することだが，

(57) 渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，137ページを参考とした。
(58) サン＝シモン著，森博訳『産業者の教理問答』，18ページ。
(59) サン＝シモン著，森博訳『産業者の教理問答』，18-19ページ。

国民の圧倒的大多数は税金が軽減されることにより」,「いっそう幸せになるので，彼らはこれまでよりもずっと国王に愛着を抱くようになる[60]」などとしている。サン＝シモンは暴力的な行動を嫌い,「平和的手段だけが築き上げたり建設したりするために，つまり堅固な体制を樹立するために用いることができる唯一の手段である[61]」としている。そのことから王制の維持を前提としているが，彼の考えは素朴ながら資本主義的なものであったと思える。

1825年にサン＝シモンが死去すると，弟子たちにより「サン＝シモン教会」が設立されるが，風俗が乱れるとして関係者が有罪を宣告され，この教会はなくなってしまう。しかし，サン＝シモン主義は多くの支持者により修正が加えられつつ受け継がれた。サン＝シモン教会の関係者に，経済学者のミシェル・シュヴァリエという人物がいた。1851年にナポレオン三世がクーデターで王位に就くと，シュヴァリエは1867年パリ万博を提案し，シュヴァリエが中心となって開催が準備された。万博はサン＝シモン主義者により開催されたもので,渋沢は万博を見学したりナポレオン三世の褒賞式の演説を聞いたりして,間接的にサン＝シモン主義に接したこととなる[62]。

第3章　欧州各国歴訪，幕府崩壊により留学中止

第1節　欧州各国歴訪

フランス皇帝との謁見，博覧会の式典など公式な行事も終わり，徳川昭武はドイツ，イギリスなど各国を歴訪する手筈となっていた。ところが，昭武（公子）の随行者を巡って問題が生じた。「外国係の幕吏と民部公子付の人々との間に一つの面倒な問題が起こった。」幕府の役人の外国の風習に従って，仰々しい共連れは避け少人数で回るべきとの主張に対し，お供の人々が反対し，一歩も譲らず，外国奉行も「大いに閉口」するという事態が発生した[63]。「一行中の田辺蓮舟や杉浦靄山等と種々相談をしたらしいが，適当の方法も浮ばないので，私に相談を持ち掛けられた」というのである。そこで，渋沢はお供の人々と交渉に及び，帰国命令が出る事を仄めかしつつ，3人ずつ交替でお供することを提案したところ,「一同も更に熟慮の末漸く此の折衷説に同意したので，其趣きを奉行や御伝役にも報告し，異境に於ける醜い争論も幸ひ無事に納まつた」というのである[64]。当時の階級社会にあって，渋沢の下役という立場を考えれば，このエピソードから，渋沢のずば抜けた調整能力が窺える。徳川慶喜が渋沢を随員に選んだのも，このような能力を見込んでのことであったのであろう。

9月3日，一行は欧州各国を歴訪するためパリを出発した。9月4日，ベルン絹織物の工場を見学した。5日近郊のツーンにて，軍事施設を見学した。渋沢は農民が年に一ヶ月ほどの訓練を受けていて,「小国といへども挙国二十万の臨時護国兵あり其法簡易軽便」でよくできたシステムだと感心している[65]。渋沢は過去に一橋家に仕えていた折りに,

(60) サン＝シモン著，森博訳『産業者の教理問答』，64ページ。
(61) サン＝シモン著，森博訳『産業者の教理問答』，16ページ。
(62) パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，71-73ページを参考とした。
(63) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，178-179ページ
(64) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，181ページ。

志願者を募って兵隊を組織した経験があり，スイスの民兵組織に感心したようである。ところで，旅行中，美しいスイスの景色を渋沢は楽しんだようで，ベルン市街は「眺望最佳なり」とか「高山モンブランを望む白雪堆く夕陽に映じ尤壮観なり」などと記している[66]。9月8日に時計工場に行ったが，「此の国有名の時計を製造する日内瓦（ジュネーブ：著者注記）といへる所に抵り其技を見人々多く陪し午前十時汽車」に乗ったと簡単に記し，渋沢は意外なほど興味を示していない[67]。日本に時計メーカーなど全くない時代に，スイスに行って，渋沢が時計工場にあまり興味を示さず，民兵組織に強い興味を示した点は，大いに注目される。

9月13日，昭武らは，スイスを立ちオランダに向かった。オランダとは古くから親交があり，9月16日，国王に招かれ王宮を訪問している。「王宮より差回されたる迎えの馬車に乗じ五時半王宮に着し」，「民部公子より両国懇親の祝詞をのべるるや，国王も厚く来訪を謝し，今後益々両国の親善を加ふべき旨を述べらる」とのことである[68]。同国滞在中に鉄砲製造所，軍艦製造所，ダイヤモンド研磨工場，風車，博覧会など多くのものを見学した[69]。9月23日に再度，国王より王宮に招かれ，その折に，かつてナポレオンに侵略された時に，「長崎港のみは依然として国旗を掲」げていたことに対し国王が礼を述べたとのことである[70]。

〈実業の重要性を認識〉

9月24日，列車にてブラッセルに到着した。9月25日，国王に謁見し国王主催の劇を見た。9月26日より，陸軍学校，軍関連施設，砲台，砲製造所などを見学した。9月30日，機械製造所，製鉄所などを見学した。10月6日，王宮にて饗宴があり，国王と親しく話をする機会があった。後に渋沢は，「白耳義（ベルギー：筆者注）に参りまして王様のレオポルド二世にお会ひしたときに」，「徳川民部大輔，之に対して発せられた言葉をどう判断して宜いか，今に其の判断に苦しんで居ります」。王様が「『日本は将来鉄を沢山造るようにしなければならぬ，併し鉄を造るには色々の設備を要するから相当の年限が掛かる，其間は他国の鉄を買はなければならぬ，其の場合は白耳義の鉄を沢山買ふやうになさい』，それを聞いて居つて変に感じたのは，王様が何も鉄の宣伝をせぬでも宜さそなものだ」などと述べている。王様が自国の商売を手伝っていることに渋沢は，大変驚いたのである[71]。このことは，洋行で最も印象に残った事柄の一つであったようで，彼は帰国後いろいろな機会にこのエピソードに言及している[72]。

---

(65) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』145ページ。
(66) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』147-148ページ。
(67) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』147ページ。
(68) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，192ページ。
(69) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，192-193ページ。
(70) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，195ページ。
(71) 渋沢栄一（青淵先生）「年頭謹話」（『龍門雑誌』485号），87-88ページ。
(72) 渋沢栄一（青淵先生）「年頭謹話」（『龍門雑誌』485号），86-88ページに，王様の発言をどう判断すべきか困ったとのエピソードを参内の折り，宮中にて，昭和天皇との会食の席で披露したところ，「お上は何とも仰しやいませんでしたが，他のご連中は成程そう言はれて見れば一寸判断に困ると」笑ったとの記述がある。

〈鉄道の便利性を認識〉

10 月 9 日，一行は列車でベルギーを立ち，パリに戻った。パリで一週間ほど昭武らは博覧会の会場に行ったり市内見物などしたりして過ごした[73]。

10 月 17 日，一行はイタリアに出発した。当時のイタリアは，鉄道が一部しか開通しておらず，移動は大変で，「サンミセールよりスーザまで馬車の馬を替る六次其始は二匹四匹又は六匹中は八匹険路にいたりては十二匹を駕す其難険しるべし」などと記している[74]。渋沢は鉄道の重要性を理解したことであろう。一行は，フィレンチェ，ミラノ，ピサ，トリノ，ローマなどを訪問した。渋沢は，「チユラン（トリノ）は伊太利の奮都だけありて，市街も広く諸宮殿などもいと美麗なり」「別宮の玄関及び石階とも総てマルブルという白き石（大理石）にて築き立て，最も瑩潤光沢あり」と簡潔に記している[75]。しかし，イタリアの各地には，ヴァチカン宮殿を始め素晴らしい建造物が，多く建ち並んでいるが，それらについては特に書き残していない。余り興味を持たなかったのであろう。

11 月 6 日，一行はマルタ島に行き，そこからマルセイユに渡り，リヨンを経由して，11 月 18 日，一行はパリに戻った。行事などもなく，一行は休息を取ったのであろう。『航西日記』に，晴無事，曇無事という記載が続いている。

12 月 1 日，一行は英国へ向けパリを立ち，カレイ港に到着した。12 月 2 日，英ドーバー港より上陸した。同日の夕方，一行は列車にてロンドンに到着した。12 月 3 日，女王に謁見し，夜には，女王招待の観劇をした。英国の昭武の扱いは，かなり型通りのもので，フランス，ベルギー，オランダのような歓迎はされなかったようである。英国訪問時の『航西日記』の記述からそれが読み取れる。

〈新聞の便利性を再度認識〉

12 月 5 日には，一行はタイムス社を訪問した。渋沢は，「此の新聞局は欧州第一の大局にして，其の刻板至って精密にして文体は頗る簡易なり。一日十人にて二時間に十四万枚余の紙数を刷り出し，毎日諸方に売り捌く。其の器械甚だ巧みにして且つ便利なり」と書き新聞に興味を持っている様子が良く分かる[76]。

12 月 6 日，一行は，ロンドン郊外の軍事施設に行き，大砲を始めとした色々な武器を見学した。渋沢の残した日記には武器の種類について記述はあるが，その性能，威力などの説明はなく，寧ろ武器類の製造方法に興味を示し，「此の進歩せる製法感ずべし」などと記している。渋沢は，珍しい物，大きな機械・建物などに感動せず，つねに物事の仕組み，製造方法に興味を示していたようである。その後，連日のように英国から軍事施設を案内されたようで，日記には，それらの記述が並んでいる。

12 月 10 日には，イングランド銀行を見学し，「場所広大にて製作の方頗る簡易軽便且つ厳粛なり」「造幣局は地金の溶陶より板金の製法，および円形圧裁する器械，幣面の模様を印出する方」，「造作せし貨幣の分量権衡の検査等，また紙幣の製造，極めて精緻にて，

(73) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』165 ページに，「10 月 12 日雨午後一時人々博覧会を又看るに陪す」と記されている。

(74) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』169 ページ。

(75) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，205 ページ。

(76) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，218 ページ。

方法も亦厳密なり総て順次に局を分ち其器械を陳列し細大至らざる所なし是等を見ても国の富庶なる推知すべし」と記している[77]。印刷機など日本に全くなかった時代にも関わらず，鋭い観察をしている。

第2節　幕府崩壊により留学中止

12月16日，一行はドーバーを立ち，17日夜，パリに戻った。昭武は種々の行事，「各国の巡遊も終つて専心勉学をするようになつてから，一月計り経つと」，「公子に属する一切の役目は私一人きりとなり，水戸から付き従った御供の中で病気の為め二人帰国したので，人数も大分少なくなつた」[78]ということで，渋沢の役目は次第に増した。そして日本の情勢が急変する。渋沢によると，「此年の暮頃になつて祖国の日本に於いては，慶喜将軍が政権を朝廷に返上したともいふ評判が新聞に依つて伝へられ，続いて様々の出来事が続々として報道せられたが，民部公子御付の人々は勿論，公子付添の仏国士官も恐らく虚説であろうと言つて信用する者が無く，其他の仏国留学生達も半信半疑の有様であつた」とのこと。そして「私丈けは日本に居る当時から，幕府は早晩倒潰する運命を持つて居る事を予想して居り」，「此度の報道も恐らく事実であろうと思ひ，他の人々にも私の意見を申述べたやうな次第であつた」と後年記している[79]。驚くべき内容であるが，渋沢が政権返上に関する報道が事実であろうと他の人に話をしたというのは，本当のことであろう。公子の御付の人など幕府の関係者が，この報道を信じないというのは止むを得ないこととも言える。徳川家に仕える身であればそのように考えるのが自然であろう。しかし，留学生は普段から新聞などに接する機会も多く，新聞報道にあまり誤報はないようなことも理解していたと思われ，おそらく半信半疑であったというような状況だったであろう。そのような中にあって，「報道が事実であろう」と渋沢が口にしたということは，注目に値する。渋沢の状況分析が正確であったことを意味しよう。

幕府が崩壊したことから，「公子と私と御相手の少年と御供二人の五人とする事に決議し」，渋沢は，留学を続ける場合に備えて，余剰金があるので「私が一切の事務を執るやうにたつてからは，出来得るだけ倹約して余裕を作るやうにして居つたので，翌年の二月頃には二万両ばかりの余裕を見る事が出来たから，フロリヘラルド氏の勧に従つてフランスの公債と鉄道株券を買ひ求め，万一の場合の用意として置いた」とのことであ[80]。公子が水戸家を相続することとなり，留学の計画は中止となった。帰国に際し，渋沢は買った債権に関して，投資して「半年後に売た所が政府公債の方は買入れた時と余り値段が変らなかつたが鉄道公債の方は相場が上がつて居て，五六百円儲つた勘定になりました。此時に成る程公債と云ふものは経済上便利なものであるとの感想を強くしました」と後年述べている[81]。これは実際に自分で投資して出た結果に基づいた感想なのであろう。金融取引は実際に自分で行って初めて理解できるような面があると言える。渋沢に強い印象を

(77) 渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』197ページ。
(78) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，225ページ。
(79) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，225ページ。
(80) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，227ページ。
(81) 渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265号），11ページ。

与える金融取引の経験となったと思われる。

渋沢は，万が一の場合も公子の留学資金が不足しないように，「故郷の父に書面を寄せて事情を具に申送り，改めてお願ひした場合には何卒送金して呉れるやうにと願つたやうな次第であつた」が[82]，計画は途中で中止となった。余剰資金があったことから，最後まで残った一行に加え，イギリス留学生の全員が無事日本に戻ることができた。10 月 19 日（1868 年），一行はフランス郵船のベリューズ号にてフランスを離れた。

渋沢は，昭武に最後まで随行して，多くの知識と経験を得ることができた。後年渋沢は，「自分の一身上一番効能のあつた旅は四十四年前の洋行と思ひます，此の時が銀行を起す事とか公債を発行するとか外国では役人と商人の懸隔が日本の如くでない，是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付た，是は余程効能のあつた事と思ひます」と述べている[83]。昭武に随行して洋行したことが，渋沢の後年の活動に大きな影響を与えたことが窺える言葉である。

第 1 部「小括」

まず渋沢がどのような姿勢で洋行に臨んだのか確認する。渋沢は使節に参加できることを大いに喜び，意欲的に出発の準備をした[84]。そしてフランスに向かう船中では，もともと攘夷論者であった渋沢も技術の進んだ外国の良い点を何でも吸収したいと考えた[85]。フランス語は出発前に日本でフランス人の教師について基礎的なことは既に学んでいたが，フランス料理を含めフランス文化に触れることはほとんどなかった[86]。攘夷論者であった渋沢も洋行が決まると，まず語学を習得し[87]，西洋の文化を大いに学ぼうと考えるようになった。そしてフランスに到着するとすぐに教師を雇い，公務の合間に熱心にフランス語の習得に励み，一ヶ月程で買い物などはなんとかなる程度の語学力を習得した[88]。

渋沢は，パリ万国博を見学し，各国が競って自国の製品・産物を出品していて，渋沢の目には印象的な経験となり，機械文明を肌で知ることとなった。帰国後に産業を発展させるために多くの企業を興す発想の原点となった[89]。渋沢はフランスの文化は日本と比べ

---

(82) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，230 ページ。

(83) 渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265 号），12 ページ。

(84) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，126 ページに，「自分はこの洋行の内命を大いに喜んで，郷里の父へもその事を文通した」と述べている。

(85) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，128 ページに，「これまで攘夷論を主張して外国はすべて夷狄禽獣であると軽蔑して居たが」，「兵制とか医学とか，または船舶，器械とかいうことはとうてい外国には叶わないという考えが起って，何でもあちらの好い処を取りたいという念慮が生じて居った」と述べている。

(86) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，127 ページに，「語学の教師であった仏人のビランという人に招宴されたが，この時始めて洋食の午餐もたべました」と述べている。

(87) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，128 ページに，「早く外国の言語を覚え外国の書物が読めるようにならなくちゃいけないと思った」と述べ，さらにフランスに向かう途中，「船中から専心に仏語の稽古をはじめて，彼の文法書などの教授を受けけれども，元来船には弱しかつ船中では規則立った稽古も出来ぬ」などと記している。

(88) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，130 ページに，「あたかも書記と会計とを兼ねての職掌であったが，平常はいたって閑散であったから，その間に仏語を勉強する考えで，一行中の両三人と申合せをして教師を一人雇うことにした。」「毎日教師を呼んで親切に教授を受けたから一カ月ほどにして，簡易の日用語ぐらいは片言なりにも出来るようになったによって，買物にいってもまず半分は手真似で用が弁するほどになって来た」と述べている。

るとあらゆる面で進んでいると認識し，後年書いた回顧録によると，中でも政治，軍事，経済，社交を勉強しようと考えたようである[(90)]。この政治，軍事，経済については理解できるが，つぎに社交という項目が出てくる。渋沢はフランスの産業のみならず，社交などの文化も勉強しようと考えたのである[(91)]。

渋沢は，徳川昭武の随行員として洋行できることを喜び，積極的な姿勢で出発した。乗船したフランス船で初めてフランス文化に触れた渋沢は驚き，また強い印象を受けながらも西洋文明に対する高い順応性を示した。そして渋沢は西洋文明を吸収するためには外国語の習得が重要と考え，船内でフランス語の勉強を始めた。途中寄港した上海でガス，電信設備を目にして西洋の進んだ科学技術に感心するとともに，西洋人がアジア人を酷く使う様子を見て，日本でも同様なことが起こるという危機意識を持った。続いて，香港，サイゴン，シンガポール，セイロンと寄港するが，渋沢は，現地の食べ物や風俗に関心を示し，好奇心が旺盛なことを強く窺わせる。スエズで上陸して，カイロに向かう途中，渋沢は大規模な運河の工事を目にした。渋沢は工事の規模よりも西洋人が国家の枠を超えて計画を進めていることに感激し，同時に大規模な工事を行うための資金を集める方法と高度な技術を勉強したいという気持ちを強く持ったようである。地中海を渡ってマルセイユに入港すると電信で連絡が入っていて，祝砲で迎えられたことから，電信に強い関心をもったようである。仏南部の軍港ツーロンでは武器よりも潜水服に興味をしめしており，軍事が優先した当時としては，めずらしく渋沢は民需製品に関心を寄せている点が注目される。

横浜を出発してから56日目にパリに到着し，グランドホテルに投宿した。このホテルは現存しており，開業当時とほとんど様子が変わっていない。当時の絵葉書やイラストを同じアングルで撮影した今日の定点写真と比較することで，そのことは良く分かる。徳川昭武がホテルから移り住んだ館や渋沢が下宿したアパートも概ね，残っており，ホテルも館もアパートも現在の日本人が訪ねてもとても豪華で立派な建物という印象を受ける。当時の江戸は，お城以外に，石造りの建物はなく，渋沢らは，パリの近代的な街並みに，驚いたことであろう。

徳川昭武一行が皇帝ナポレオン3世に謁見に向かうと，一行の姿をフランス人は珍しがり，多くの見物人が通りに出た。このことは，一行にとってもフランス文化は珍しいもの

---

(89) 島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，24ページも，万国博覧会を見学して「欧米近代社会が最新の軍備や機械を競い合い」，「経済のインフラを共有することで発展していることをよく見抜いて，その後の渋沢の行動の基軸となるような文明理解が」なされたと記している。

(90) 渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，172ページに，「其の当時のフランスは」，「文化の程度は日本などとは比較にならぬ程進んで居つた。それで私は何事も食はず嫌ひではいかぬ，それを食つて見て咀嚼消化せしめるようにしなければならぬと考へて居つたので，フランスの土を踏むと同時に進歩せる文化を研究する事に意を注いだのであつた。殊に政事，軍事，経済，**社交**を目的として熱心に勉強する決心であつたが，祖国の政変の為めに其の目的を十分に果たす事が出来ず，中途にして」（下線・太字は筆者が追記）帰国となり残念であったと述べている。

(91) 渋沢栄一著，大塚武松編『渋沢栄一滞仏日記（航西日記）』，46ページに，「此の夜茶の筵は尤禮会の一つなり親属知音男女とも日をトし夜饗後に集会し茶酒を設け和互に歓笑談話して一宵を徹すなり此の会は其身分により交際の事務なども表向の掛合にて争論に至るべきも歓笑中に彼我氷解する事ありと云又一局一部に冠たる職務に在るものは時々此の会を催し其局官を集め其才能を観試し其懇親を篤くし大に公私に資けありといふ仏国にてハソワレーと唱ふ」（下線は筆者が追記）と述べている。

であったということを同時に意味している。渋沢は劇場でバレエを見て，感激し，帰国後に劇場建設に関わったほどであった。また病院を見学した際も渋沢は感激し，すべての病人は病院で治療を受けるべきだと考えるに至った。

渋沢はパリ万博を見学した際に各国の計り器具や貨幣に興味を示し，大事な制度という印象を得て，帰国後に実践することとなる。そして，新しい技術・文明に直接触れることができ，感激した。また渋沢はフランスの新聞からいろいろな情報を得ることができ，新聞は便利なものと大変高く評価していた。帰国後の新聞社設立の素地となった。

フランスでの公式行事が終わると一行は欧州各国を歴訪した。その際に徳川昭武のお供に何人付くかということで，随行員らの間で議論が紛糾した際に，渋沢は素晴らしい調整力を発揮し，問題を解決させた。帰国後に多くの企業と関わる際の高い調整能力の片鱗を見せるようなエピソードであった。スイスの軍事施設を見学した際は，志願者による民兵組織が良くできていると感心した。しかし有名な時計工場を見学してもあまり興味を示すことはなかった。一行は各国において軍事施設や武器などを見学することが多かったが，これらについては，公式日記にあまり記録を残していない。むしろ，ベルギーを訪問した際に，皇帝が「わが国の鉄を使うように」と発言し，自国の商売を手伝うことに渋沢は驚いた。そのことは洋行で最も印象に残った事柄の一つであったようで，帰国後いろいろな機会にこのエピソードに言及した。欧州訪問は列車での移動であったが，イタリアでは鉄道が一部開通しておらず，馬車で移動し，鉄道の重要性を渋沢は良く理解することとなった。イタリアの大理石でできた立派な建築物に渋沢はあまり興味を示さなかった。イギリスでは武器類を多く見学するが，むしろタイムス新聞社とイングランド銀行の近代的な様子に渋沢は強い興味を示した。

欧州各国への訪問からパリに戻ると直に，幕府が崩壊したという新聞報道がなされた。その情報に対して，一行のメンバーや留学生らは，半信半疑であった。しかし，渋沢は「報道が事実であろう」と口にした。渋沢の状況分析が正確であることを意味するエピソードである。帰国準備にあたり，渋沢は徳川昭武の留学資金で購入した公債を処分し，利益を得て，金融取引を実体験した。それは貴重な経験となり，帰国後の金融に関わる素地を得たことと思われる。

以上をまとめると，渋沢は，昭武に最後まで随行して，多くの知識と経験を得ることができた。後年渋沢は，「自分が旅行したなかで，自分にとってもっともよい影響があった旅は，四十四年前のこの洋行だったと思います」と述べている。

渋沢が使節に参加するに際して取った姿勢はつぎのようなものであった。渋沢は使節に参加できることを喜び積極的な態度で渡航した。そしてフランス語の習得に積極的に努めた。渋沢は，帰国後に日本で実践しようと積極的に進んだフランスの産業・文化の吸収に努めた。そして渋沢は，欧州を訪問し，電信などの新しいシステムの効能，産業全般の発展の重要性，教育の重要性，財政健全の重要性，資本を合わせる仕組みの重要性，劇場の効能，社会事業の重要性，病院の重要性，度量衡の重要性，新聞の便利性，実業の重要性，鉄道の便利性を認識したのである。

第2部　渋沢栄一が日本で実践したこと

1868年（明治元年）12月16日，渋沢は帰国した。そして渋沢は，徳川慶喜が謹慎していた静岡藩の勘定組頭となり，翌年，藩の産業開発のために商法会所を設立し，実務責任者となった。

1869年10月，渋沢は新政府に呼び出され，大蔵省租税正という職を仰せつけられた。1873年（明治6年）5月に退官するまで，井上馨の下で，明治政府の基礎づくりに尽力した。そして，民間に下り，同年6月に第一国立銀行の設立に参画し，同行の実質的な経営を担当することを皮切りに，多くの会社設立に関与する。「生涯関係した企業の数が約五〇〇，社会事業の数が約六〇〇」と言われている(92)。渋沢は後年，幕末期の洋行が自分の一身上一番効能のあつた旅と語っている(93)。渋沢は欧米各国の政治体制などにはあまり関心を示さず，もっぱら産業の発展に注目し，帰国後も産業発展に尽力した(94)。

渋沢が帰国後に行った仕事や関与した事業には，渋沢が徳川昭武に随行して欧州で得た知識や経験が影響したと思えるものが多い。第2部では，渋沢が帰国後に日本で実践した施策や事業にはどのようなものがあるかを検証する。

渋沢は，進んだフランス文化に強く感銘を受け，日本で実践したいと考え洋行時に積極的に社会の仕組みを学んだ。そして帰国後に，大蔵省において，あるいは民間人となってからも多岐に亘り実践している。それらの中でも，特に洋行で学んだことと深い関係があると考えられるものとして以下のようなものがある(95)。

第4章　官と民の関係，貨幣と度量衡など国の基本的な事項

第1節　官と民の関係

フランスにおいて，官と民の関係が対等であることに驚き，日本においてもそうあるべきと強く感じたようで，後に，「自分の一身上一番効能のあつた旅は四十四年前の洋行と思ひます」が，「外国では役人と商人の懸隔が日本の如くでない，是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付た」と述べている(96)。

1873年（明治6年），渋沢の上司の井上馨と江藤新平が予算のことで意見が合わず軋轢が激しく，井上が辞職すると渋沢も辞職した。後年，渋沢は，「依願免出仕という辞令が下りました。これで全く大蔵省すなわち官途の関係は微しもない身分となったによって，そこで前年から企望して居た銀行創立について，三井，小野両家の人々とも協議して，銀行事務を担任することを約束して，その月からこれに従事することになりました」と述べている(97)。官尊民卑の考えの強かった明治初期に渋沢が，官職に全く拘泥せず民間に下野

(92) 公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，3ページ。
(93) 渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265号），12ページに，「自分の一身上一番効能のあつた旅は四十四年前の洋行と思ひます」と述べている。
(94) 島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，26ページは，「渋沢は他の洋行者たちと違って，もっぱら商工業者の地位や銀行や鉄鋼業など幅広く近代産業やビジネスの実務に興味を持って新知識を摂取した」と記している。
(95) 渋沢の肩書などは，主に，公益財団法人渋沢栄一記念財団編を参考とした。
(96) 渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265号），12ページ。

したのも，フランスで官と民が対等であることに感銘したことが影響したように思える[98]。

渋沢の考え方は，民は官に対して対等であるためには，事業の第一義的なリスクを自ら取ることが必要で，そのためには合本主義（次章で説明する合本組織により人を組織化して会社を運営するという考え方）により資本的な基盤が必要があると考えた。そして合本主義が成立するためには，商法などの法律と共通の簿記・会計制度の整備が必要で，そのことにより特定の個人による不当な利益誘導が避けられると考えた[99]。

また渋沢は，事業は本来，民間が行うべきという立場（私有論）に立ち，鉄道などの国有化については，常に反対し続け，民間が自立して競争力をつけるべきであると主張した[100]。

第２節　貨幣と度量衡

渋沢は万博会場で，各国の展示を見て，貨幣と度量衡の制度の確立が経済活動に極めて重要であることを察し，各国の通貨が異なることは交易に不便となることに気づいていた[101]。

帰国後，渋沢は徳川慶喜が蟄居していた静岡で藩の財政を立て直すために，「商法会所という名義で一つの商会を設立し」，「あたかも銀行と商業とを混淆したような物[102]」をつくり事業を始めた。ところが，明治２年10月に新政府より，出仕の要請があり，東京で大隈重信に面談すると，「辞職などといわずに，駿河の事務を片付けてその上で十分大蔵省に勉励せらるるがよい」，「今足下の履歴を聞くに，やはり我々と同じく新政府を作るという希望を抱いて艱難辛苦した人である」，「出身の前後はともかく元来は同士の一人であります」，「殊に大蔵の事務について少しく勘案もあるから，是非とも力を戮せて従事しろ，と懇切に説諭せられて[103]」，大蔵省に奉職することとなった。着任後，渋沢は再度大隈を訪問し，「今大蔵省の組織を見てもその善悪も分りはいたしません，しかしながら現今目撃した有様では，過日御説を承った諸般の改正はとうてい為し得られぬ」と述べ，「このさい大規模を立てて真正に事務の改進を謀るには第一その組織を設くるのが必要で，これらの調査にも有為の人才を進めてその研究をせねばならぬから，今省中に一部の新局を設けて，およそ旧制を改革せんとする事，または新たに施設せんとする方法・法規等はすべてこと局の調査を経てそのうえ時のよろしきに従ってこれを実施する」ことを提案した。

---

(97) 渋沢著，長幸男校注『雨夜譚』，199ページ。
(98) 渋沢資料館の桑原功一学芸員も同様の意見である。
(99) 島田昌和『「民」のリーダー・渋沢栄一の視点から』，59-62ページを参考とした。
(100) 恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」（『渋沢研究』第24号），21ページを参考とした。
(101) 渋沢栄一著，大塚武松編『渋沢栄一滞仏日記（航西日記）』84ページに，「我邦の大小判」などは各国貨幣の中で形が目立っており，また「我邦量の如き又円形中方正なるを以て特に目立」っていた。「貨幣は万国交通の本資なれば各国其制を異にするは四海一家の誼に於て缺典なれば之を同規一致に帰せしむこと至便の念を生ぜしめ」た，と万博会場を訪問し，各国の貨幣と秤の展示を見た際に感じたこととして述べている。また島田昌和（2011），24ページは，この点「欧米近代社会が」，「戦火をともないながらも経済のインフラを共有することで発展していることをよく見抜いており，その後の渋沢の行動の機軸となるような文明理解がよくあらわれている」としている。
(102) 渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，165ページ。
(103) 渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，169ページ。

この考えに大隈も同意し，明治2年12月に改正掛が新設され，明治3年春に渋沢が掛長となった[104]。すると渋沢は，「大隈に申請して静岡の藩士から，前島密，赤松則良，杉浦愛蔵」らを改正掛に登用し，他にも文筆，技術，外国語が得意な人を集めて，合計で12～13人とし，渋沢は満足し，「すこぶる愉快を覚えました[105]」と述べている。渋沢は明治維新において，改正掛の掛長として，度量衡や通貨制度を含めた日本の基本制度の起案責任者となったと言える。

さて，渋沢は改正掛において，最初に度量衡，駅伝法と租税の改正，そして貨幣の整備から着手した[106]。渋沢は「租税の事，これは是非とも改正を要するから，充分の調査をしろと，大隈，伊藤も企望せられ，自分も租税正の職掌上しきりに考慮を尽してみたが，なかなか面倒なものであって，誰も困る困るというものはかりであったが，つまり物品で収税するのを通貨で収むるようにするという目的を立ててその調査に着手しました」と述べている[107]。しかし渋沢が調査してみると，物納を金納にするためには，米を現金化するためのマーケットが東京・大阪以外にないので，米を地方から東京・大阪に輸送する交通網が整備されている必要があることが，判明した。そのことから物納は明治になっても暫く続いた。

改正掛は租税制度，鉄道建設を重要課題として取り組んでいたが，最も急ぐ問題として通貨，公債，銀行制度の確立が存在した。渋沢は，「貨幣の改鋳の事もその前から一つの要務問題となって既に大阪に造幣局を作り，また貨幣の本位を銀にて立てるという評議は定まって居たが，この事は本省の事務中においてもっとも重要な事だから，格別精密の研究をせねばならぬ」とし，「また公債というものは欧米各国では専ら行われて居るが，我が邦ではどうあろうか。紙幣は既にこれを発行して流通はして居るがその引換の方法はどうすればよいか，諸官省各寮司の配置ならびにその事務取扱の順序はどうすれば便利であるか，などという事柄をば，米国人に人を派して研究させるようにせられたいと伊藤少輔の考案がでて」，「明治三年の十月，その議が容れられて伊藤がアメリカに行かれることに」なったと述べている[108]。そして伊藤がアメリカにおいて調査した内容は，「すべて大蔵省へ向けて具申になり」，「文書の往復はいずれも改正掛で取扱ったから，大隈へ書送った事柄には自分の連署したものが多くあったように記憶して居ます[109]」と渋沢は述べている。しかし，このアメリカのナショナル・バンクの発券方法に対して，大蔵省幹部はイギリスの中央銀行の正貨（金地金）も元に兌換紙幣を発行する方法を主張した。この方法は正貨を準備する時間を要することから，伊藤らは市中に出回っている藩札を不換紙幣により速く回収すべきとの立場から，ナショナル・バンクの発券方法を主張した[110]。未だに幕府

(104)渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，175ページを参考とした。。
(105)渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，175ページ。
(106)渋沢著，長校注『雨夜譚』，175ページに，渋沢は「まず第一に全国測量の事を企て，したがって度量衡の改正案を作り，また租税の改正と駅伝法の改良とはもっとも緊急の問題であるから，勉めてその法案の調査に注意し，その他貨幣の制度，禄制の改革または鉄道布設案，諸官庁の建築案まで，その緩急に応じて討論審議を尽し次第に方案を作った」と述べている。
(107)渋沢著，長校注『雨夜譚』，176ページ。
(108)渋沢著，長校注『雨夜譚』，178-179ページ。
(109)渋沢著，長校注『雨夜譚』，179-180ページ。

が発行した金銀貨さらに各藩が発行した藩札が独自に流通するという混乱した状態であった。伊藤がアメリカより送ってくる書状により貨幣制度をまず定めるべきということとなり，渋沢が明治４年に通貨政策の実務の担当となった(111)。大隈の後任として大久保が大蔵卿になると通貨政策に関して，意見が合わず，渋沢は苦慮した。後に渋沢は，「大久保はとにかく財政には注意せずして各省の需用に応じてその費用を支弁せんとする風だによって，自分は独りこの間に居て特に苦慮尽力をしました(112)」と述べている。

渋沢は，明治６年５月に上司である井上馨が辞職するまで，改正掛に席を置き，銀行制度，通貨制度，租税制度など国の基本的な事項に関し調査研究を行い，制度設計に多方面で貢献した。

第５章　合本組織・銀行業・倉庫業

第１節　合本組織

先にも述べたように，フランスに向かう航海の途中，渋沢はスエズで大規模な運河工事を見て大変驚いている。その工事は炎天下の厳しい条件の下，長期間に亘るもので，巨額の資金を集める必要があった。渋沢は個人や一国家のレベルを超えたものであることに気が付いていた。そのような大規模な工事を渋沢は日本で見たこともなく，後にフランスにて合本組織などによることを知り，この制度の重要性を実感したと思われる。後に渋沢は，欧州各国を巡回して最も感銘したのは，商工業が合本組織（合本主義）で発展していることだと語っている(113)。

帰国後，渋沢がどのような考え方に基いて会社の経営にあたったのかを以下に検証しよう。渋沢は大蔵省勤務時代に「商社ハ会同一和する者の倶に利益を謀り生計を営むものなれども又能く物資の流通を助く故え社を結ぶ人全国の公益に心を用ゐん事を要とす」と述べ(114)，会社組織に公益性を求めている。また渋沢は「商工業者が相当なる利益を得て発達するといふ方法を考へねばならぬ」，そのためには「一人の智慧を以て大に富むといふか，己れ自身は仮に其智慧があつたならば富むかも知らぬが，極端に云ふと一人だけ富んでそれで国は富まぬ国家が強くはならぬ，殊に今の全体から商工業者の位置が卑い，力が弱い

(110)この論争において，不換紙幣を発行するナショナル・バンクの発券方法について必ずしも正確に理解がなされていなかった面があり，岡田俊平『明治期通貨論争史研究』，232ページは，「ナショナル・バンク制度導入の可否をめぐる論議において，ナショナル・バンクの銀行券発行制度に関する理解が必ずしも明確なものではなかったことが知られるのである」と記している。

(111)渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，180ページを参考とした。

(112)渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』，185ページ。

(113)渋沢栄一（青淵先生）「偶然の転換と目的の達成」（『龍門雑誌』第510号），6ページに，「仏蘭西での留学は，遺憾ながら水泡となって帰朝したが，約二ヵ年仏欄西に滞在した間，またその間英吉利，伊太利，白耳義，和蘭，瑞西等を巡遊した時に，最も感じたのは，事業が合本組織で非常に発展して居ることと，官民の接触する有様が頗る親密であることとであつて，一面からは合本組織で商工業が発達すれば自然商工業者の地位が上つて官民の間が接近して来るであろうと思った」と述べている。また渋沢著，長校注，231-232ページに，「私はフランスで人々と接触したから」，「合本会社の経営はいかにするものであるか」「朧気に分かって居った」。資金を集め民間事業の活力を生むためには「日本においてどうしても株式組織によるよりほかはない，そうするのが最良の方法と私は深く信じたのである」と述べている。

(114)渋沢栄一『立会略則』，4ページ。

といふことを救ひたいと覚悟するならば，どうしても全般に富むといふ事を考へるより外ない，全般に富むといふ考は合本法より外にない」と述べている(115)。個人一人ではなく組織で事業を興し国力を増強すべきで，そのためには「合本法」で，商工業者の地位を高めるべきと考えたのである。渋沢が商工業者を重視している点，渋沢がフランスで万博などを通して間接的に接したサン＝シモン主義（上述第1部の「パリ万博とサン＝シモン主義の関係」の項参照）の考えと共通する点があるように思える。渋沢は「一人の智慧」とか「一人だけ富んで」などの表現で，人を資本と同様に国家の資源と考え，その資源である個人を組織化するのが合本組織であると考えた(116)。

また渋沢は，「商工業を盛にし国の富を進めるやうにして，其間に立つて商工業者の位置をも進めたいと考へたことが，それが論語に依つたといふのではないのです，是は唯私が自分の境遇としてさういふ方針に依つて経営したが宜からうと考へ定めたのであるが，其事業を行ふや標準は論語に依るが宜から斯ふ思ふた」と述べている(117)。つまり商工業者の位置を上げるべきという考えは，渋沢の立場・経験によるもので，論語からの発想ではない。経営の指針ないし拠り所として論語を考えたというのである。渋沢が言う組織とは株式会社などを指すが，「合本法」とは，単に株式会社を作るテクニックではなく，欧米流の会社組織に渋沢が論語を指針として倫理観・公共性を加味した独自のものと考えることができる(118)。

帰国後，渋沢は生涯に約500の会社設立に関与したと言われているが，会社の形態は，株式会社に限定されておらず，公共性の高い大きな会社は株式会社を提唱し，準じて有限会社，合資会社，合名会社，組合など目的，リスクに応じて使い分けている(119)。会社の形態が異なっていても，渋沢は一貫して，会社の関係者の利害を調整し，会社の存続を重視し，株主のために利益を求めているが，会社に非社会的な行動を慎むことを常に求めた(120)。この点，利益を追求する当時の欧米型の資本主義とは異なる考えを渋沢は持っていたと言える(121)。

渋沢の考え方は同じ日本の財界にあって財閥を形成した岩崎弥太郎とは，渋沢が常に公

(115)渋沢栄一「青淵先生の訓言」（『龍門雑誌』第249号），5-6ページ。

(116)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，60ページは，「渋沢は商工業を盛んにすることによって国家を富まそうとした。」「ここで重要なのは，提供される資源はカネに限らないということである。渋沢が『合本』というときの『資本＝資源』にはヒトも含まれる」と記している。また木村昌人「渋沢栄一研究のグローバル化―合本主義・『論語と算盤』」，72ページは，「渋沢の論考や講演を基にして考えると，『合本主義』とは『公益を追及するという使命や目的を達成するのに最も適した人材と資本を集め，事業を推進させるという考え方』を意味する」と記している。

(117)渋沢栄一（青淵先生）「青淵先生の訓言」（『龍門雑誌』第249号），7ページ。

(118)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，12ページを参考とした。

(119)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，78ページは，「渋沢は大資本を必要とする公益性の高い会社には株式会社を唱導し，ハイリスク・ハイリターン型のものは合資会社を，そして小規模の個人ビジネスには合名会社を当てはめ，さらにそこに匿名組合を組み合わせ」たとしている。また木村昌人，72ページは，「渋沢の唱えた『合本組織』，『合本会社』は，現在の資本主義社会での株式会社や株主の行動とはかなり違う面がみられる。まず渋沢が設立に関与した会社は，株式会社だけでなく，匿名会社，合資会社も含まれている。それは渋沢の合本主義が，三つの要素，つまり①使命（ミッション）②人材とそのネットワーク，③資本から成り立っているためであろう」としている。

共性を重視しいた点において異なっていた[122]。岩崎の利益追求の姿勢は，例えば明治7年頃から暫くの間において三菱が日本の海運業を独占することにより大きな利益を上げるなどの状況を生むことがあった[123]。岩崎は明治13年8月に，宴席を設け渋沢に個人経営の長所を説明し合本の考え方を見直すよう説得を試みたことがあった。しかし両者は激しい議論の末，渋沢が席を立ち以降，両者の関係は険悪なものとなった[124]。この宴席の議論について岩崎側は説得を諦めたのか，あるいは渋沢の対応を無視したのか，全く記録が残っていない[125]。その後，しばしば岩崎が渋沢の事業を妨害するようなこともあったようである[126]。

ここで，渋沢の考え方にサン＝シモン主義がどのように影響したかを確認する。渋沢は

---

(120)渋沢栄一『論語と算盤』183-184ページは，「道徳というものは，朝に晩に終始ついておるものである。」「これを要するに，何業にかかわらず，自己の商売に勉強は飽くまでせねばならぬ，また注意も飽くまでせねばならぬ，進歩は飽くまでせねばならぬのであるが，それと同時に悪競争をしてはならぬということを，強く深く心に留めて置かねばならぬのである」としている。またパトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，37ページは，「渋沢は当時の主導的な立場にある経済人として，道徳的な基盤が経済にこそ，とりわけ必要だと考えたのである」としている。

(121)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，31ページは，「渋沢によって構築された資本主義では，ステークホルダー（株主や経営者）を束ねるにあたって道徳的観点が強調されていて，利己的行動が戒められた。企業間競争に一定の秩序が求められており，通常の資本主義とは明らかに異なった」と記している。

(122)渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，250ページを参考とした。

(123)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，487ページと公益財団法人渋沢栄一記念財団編，72ページを参考とした。

(124)公益財団法人渋沢栄一記念財団，渋沢栄一伝記資料8巻17ページは，「三菱の箇人組織とは主義に於いても一致することは能はざりしなり。此に於て先生と岩崎と意見毎に相協はず，明治十三年八月，岩崎は一日先生を向島の酒楼柏屋に招きて饗応し，紅囲粉陣，頗る綺麗羅を張れり。宴酣なるに及び，岩崎徐ろに箇人経営の利益を述べ，所謂合本組織なるものが，事業を発展せしむるに足らずるを説きて，先生を同意せしめんとす。先生屈せず，資本を合同して事を為すは，国利民福を進むる所以なるを論じ，幾多の例証を挙げて弁難せしに，岩崎いかでか聴従すべき，口角沫を飛ばせて論駁し，時を移せども互に屈せず，双方共に激して宴席為に白けたれば，先生席を蹴って去れり。かかる事どもありて，先生と岩崎の公誼亨日に疎く」なったと記している。

(125)三菱史料館　成田 誠一「渋沢栄一と弥太郎」によると，渋沢は「儒教の精神を西洋流の企業経営に採り込み，義に叶った利を求め，『道徳と経済の合一』をモットーとした。一方，エネルギーの塊のような男，彌太郎は社長独裁こそが企業の活力の源泉と信じて疑わなかった。明治8年制定の三菱汽船会社規則に謳（うた）う。『当商会は…会社の名を命し会社の体をなすといえどもその実全く一家の事業にして…会社に関する一切のこと…全て社長の特裁を仰ぐべし』　向島の料亭で渋沢と彌太郎が酒宴を張ったことがある。天下国家を論じているうちは和気藹々（あいあい）だったが，会社の経営体制に議論が及ぶと，雰囲気は一気にしらけた。渋沢は日記に事の次第を得々と記したが，彌太郎側にはまったく記録なし。渋沢の話は痛いところを突いたということか。あるいは一顧（いっこ）だに値しなかったということか」と記している。

(126)公益財団法人渋沢栄一記念財団，渋沢栄一伝記資料8巻17ページは，両者の関係「感情さへ加はりて，益益相反目せり。其結果にや此頃第一国立銀行破産に瀕し，渋沢之を患ひて自殺を企てたりなどいふ流言頻に行はれたり。又事実に於ても，岩崎は華族の組合が京浜鉄道払下の事業を中止し，其資金を第一国立銀行に定期預金となせるを知り，其人人を説きて一時に引出さしめ，以って先生を苦しめんとせるが如き事あり」と記している。また鍋島高明，234ページは，「弥太郎は大隈系の新聞を使って渋沢を中傷する。渋沢が米相場や為替相場に手を出して大損をしてしまい，自殺を図るが，一命を取り留めそうだなどと書き立てる。相場の穴埋めに東京風帆船会社をでっち上げ，集めた金で穴埋めをしようという魂胆だから，そんな会社に金を出すのは危ないぞ，などと横やりを入れる」と記している。

パリ滞在中にフランスの銀行家フリュリ＝エラールから，会計，銀行業，株式会社組織，資本主義など多くのことを学んだ(127)。渋沢とサン＝シモン主義との関係は，渋沢がサン＝シモン主義について言及したことがないため解明されていない部分もあるが(128)，渋沢はエラールを通してサン＝シモン主義に触れたり，パリ万博などを通してサン＝シモン主義者の影響を受けたりしたと考えられる(129)。渋沢がフランスで見学した大企業の多くは，サン＝シモン主義者が創設したもので，また渋沢が感銘を受けたスエズを運河建設したレセップスもサン＝シモン信奉者によるもので，渋沢は洋行時に，サン＝シモン主義と多くの接点を持って，間接的に影響を受けたものと考えられる(130)。

つまり渋沢の基本的な考え方は，まず国家の繁栄が会社経営の前提となり，その手段として会社組織が存在するというものであったと言える。そう考えると個人経営に徹する岩崎と渋沢が激しく対立したことも理解できる。

第2節　銀行業

渋沢はフランス滞在中に金融システムを学んでいる。渋沢はフランスで会計などの実務を日本名誉総領事で銀行家であったフリュリ＝エラールから学んでおり，銀行の重要性などについてもいろいろとエラールから学ぶことができた(131)。そして会計などの実務を始めとした知識を学び，さらにサン＝シモン主義（資本主義的な根本的概念）の理念を間接的に知ることができた。さらにフランスにおいて，具体的に銀行とはどのようなもので，どのようなことをするのかなどを知ることができた(132)。つまり，一行の会計処理を行ない銀行の口座の管理をするなどをすることにより，考え方を教えてもらいながら，会計や銀行制度を実体験したことであろう(133)。また渋沢は使節一行の滞在資金をフランスの公

(127)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，72ページを参考とした。

(128)木村昌人「渋沢栄一研究のグローバル化―合本主義・『論語と算盤』」（『渋沢研究』27号），74ページは，「栄一自身がサン・シモンに言及したことがないため，必ずしも解明されているわけではなかった」と記している。

(129)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，72ページは，「渋沢はサン＝シモン主義者の思想に間接的な影響を受け，複数のサン＝シモン主義者に出会い，孔子と十八世紀の商人であり思想家である石田梅岩への考察とサン＝シモン主義の要素を含む思想を融合させることにより，自らの経済思想を構築したと推察するのが無難かもしれない」と記している。

(130)パトリック・フリデンソン，橘川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，74-75ページを参考とした。

(131)渋沢栄一（青淵先生）「偶然の転換と目的の達成」（『龍門雑誌』第510号），83ページに，ギレットと違い「フロリヘラルド（フリュリ＝エラール）の方は至つて穏和で利害得失を能く弁別して所謂実利主義である。私は此人に多く相談して，少しでも金が残って居れば利殖法を考へる，公債を持つとか株を買ふとか，随つて銀行はどう云ふものだ」などと知るようになったと述べている。

(132)渋沢著，長校注『雨夜譚』，231-232ページに，「私はまたフランスで実業界の人々と接触したから，不十分ながらも銀行というものはどういうことをやるか」，「実物を取扱って少しは吟味して見もしたから，朧気に分かって居った」と述べている。また渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，156ページに，「影響があった旅は，四十四年前のこの洋行だったと思います。このときが，銀行を興すこととか」，「外国では役人と商人との間に日本のような分け隔てがない」，「これはかなりよい影響があったことと思います」と記している。

(133)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，26-27ページは，渋沢が「滞在経費の出納や為替の利用等で銀行を実際に使う場面が多々あり，大規模かつ大資本によって紙幣，帳簿，証券等といった近代的な銀行業のある種の完成された制度・組織を肌身で感じ取った可能性は高い」と記している。

債などで運用し，帰国時に運用益を手にし，公債制度の経済上の利便性について，強い印象をもったはずである。後に，渋沢は，「日本から迎ひに来たから最初の計画を止めて日本に帰られるに付自分も帰らなければならん，前に買い入れた公債を売らねばならん，ブールスに行つて丁度買入れてから半年後に売た所が政府公債の方は買入れた時と余り値段が変わらなかつたが鉄道公債の方は相場がつて居て五六百円儲つた勘定になりました。此時に成る程公債と云ふものは経済上便利なものであるとの感想を強くしました」と述べている[134]。

帰国後，渋沢の金融・財政手腕は明治の元勲らに高く評価され，スピード出世し，人事案に渋沢大蔵卿という構想があったほどである[135]。現に渋沢は大蔵省に出仕後，まず租税制度の整備に力を注いだ[136]。

つぎに，渋沢は日本の金融制度の整備に関わった。明治3年に伊藤博文ら一行が米国にて金融制度を調査し米国式制度に関する提案書が明治4年2月に日本に送付された。これに対して吉田清成（大蔵少輔）からは英国式にまず中央銀行を設立すべきとの反対意見が出た。この時，渋沢は大蔵省改正掛主任として伊藤博文の提案を支持し，同提案を福地源一郎とともに日本の実情に適合するように修正を加えて建議書として大蔵大輔の大隈重信に具申した。当時の日本は地域経済の独自性が強く，そこから経済統合を計ろうとしていた日本の状況により適合すると考えられた。そして明治4年末，政府は同提案を基礎とすることを決定した。そして明治5年11月15日，「国立銀行条例」が公布された[137]。渋沢はこの条例起草に深く関わった[138]。因みに，この条例起草の作業の中で，バンクの訳を「銀行」とすることで，後に「銀行」の訳が定着したと考えられる[139]。

そして渋沢は，「商工業の発達を期するには従来の如き個人経営では時勢に適合しない，どうしても小資本を合して大資本となす合本組織即ち会社法に拠らなければならぬと考」

(134)渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265号），12ページ。

(135)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，37ページを参考とした。

(136)渋沢著，長校注，『雨夜譚』175ページに，渋沢は「租税の改正と駅伝法の改良とはもっとも緊急の問題であるから，勉めてその法案の調査に注意し，その他貨幣の制度，録制の改革」などの討論審議を行ったと述べている。

(137)渋沢史料館『私ヲ去リ，公二就ク・渋沢栄一と銀行業』，11-12ページを参考とした。また明治政府がアメリカの銀行制度を導入した背景として，パトリック・フリデンソン，橘川編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』，161ページは，「江戸時代に各藩で流通した藩札や金・銀小判と銅銭の回収には，銀行に紙幣の発行権限を付与しているアメリカの銀行制度が望ましいと考えたためである」としている。

(138)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，383-384ページは，「大蔵小輔伊藤博文一行が明治三年に渡米して，銀行制度，公債制度，兌換制度其他の取調べを為して帰朝したが，明治四年其の報告に基いて我国にも銀行条例を制定する事となり，当時大蔵省の改正係主任であつた私が専ら銀行条例起草の事務を担当し，日本の国情に適合せる制度の草案作製に没頭したものである」と記している。

(139)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，384ページは，「公布したのは前にも申す如く明治五年十一月であつたのである。極くつまらぬ事であるが，ナショナル・バンクといふ原名を適切に翻訳する事が出来ず大いに困却した結果，当時名ある学者の所へ相談に出掛けたりしたもので結局『銀行』にしようといふ事になつたのであつた。今日から考へれば全く馬鹿気た様な話である」と記している。また渋沢史料館（2015），12ページは，明治3年にすでに銀行の用語は使われていて，「栄一が『国立銀行』と訳して条例が布告されて以降，『銀行』の語が一般に普及していったと考えられます」としている。

(140)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，379ページ。

えた[140]。そして「此の合本法に就いて」渋沢は「フランス留学中に彼の国の実際を見聞して」,「其うあらねばならぬものと考へて居たので，現に私が帰朝して官途に就く前」に，静岡の商法会議所で，合本組織をまず実施したと述べている[141]。「日本の実業界を振興せしむるには，大動脈の働きをなすべき中枢機関の整備を急務とし」,「此の動脈の働きをなすべきものは即ち金融機関であつて，先づ以て此の方面の発達を計らなければ」ならないと渋沢は考えた[142]。渋沢は，合本制度を日本で実現するためには銀行制度の導入が大事であることを洋行で学んだと思える[143]。そして渋沢は国立銀行条例を起草するにあたり模範となる銀行の設立を考えた[144]。

この時，明治6年5月に渋沢は上司である井上馨が辞職するのを良い機会と考えて，予てより民間にて事業に携わりたいと考えていたことから民間に下野した[145]。当時は官尊民卑の風潮が強く優秀な人材は官職に就くということであったが，渋沢は民間の「商工業の方面に関しては多少自信」もあると考え,「実業界に身を投ずる」こととしたというのである[146]。そして民間人となって始めに力を入れたのは，まず第一国立銀行（第一銀行の前身）の設立であった。この銀行は渋沢が大蔵省にいた時に計画されたことから渋沢は官職上において関係があった経緯がある[147]。渋沢が三井組と小野組に働きかけて第一国立銀行の発起人になってもらい，大蔵省に創立の出願がされたのである[148]。しかし,「東京，大阪，横浜其他の富豪に対して勧誘をしたけれども，銀行事業の性質を知らぬものであるから進んで株式の申込みをする者が非常に少く」,「株式の申込は予定数に達せず」,「止むを得ず資本金を二百四十四万円として，第一国立銀行を創立することとなり，明治六年七月二十日に開業免状を得て，八月一日から日本橋兜町一番地に本店を置いて開業するに至った。之れが我国に於ける国立銀行の嚆矢である」[149]。「従来三井組，小野組，島田組が取扱つて居つた新政府の為替方の事務は」新銀行に移された[150]。しかし，銀行実務に通じた人はおらず，現在の銀行が行う預金・貸付業務は行わず資本金と公金の運用が中心で，行員は派遣元の三井組ないし小野組を通した又貸を江戸時代の商慣習を下に行ってい

(141)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，379ページ。
(142)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，383ページ。
(143)木村昌人，73ページは,「渋沢は，銀行こそが合本会社を次々と設立して事業を実施する原動力になることをパリ滞在中に学び，帰国後に自らが率先して実行したのである」と記している。
(144)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，384ページは,「私は国立銀行条例の起草を為しつゝある一方において，是非とも模範的の国立銀行を設立して他に範を示さなければならぬと考へ」,「大体の骨組みだけは自分の頭の中に出来上がつて居た」と記している。
(145)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』下巻，377ページは,「私が官を辞したのは前にも述べた如く明治六年五月であるが，井上候と共に桂冠はしたものゝ，決して井上候の如く政府と衝突した為めに官を辞したのではなく，平素の持論を実行する為めに，井上候の野に下らるゝのを機会に私も共に野に下つたのである」と記している。
(146)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，378ページ。
(147)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，383ページは,「私のまだ在官中に計画せられ，私が野に下つてから間もなく開業免許を得たものであるが，私は在官中であつたにも拘らず，此の銀行創立に関しては非常に密接な関係を有」していたと記している。
(148)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，385ページ を参考とした。
(149)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，386-387ページ。
(150)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，387ページ。

た。そして派遣元に対しては利益誘導的な無担保融資を行う面があった[151]。さらに新銀行は，三井組と小野組の対等共同出資で設立されたことから，両方から各ポストに一人ずつ派遣され頭取が二人，支配人が二人いて，「両財閥の聯立内閣とも称すべき組織であつたから，彼等ばかりでは勢力争ひや利害問題の衝突から内輪破れをする虞れがある[152]」ような組織形態となっていた。このような状況から渋沢に頭取就任の要請があったものの一応は辞退したが，渋沢は「此の銀行の創立に関しては初めから関係して居つた事ではあり」，「責任を感じて居つたのであるから，総監役といふ名義で頭取の実務を見，銀行経営の一切の責任を負うこととなつた[153]」。頭取の実務を見る総監役とは，どのような立場でどのような役割なのか簡単には理解できない。その職務内容には，頭取・取締役の会議における議長，常に銀行事務を視察という項目が含まれていることから，実質的な取締役会長兼総支配人のような立場も兼ね備えていたと理解できる[154]。さらに二つの財閥組織の間にいて，双方の利害調整役のような役回りで，渋沢の得意とする仕事であったように思える[155]。しかし得意な仕事とは言え，二つの財閥は常に対立し渋沢は調整に苦労した[156]。この銀行で利害調整役を皮切りに多くの企業において，渋沢は調整力を発揮して行くこととなる。

開業した翌年の明治7年10月，第一国立銀行に存亡の危機が訪れた。双頭の株主の一方である小野組が倒産の危機に瀕したのである。「元来，三井組は其の経営が割合に保守的であつたに反し，小野組は非常に進出的であつて，実力以上に事業を拡張して華々しく営業して居つたが，兎角資金が不足がちで[157]」，銀行（資本金244万）は小野組に対して資本金の半分超の138万円を無担保で融資していたことから，銀行も連鎖倒産しかねないという状況であった[158]。「此の善後策に就いては一歩を過れば銀行が潰れるばかりでなく，日本の銀行といふものは今後当分の間は芽を吹き出す事が出来なくなつてしまふ」と渋沢は考えた[159]。第一銀行の破綻は日本の銀行業に計り知れない影響を与えかねないという状況であった。さらに，渋沢は，「銀行業を挫折せしめて漸く勃興せんとする気運を覆へすのは，我国実業界の発達の上から見て実に重大問題である」と考えた[160]。

ここで，渋沢が善後策として，小野組の代表者小野善助と協議したところ，渋沢の「誠

(151)渋沢史料館（2015），25ページを参考とした。
(152)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，387ページ。
(153)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，388ページ。
(154)渋沢史料館（2015），26ページを参考とした。
(155)渋沢栄一著，長幸男校注『雨夜譚』238ページは，「両方とも多少競争心もありまた猜疑心もある。常にその中間に立って私が仲裁役となった。直ちに私を頭取にするということも出来ず，さりとて両方が睨み合ってはいかぬというので私は行司のような位地に居らなければならぬというので総監という名を以て事務を執行した」と記している。
(156)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，391-392ページは，「三井側の人々は渋沢は小野組に対してばかり便宜を与へて居るなどと言つて不平を唱へ，小野組では又渋沢は三井の方に偏して小野組に冷淡であるなどといふ苦情を陳べる始末で」，「一通りならざる骨折であつた」と記している。
(157)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，392ページ。
(158)渋沢史料館『私ヲ去リ，公二就ク・渋沢栄一と銀行業』，37ページを参考とした。
(159)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，392ページ。
(160)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，392ページ。

意と立場に同情」して，貿易方の総支配人古河市兵衛と共に「交渉に応じ」，「在庫品を貸金の担保に入れるやうに取り計はれたので，結局其の担保品を処分し且つ銀行に対する百万円の出資金を以て決済する事とし」，「幸ひに整理の結果は銀行としては三四万円の損失で事が済んだ」(161)。倒産に瀕している小野組が担保に入っていない商品を銀行の担保に入れたというのは，重大な決断を(162)行ったことを意味し，渋沢の協議における並々ならない交渉力が窺える。渋沢は，このような危機を招いたことについて，「私は非常に苦しい立場となつたが，又此の試練は私に尊い経験を与へて呉れた。それで其後は貸付金の方法を改め且つ大蔵省に陳情して預金規則に改正を加へるようにし，同時に行員の淘汰を断行して旧来の情弊を一掃し，営業の面目を更新して鋭意創痍の回復に努めたのである。斯くて明治八年八月の株主総会の決議に基き，名実共に第一銀行頭取となつた」と述べている(163)。

その後，明治29年9月，第一国立銀行は，営業満期となったのを期に，株式会社第一銀行（普通銀行）となった。その後，渋沢は大正5年7月まで頭取職にあった。渋沢の事業活動は第一銀行を中心に行われ，渋沢は，「此の銀行の経営に就いては，私は創業当時から余程積極的の考へを有つて居つた。敢て銀行の利益を無視するといふ訳ではないけれども，銀行自身の利益よりも寧ろ日本全体の経済の事を先きに考へるといふ態度であつた。即ち日本の実業を振興せしむる為めに，銀行を全国的に活用せしめるやうにしなければならぬと信じた」と述べている(164)。

渋沢は第一銀行の他に横浜正金銀行（東京銀行に継承）の設立に株主として参加し，北海道拓殖銀行の設立委員を務め，また日本興業銀行など多くの銀行の設立に関与した。

第3節　倉庫業

渋沢は証券の保管制度についてフランスで勉強していた(165)。渋沢は倉庫業の重要性を良く認識していて，日本でも倉庫業が必要になったと判断して，明治30年3月30日に渋沢倉庫の前身である渋沢倉庫部を設立した(166)。経営は渋沢の長男・篤二に任せられた(167)。設立時より単なる保管業務ではなく寄託者のために銀行融資の斡旋を行ったり，出庫に際して代金を寄託者に送金するなどの先進的なサービスを行い，特約銀行として，第一銀行，

(161)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，392-393ページ。
(162)渋沢史料館『私ヲ去リ，公二就ク・渋沢栄一と銀行業』，68ページを参考とした。
(163)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，393ページ。
(164)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，393ページ。
(165)渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会『渋沢倉庫の80年』，31ページは，渋沢は「パリの万国博覧会に参列する幕府使節徳川民部に随行してフランスに遊学した際倉庫証券（売買用と抵当用の二枚証券）の制度を研究して帰朝した，実に，わが国近代倉庫業における先駆者であったのである」と記している。
(166)渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会『渋沢倉庫の80年』，31ページは，「倉庫業を明治30年になって開始したことは，決して，単なる偶然とか思いつきでなく，“その企業が時機に適合するや否や”を判断した上での見透しを立てたものにほかならない」と記している。
(167)渋沢史料館『渋沢倉庫株式会社と渋沢栄一』，本編5ページは，「栄一は長男・篤二に，『おまえはまだ幼いけれども，父の志を継ぐ考えがあれば，試しにここにいる子弟とともに倉庫業経営方針を立ててきなさい。私がおまえに資金を渡し，その業務をまかせよう』と述べました。これが後の渋沢倉庫誕生につながったと語り継がれています」と記している。

十五銀行，二十銀行，横浜正金銀行，住友銀行が対応した[168]。渋沢は倉庫業は「公共的ノモノ」と述べ，渋沢家の家業とはせず，明治 42 年には株式会社化された[169]。そして第一銀行が株主となり明治 45 年に第一銀行総支配人が取締役会長に就任した。同社は第一銀行とは特別な関係となり，倉庫証券を利用した金融に関わるようになった[170]。

第 6 章　造船業

渋沢は徳川幕府の歩兵の募集を行った際に西洋の武器について知る機会があった。そのことから船舶や機械を始め良いものは，西洋に学ぶべきという認識を欧州への出発時から持っていた[171]。

帰国後，渋沢は，非財閥系の重工業を発展させる観点から後の東京石川島造船所，東京製綱，日本鋼管などの非財閥系の造船，鉄鋼メーカーに深く関与した[172]。特に東京石川島造船所には，取締役会長に就任し直接経営に携わった[173]。渋沢は造船業は日本にとって重要な産業と考え，後に「石川島造船所に関係し始めた抑もの動機は，毛頭これを利殖の一事業としやうといふやうな考えからではなく，造船業が海国日本の進運の上より見て一日も等閑に附し難く，今にしてこれが振作を図らずんば将来悔ゆる事あるも及ばずと考えたからである[174]」と述べている。

元々，東京石川島造船所は，幕臣の二男の平野富二が明治 9 年に石川島のドック設備を政府より借り入れて石川島造船所を設立されたときに始まる。当時民間に造船所はなく，平野は造船の職工を苦労して集め，明治 10 年に 128 人の職人を使用して事業を始めた。同所は明治 10 年にまず 34 総トンの小型の汽船を一隻建造し，建造後に河川交通の会社社長を説得して買い取ってもらっている。同年の収支は，売上 6,132 円，利益は赤字の 11,369 円であった。汽船を建造しても当時はまだ汽船の効用を理解されず売ることが難しく，同所は帆船の建造や船舶の修理で売上を確保した。その後，明治 11 年の売上 72,579 円，利益 5,396 円，明治 12 年の売上 106,313 円，損失 5,936 円，明治 13 年の売上 146,467 円，利益 13,233 円，明治 14 年の売上 199,267 円，利益 14,178 円という業績で，創業後数年で収支は安定し，また少しずつ汽船の建造も増えて造船所らしくなっていった[175]。

平野は，明治 12 ないし 13 年ころ初めて渋沢に面談して，造船業の重要性を渋沢に熱心

---

(168)渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会『渋沢倉庫の 80 年』，37-38 ページを参考とした。

(169)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻 313 ページは，「倉庫業ハ銀行業保険業運送業ト相待テ商業上缺クヘカラサル必要機関ナリ」としている。

(170)渋沢史料館『渋沢倉庫株式会社と渋沢栄一』，本編 15-16 ページを参考とした。

(171)渋沢著，長校注『雨夜譚』，128 ページに，渡欧が決まった際に「自分も京都で歩兵組立の事を思い立ってその事に関係してからは，兵制とか医学とか，または船舶，器械とかいうことはとうてい外国に叶わぬという考えが起こって，何でもあちらの好い処を取りたいという念慮が生じて居った」と記している。

(172)渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，75 ページを参考とした。

(173)島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』，132 ページは，「渋沢が長く会長を務めた非財閥系の企業であり，彼のイニシアティヴが存分に発揮された企業であるという点，彼が重役会に欠かさず出席し，直接経営に関与していたことが明らか」としている。

(174)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11 巻 602 ページ。

(175)石川島造船所の略歴，業績については，寺谷武明『日本近代造船史序説』，47-54 ページによる。

(176)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，211-216 ページを参考とした。

に説いた[176]。後に渋沢は，「平野君の屢余を訪問して，詳に英蘭諸国の海外発展の実状を語り，造船業の振作は，我日本の如き四面環海の国に於て最も急務なる所以を力説せらるゝに及び，遂に其熱誠に動かされ，進んで之を援助するに至れるなり」，しかし銀行は「欠損をも顧みずして平野君を援助する能はざるや論なきところなり[177]」として，渋沢は悩んだ末に第一銀行より7－8万円融資させた[178]。その後も石川島造船所の資金繰りは厳しい状況が続き，明治18年，渋沢は，華族鍋島家，宇和島伊達家に支援を要請し，渋沢が4万円，鍋島家が3万円，伊達家が3万円を各々出資し匿名組合を作り，平野に融資した[179]。

ところで，明治14年に日本海軍は20年間に亘る造艦政策を定め，海軍の充実を図った。この施策を実行するには海軍造船所だけでは間に合わなかったことから，明治18年1月，海軍は砲艦，水雷艇などを石川島造船所に発注した。民間の造船所に対する最初の軍艦建造指示であった。当時は鉄骨木皮船から鉄骨鉄皮船への過渡期にあり，発注された艦船は鉄骨鉄皮の砲艦であったことから，建造には高度な技術が必要で，職人はリベット打ち，鉄板の成形に苦労し工期を大幅に延長してもらうなどして，なんとか明治20年8月に皇太子を迎えた進水式を行うことができた。民間の造船所として砲艦を海軍に納入できたことは名誉のあることではあったが，個人経営の造船所には余りにも負担の大きな事業であった[180]。

渋沢は近代産業を発展させるには，「合本組織」によって経営を行うべきと考え，また匿名組合の出資者も同意したことから，平野より資産と営業を引き継いで，新会社が設立された。新会社は明治22年1月に資本金175,000円で有限責任石川島造船所として営業を始めた[181]。明治25年に平野が死去し，明治26年株式会社組織に変更され，社名を株式会社東京石川島造船所とし，資本金を25万円に増額した。そして渋沢が取締役会長に就任した[182]。

明治25-26年ころより日清間に戦端が開かれるような国際情勢となり，同社には軍需の注文が入るようになり，業績は順調に推移した[183]。そして，明治27年に渋沢会長は大型船の建造・修理を目的としたドックを新しく浦賀に建造する案を取締役会，株主総会に諮り，承認を得た。明治28年に資本金を50万円に増額し，ドックの工事予算は25万円とした[184]。しかし，明治29年に着工後まもなく，造船奨励法，航海奨励法の二法が公布され，造船業が発展するように思われたことから，工事内容を変更し，予算を倍額とし建設

(177)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，序文。
(178)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，211-216ページを参考とした。
(179)寺谷武明『日本近代造船史序説』，60ページを参考とした。
(180)寺谷武明『日本近代造船史序説』，57-60ページを参考とした。
(181)寺谷武明『日本近代造船史序説』，62ページを参考とした。新社名について，公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻，606ページは「有限責任東京石川島造船所」とし，渋沢は「委員」としている。寺谷武明『日本近代造船史序説』，106ページによると当時の委員による委員会は会社の最高意思決定機関で現在の取締役会に相当する。
(182)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻619ページ。
(183)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，284ページ，及び，島田昌和（2007），133ページを参考とした。
(184)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，285ページを参考とした。

規模を拡大し，会社の資本金は増資を繰り返し150万円となった[185]。明治32年6月の工場開場式において，渋沢は，「本邦造船事業ノ開発的模範的建造所ト云フヘクシテ未タ此ノ計画ヲ以テ満足スヘキニアラサルハ勿論将来大ニ完全ナル設備ヲ規画スル所ナカルヘカラサルヲ信スルナリ[186]」と述べ，将来さらに拡張する考えを持っていたほどであった。渋沢の造船業への強い思い入れが感じられる[187]。その一方で計画が大胆過ぎるという意見もあった[188]。

明治29年に公布された造船奨励法と航海奨励法は，造船業の発展を促すことを目的とした。しかし，造船業全般を支援するものではなく，一定の条件を備える船舶の建造に対してのみ補助金を交付するという，一部の大規模造船所を支援するものであった[189]。奨励法の適応対象は当初1,000トン以上の大型船に限定するというものであった。東京石川島造船所からの代議士への働きかけにより，その後700トン以上が対象となったが[190]。東京石川島造船所が建造する船舶の一部しか奨励法の対象とはならなかった。現に，東京石川島が新しいドックで建造した船舶は，開業直後に600トン級が2隻で，明治34年に建造した交通丸1,604トンが最初の奨励法適応対象の船舶となり，その後は法適応対象となる注文が入らず，経営的に厳しい状況となった[191]。過剰設備を抱えて大型船の建造ができず，船の修理工事を行う程度で大きな損失を生むこととなった。その原因は浦賀船渠株式会社との厳しい競争にあった[192]。

浦賀船渠は東京石川島の浦賀分工場の建設とほぼ同時期に同じ浦賀に造船所の建設を行った。浦賀船渠は東京石川島よりも半年遅れて，明治33年1月に開業し，社長は元逓信省管船局長の塚原周造が選ばれ，資本金は100万円であった[193]。両社の無益な競争を憂慮して，起工前の明治28年1月には，既に合併が検討され，両者の首脳が懇談したが，合意に至らなかった[194]。開業後，両社の価格競争は直ぐに始まり，造船所の立地上の条件から石川島側が不利であった。本格的な合併交渉は明治34年より始まったが，浦賀船渠側が拒否していたことから，渋沢は仲介者を立てて交渉を続けた[195]。その間，渋沢は，この問題にかかりっきりとなり石川島の重役会が延長となり，第一銀行の重役会に欠席す

(185)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，285-286ページ及び，寺谷武明，113ページを参考とした。
(186)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，62ページ。
(187)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻626-627ページの石川島造船所取締役栗田金太郎談では，「浦賀分工場は百万円かけて出来まして，私は機械課長として参つてをりました。子爵は時々来られて ---- 丁度日清戦争後で疲弊してゐた時代でしたが ----『日本の造船業が大きくならねば，日本の国は栄えぬ』とおっしゃって我々若い者を励まされました」と記されている。
(188)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻635ページの開業式の渋沢の演説は「元来斯の如き国家的事業は，微々たる私立会社の能くじ得べき所にあらざるを以て，或は余等の計画を大胆と云はんより寧ろ粗暴なりと評せし人もあれど」と記している。
(189)寺谷武明『日本近代造船史序説』，75ページを参考とした。
(190)寺谷武明『日本近代造船史序説』，101ページを参考とした。
(191)寺谷武明『日本近代造船史序説』，117-118ページを参考とした。
(192)寺谷武明『日本近代造船史序説』，119ページを参考とした。
(193)寺谷武明『日本近代造船史序説』，121ページを参考とした。
(194)東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』，288ページを参考とした。
(195)寺谷武明『日本近代造船史序説』，134ページを参考とした。

るような状況となった[196]。そして，明治34年8月，両社の取締役会は無条件での合併を承認し，石川島の株主総会も賛成を可決したが，浦賀の株主総会では否決されてしまった[197]。これは浦賀の合併調査委員会が合併について不利という結論を出したことによる[198]。翌明治35年5月に石川島より浦賀の工場全部を浦賀船渠の新規発行の株式90万円と現金10万円で譲渡する提案がなされ，浦賀船渠の株主総会で可決され，両社の合意が成立した[199]。石川島が浦賀で行った大型投資は非財閥系の造船会社を育成するという渋沢の意志が働いたものであったが，私企業の投資としては失敗であった[200]。浦賀船渠は過大投資を引き受けた形となり，浦賀船渠の負担は大きいものとなった。その浦賀の株式を引き受けたことから，旧石川島の株主もその負担を負うこととなった[201]。失敗の原因に関して，後に，当時の機械課長は，工場の場所が悪かったとし[202]，渋沢は時と経営法が悪かったと述べている。渋沢は失敗と見るやリスクの軽減を速やかに図る現実的な経営者としての面を石川島の経営で見せたと言える[203]。

第7章　海運業・鉄道事業

渋沢は渡欧の際に，船や汽車に乗り強く心を動かされ，交通機関の発達が国家発展の基礎となることをよく理解したようである。そして渋沢は後に，「欧州も総て鉄道が通じて居ると云ふ訳ではなかつた」が，「私は日本にも鉄道を敷設せねばならないと考へたが，何時日本に出来るかとは想像しなかつた。それは仏蘭西へ行つたのは学問をするのが目的であつたからである。然し兎に角便利なものだと思ひ，且つ後に英国へ行つた時には，其の整頓して居るさまに感心した」。「私は交通機関たる海の船舶，陸の鉄道は是非必要であるから，日本へ帰つたらやりたいものだと思ふやうになつた」と述べている[204]。このように渋沢はフランスで，海運と鉄道の重要性をすぐに理解し日本で事業化したいと早くも考えていた[205]。

帰国後，渋沢は共同運輸会社（後に郵便汽船三菱と合併して日本郵船となる）あるいは日本鉄道，北海道炭礦鉄道，九州鉄道，上武鉄道，京阪電気鉄道など多くの交通事業に関

(196)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻645ページを参考とした。
(197)寺谷武明『日本近代造船史序説』，134-135ページ及び公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻649ペーを参考とした。
(198)浦賀船渠株式会社『浦賀船溝六十年史』，103ページを参考とした。
(199)浦賀船渠株式会社『浦賀船溝六十年史』，104ページを参考とした。
(200)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻662ページは，「三十五年には分工場を売つて事業を縮小するやうな破目に陥つた，其後梅浦が去つて別人が経営をしたが，時も経営法も悪かつた」としている。また寺谷武明，133ページは，「まことに分工場の建設は，渋沢の予測の甘さに主因があり，大失敗に終わった」としている。
(201)寺谷武明『日本近代造船史序説』，137ページを参考とした。
(202)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』11巻626-627ページの石川島造船所取締役栗田金太郎談では，「こゝはあまり伸びませんでした。その一つは此処の位置が悪かつたことです」と記している。
(203)寺谷武明『日本近代造船史序説』，139ページは，失敗の主因は渋沢の予測の甘さにあった。「しかし不幸中の幸いともいうべきは，大勢が非なることを察するや，すみやかに戦線を縮小して，現状に適応すべく経営方針に転じて，慎重な態度にもどり捲土重来を期したことであった」と記している。
(204)公益財団法人渋沢栄一記念財団，「雨夜譚会談話筆記」（『渋沢栄一伝記資料』別巻第5」），552ページ。

与した。

第1節　海運業

渋沢は海運は日本の産業にとって重要なものと考え，「海運事業が国家の富強に何う云ふ関係を有するかといふ事は，今事新しく申す迄もなく分り切つた事である[206]」と述べている。渋沢と海運会社との関係は長く，渋沢が大蔵省に勤務していた明治4年に早くも郵便蒸汽船会社の創業を図らった[207]。そして「この点に於いて私は日本の海運事業とは大分古くから縁故が深い訳である。郵便蒸汽船会社の出来た明治四年頃には，アメリカやイギリスの船が盛んにやつて来て，海運の事は殆んど之等の外国船が占有して居る形で，日本人は極端に云へばお隣に行くにも外国の蒸気船の御厄介になるといふ始末であつた[208]」と渋沢は述べている。

この郵便蒸汽船会社は，「名前は会社であるけれども実質に於いては官営事業であつて[209]」，赤字が続き政府は経営を継続することができなかった。赤字の原因は保有船が古く知識を持った船員や経営の適任者がおらず三菱との競争に耐えられなかったことにあった[210]。「寧ろ三菱会社の方が余程行届いたやり方で成績が甚だ良かった[211]」ので，政府は郵便蒸汽船会社を解散させて，所有船を三菱に引き渡した。この交渉において，岩崎弥太郎は大蔵卿大隈重信に巧みに働きかけ，「明治七年，三菱商会は政府が当時百五十七万六千八百余弗を投じて購入せる汽船十三隻をそつくり其の儘頂戴に及ぶといふ有難い仕合せ，更に翌八年七月には蒸汽船会社の所属船十八隻を政府は三十二万五千円で引上げ，之れを三菱商会に下付した[212]」。その結果，「明治七八年頃から十四五年頃迄は，日本の海運業は殆ど三菱の独占[213]」という状況となった。これにより三菱は大きな利益を得た。

渋沢は，明治13年に，三菱の独占を阻止するために，三井物産社長の益田孝と図って東京風帆船会社を設立した[214]。そして明治15年東京風帆船会社，北海道運輸会社，越中

---

(205)恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」(『渋沢研究』第24号)，38ページは，渋沢は「ヨーロッパを訪問した際に鉄道の有望性を知ることになるが，帰国後には大蔵省に出仕して国内における株式会社制度の普及に取り組んだ。こうした経験があったことで，渋沢はいくつもの鉄道会社の設立で重要な役割を果たすことができた」と記している。また島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，25ページは，欧州滞在において「パリを起点にスイスやオランダ，イタリアなどには鉄道で移動した。」渋沢が帰国後に，「各地の鉄道会社の設立に数多く関わった原点はやはり，鉄道によって結ばれた欧州全体の発展を実感したからであろう」としている。

(206)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，483ページ。

(207)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，484ページは，郵便の他米輸送も目的となっていて「私が此点に着目し郵便蒸汽船会社が出来上るに到つたのである」と述べている。

(208)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，484ページ。

(209)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，484ページ。

(210)日本郵船株式会社，4ページは，「使用船の多くは老朽船で多額の修繕費を要し，また当時日本人の海技未熟のため乗組員には甲板部，機関部ともに多数の外国人を使用せねばならなかったので経費もかさみ，特に経営の適任者を得なかったほか，当時勃興してきた三菱会社との激しい競争もあってまもなく経営は困難となった」と記している。

(211)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，484ページ。

(212)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，486ページ。

(213)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，487ページ。

風帆船会社の三社を渋沢が「発起人の一人として奔走し[215]」設立された共同運輸会社が吸収した。明治16年1月に共同運輸が営業を開始すると，「またたくまに三菱とのダンピング合戦の泥沼に突入する。三菱は次第に共同に食われ，不採算路線の廃止，経費削減・人員削減と，大幅リストラを迫られる[216]」。共同は三菱に対抗するために資本と人材を結集させて，正に合本組織で，設立されたもので，「両社は激しい競争を続けた[217]」。「船舶においては『共同』側が優位を占めたが，営業方面においては多年の経験によって『三菱』側が老練の名を博した[218]」。この間，岩崎は渋沢の動きを阻止しようと向島の料亭で渋沢に合本組織の考え方を見直すように説得を試みた経緯もあり（合本組織の項，参照），正に渋沢合本組織対岩崎個人経営の対立の構図となった。渋沢は，「最初の考へでは我が海運界の改良発達を期するには，三菱汽船会社の独占よりも他に有力な同業者があつて互ひに競争した方が，独占の弊害を矯めると同時に進歩を促す所以であると云ふ意見で，共同運輸会社を起こしたのであるが，さて実際問題となつて見ると，両会社共に十露盤を度外視して意地づくで競争する有様[219]」と述べている。「政府においても両社の競争をこれ以上放任することの不可を痛感し，明治十八年一月農商務卿西郷従道は両社幹部を本省に招き，内閣諸卿参列の席上にて政府の意のあるところを訓示して両社の妥協を勧告した。両社もついに妥協を決意して両社長連署の答申書を提出し，次いで双方の細目協定も成立したが，この協定はわずか三週間で破れた[220]。」さらに明治18年2月に岩崎弥太郎は死去するが，弥太郎の遺志を継いで二代目の岩崎弥之助は競争を続けた。「かくて再会された両社の競争は条理を没却し損失を無視して激烈をきわめ」，「横浜神戸間客船運賃は二十五銭に下がり，両社船は速力を競うため汽罐を酷使し煙突を灼熱して入港することもあり，このまま放任すれば両社共倒れのほかなき情勢となった[221]。」渋沢も「大いに心配し」，「折角発達しかけた日本の海運業が全く挫折してしまふ外はない[222]」のであったと述べている。

この事態を収拾するために，政府が本格的に動き，「農商務少輔森岡昌純及び同書記官加藤正義を共同運輸会社に派遣することとなり，明治十八年四月森岡は社長に就任し」，「森岡新社長は事情調査の結果競争による損害の意外に甚大なるを認め，事情を具して両社合併の急務にして他に収拾の途なきゆえんを政府に進言するとともに，合併に反対する社内幹部の説得に努め，またひそかに岩崎社長とも会見して了解を得るところがあった。これよりさき三菱会社の川田事務総監は井上外務卿と接触を保ち政府方面の了解を得，また合併に反対する共同運輸の幹部に対しては政府自ら説得して翻意させたので，合併に対する

(214)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』8巻5ページを参考とした。
(215)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，487ページ。
(216)三菱史料館　成田 誠一「共同運輸との消耗戦と日本郵船の誕生」本文。
(217)日本郵船株式会社『七十年史』，5ページ。
(218)日本郵船株式会社『七十年史』，19ページ。
(219)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，488ページ。また鍋島高明，290ページは，両社の競争は激しく「値引きに加えて景品を付ける競争に入り，三菱がカステラを出せば，共同運輸は砂糖菓子を配るありさまで，この勢いだと一等客には金時計が出るかもしれない，などとマスコミは喜んで書き立てる」と記している。
(220)日本郵船株式会社『七十年史』，19-20ページ。
(221)日本郵船株式会社『七十年史』，20-21ページ。
(222)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，488ページ。

態勢はようやく整うに至った[223]」。会社が合併するには，今日に至るまで，合併比率を含めた諸条件を株主などの関係者が応諾することが重要となる。まず2社の資産額は，共同は6,526,340円，三菱は5,543,418円と査定された。各々の割合は約0.54対0.46である。そして新会社の資本金を11百万として，合併比率を6対5（約0.545対0.455）とし，これに対して政府が15年間年8分の利益補給を保証するという条件で，株主など関係者の合意に至った。政府は新会社を日本郵船と命名し明治18年9月29日設立が認可された[224]。

一方，関西においても明治10年頃より多くの商船会社が乱立する状態で，明治15年より住友を中心とした大連合の結成が進められた。そして，明治17年5月1日有限責任大阪商船会社が創業した[225]。渋沢は「此の両会社の出現に依つて稍々日本海運業発達の土台が出来たと見る可きであろう[226]」と述べている。

ところで，日本郵船の社長，副社長，理事は利益補給期間の15年間は政府が任命することとなっていた[227]。そのことから，渋沢は日本郵船の役職に就かなかった。そして，渋沢は，「私は郵船会社の事業にも大阪商船の仕事にも直接関係して居らなかつたが，海運業の発達に就いては終始研究を怠らず，且つ又他の事業の関係から間接ではあるが海運界の事情を知る機会も多かつたので，機会ある毎に私の海運界に対する意見を申述べ，時には政府に対しても建言した[228]」と述べている。

その後，暫くして日本郵船はインド航路を皮切りに外国航路を開拓するが，その交渉に渋沢は関わっている。「明治25年頃タッター商会の幹部の一人が日本に来朝し[229]，商売上の打合せやら更に進んでは印度から綿糸並びに綿花を日本へ輸送した帰り船に[230]」何を積めばよいかと渋沢は面談の際に尋ねられ，渋沢が「日本の石炭は現在シンガポール迄行つて居るから，一歩進めて綿花の戻り船を利用して之を印度迄持つて行かれては如何であるか」と提案したところ，同幹部も同様の意見で，渋沢が石炭業者を紹介したところ三井と商談が纏まり，三池の石炭を試験的に運ぶこととなった[231]。しかし石炭の輸送は採算が合わず続かなかった。一方で，日本の紡績会社からはインドの原料綿花輸入の要望はあるものの，当時の日本インド間の航路は，英国のP&O汽船など外国の3社による寡占状態で，運賃は高い状況となっていた[232]。日本郵船と紡績会社との複雑な交渉を経て，「郵船と紡績聯合会社側との協定が出来て，新航路開始の運びに迄漕き付けた[233]」。かくして，明治26年11月7日，ボンベイ定期航路が開始された。航路開設と同時にP&O汽船他2

(223)日本郵船株式会社『七十年史』，21ページ。
(224)日本郵船株式会社『七十年史』，21-23ページを参考とした。
(225)商船三井のホームページ「商船三井の歴史」を参考とした。
(226)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，489ページ。
(227)日本郵船株式会社『七十年史』，25ページを参考とした。
(228)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，494ページ。
(229)日本郵船株式会社『七十年史』，42ページによると，明治24年グループの創始者R.D.Tataが来日し，明治26年5月には同創始者の従弟のJ.G.N.Tataが来日して日本郵船の森岡社長，渋沢に面談している。
(230)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，495ページ。
(231)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，495-496ページ。
(232)日本郵船株式会社『七十年史』，42ページと渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，496ページを参考とした。
(233)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，497ページ。

社は運賃を下げ激しい競争が始まり，「P&O　汽船は綿花運賃を引き下げるほか，あらゆる手段を弄して」日本郵船を「抑圧せんと努めた[234]」。P&O汽船は妨害工作を行い，「東洋方面を総て支配して居る彼阿会社ホンコン支店長が日本にやつて来て」，「『ターター商会などは頗る信用が無い者であんなものを相手にして居ては後日迷惑を蒙るに定つて居る』[235]」などと言うので，渋沢は，「併し郵船会社では此の航路は自発的に計画したものではなく，主として渋沢が仲に立ち紡績聯合会側との契約に依つて始める事となつたのであるから，紡績聯合会が契約を解除しない限り，今更見合わせる事などは出来ないと云う返事をした[236]」という。さらに渋沢は，綿糸の運賃が下がり安い綿糸が入ると紡績会社は困難となるが，日本全体としては悪くなく耐える覚悟があるなどと説いた。渋沢は，自分は「最初の関係者である責任上から且つ国家的見地より如何しても此の航路を永続せしむるやうにしなければならぬと考へて」紡績会社に訴えて，積み荷契約を延長してもらい，日本側は耐えた[237]。すると，P&O汽船は，明治28年11月，英国外務省を通じて，駐英公使加藤高明に仲裁を申し入れてきた。明治29年5月に運賃合同計算契約が締結され，2年半に亘った運賃競争は終結した[238]。この間の明治26年10月に渋沢は，日本郵船の取締役に就任していた[239]。

明治30年に，日本郵船は欧州航路，米国航路，豪州航路を開設した。渋沢は，「茲に至つて昔日一片の理想視され，空想視された私の主張が漸次具体化さるるに到つた[240]」と述べている。

第2節　鉄道事業

日本鉄道（現東日本旅客鉄道）は明治17年に華族資本を中心として設立された日本で最初の民間鉄道会社である。東京から青森間の営業から始め，東京と京都間，新潟間と順次路線を拡大した。同社は国有地などを政府より無償で借りる代わりに，政府の電信・郵便事業あるいは軍部・警察への協力が求められた。渋沢は設立時より明治37年まで理事委員ないし取締役に就任し，政府と会社の間の協力関係の維持に永年協力した[241]。また，明治31年に公金私消ないし従業員の怠業問題から全理事が辞任した折に，後継者選出のための臨時株主総会の議長も渋沢は務めた[242]。

北海道炭礦鉄道は明治22年に政府の補助を受けて設立された会社で，経営陣は官選であった。渋沢は大株主の一人で，明治25年の株主総会では，高島社長の冒頭の挨拶の後，議長を務めた。会社の業績不振から議事は長引き，渋沢が株主を説得して議案を成立させるという総会であった[243]。その後も会計上の不祥事，あるいは重役が供託株を会社に預

(234)日本郵船株式会社『七十年史』，45ページ。
(235)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，497ページ。
(236)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，498ページ。
(237)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，501ページ。
(238)日本郵船株式会社『七十年史』，45ページを参考とした。
(239)日本郵船株式会社『七十年史』，37ページ。
(240)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，503ページ。
(241)恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」（『渋沢研究』第24号），27-28ページを参考とした。
(242)島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』，92-93ページを参考とした。

けず定款に違反したことから，政府補助金を停止されるなど難しい状況が続くが，渋沢は社長に代わって問題の処理を行った(244)。

九州鉄道株式会社は，明治 20 年に設立された九州で初めて鉄道を敷設した会社である。明治 30 年に，渋沢が大株主であった筑豊鉄道株式会社を吸収した。九州鉄道は，三菱，三井などの財閥などの株主の利害が対立する構図を持っていた。渋沢は再三に亘り，株主間の利益調整を図った(245)。

また明治 25 年に全国的な鉄道網を整備するための鉄道敷設法が施行されると，帝国議会の諮問機関である鉄道会議の臨時議員に渋沢は任命された。軍部が軍事上の観点から路線を考えるのに対して，渋沢は鉄道の経営が成り立つよう腐心した。そして渋沢は，鉄道により，その地域の産業が発展するように港湾と鉄道を結びつけることを主張し，内陸に敷設しようとした軍関係者を批判した(246)。渋沢は，自ら重役を務めていた日本鉄道が東北方面への直通急行が一日一本しか走らない状況に不満で，東海道の競争線として中央線を位置づけることで，競争によるサービス向上を図った(247)。

明治 39 年に鉄道国有法が公布され，翌年には多くの鉄道が国有化された。渋沢は国有化も一旦はやむを得ないが，民間に任せた方が将来的には発展すると考え，国有化に批判的な立場を取った(248)。

第 8 章　新聞事業・製紙事業

第 1 節　新聞事業

渋沢はパリ滞在中に，はじめて新聞というものを知った。そして，世間のいろいろな小さな出来事や国家レベルの重要な問題まで報道して，皆が知ることができ，非常に重宝なものだと考えるようになった。このことが帰国後に新聞社への関与に繋がったと考えられる(249)。渋沢は多くの新聞社に関与したが，特に東京日日新聞と中外物価新報に深く関与した(250)。

東京における最初の日刊紙として(251)，「東京日日新聞は，明治五年（1872 年）陰暦二月二十一日，日報社から創刊された。」毎日新聞社は「明治四十四年三月一日から東京日日新聞を経営，昭和十八年一月一日，大阪毎日新聞および東京日日新聞を毎日新聞に統一改題した(252)。」渋沢は，明治 14 年に日報社に出資している(253)。そして，明治 21 年に関直彦氏が社長に就任する際に，方針として，「御用臭を一掃して不偏不党，中正の道を進

(243)島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』，90-91 ページを参考とした。
(244)島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』，91 ページ及び，恩田睦，34-35 ページを参考とした
(245)島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』，95-97 ページを参考とした。
(246)恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」(『渋沢研究』第 24 号)，38-39 ページを参考とした。
(247)恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」(『渋沢研究』第 25 号)，5 ページを参考とした。
(248)恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」(『渋沢研究』第 25 号)，19 ページを参考とした。
(249)渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，137-138 ページを参考とした。
(250)龍門社編纂『青淵先生六十年史』第二巻，700 ページは，「青淵先生ノ多少関係ノ新聞紙ハ数多アリ其中ニテ最モ関係ノ深カリシハ東京日々新聞ト中外商業新報是ナリ」としている。中外物価新報の社名は，明治 22 年 1 月 27 日に中外商業新報に変更した。
(251)社史編纂委員会『毎日新聞七十年』，568 ページ。
(252)社史編纂委員会『毎日新聞七十年』，567 ページ。

まんことを宣言」したのに対して，大株主の渋沢が支持したことから，前任社長らも従ったという経緯があった[254]。その後，渋沢は関社長の時代に同紙に関わっていた[255]。

つぎに，明治9年7月に創業したばかりの三井物産の益田社長が中心となって，中外物価新報（現在の日本経済新聞社）は創業され，三井物産の建物から，同年12月2日に第一号を発刊した。当初は三井物産を母体として政府からの補助金で運営され，市況などを報じる週刊のタブロイド紙であった。益田社長と渋沢は，大蔵省時代からの旧知の間柄で，新聞発行について相談していた[256]。渋沢は渡欧の折り，ロンドンタイムズ社を見学し感銘を受けていたことから，益田社長の新聞発行を激励していた[257]。後に渋沢は「中外商業新報の創刊されたのは明治九年頃であるが，其の創刊に就いては益田孝男や福地源一郎氏などが特に尽力されたものであつた。私も実業界に居た関係上，其の創刊に就いては多少の力添えへをしたが，私のは効果があつたかどうか判らないけれども，兎も角さうした因縁から中外商業新報とは縁故がある訳である。」「益田孝さんは，よく気がついて，経済界の発達を期するにはどうしても物価の高低とか，商業取引の経緯とかを知る機関が必要であるといふ事を頻りに主張された。そして私にも此れを相談されたので，予て経済知識の普及が必要である事を痛感して居つた私は，大いに賛成し応分の助力を約した訳であるが，さういふ動機から中外商業新報が生まれたのであつて，所謂経済新聞としては我国最初のものであると思ふ」と述べている[258]。明治22年に1月に「中外商業新報」に改称した。その際も渋沢は株主の一人として会社を支援した[259]。

第2節　製紙事業

明治の初め，洋紙の将来的な需要を考え製紙の重要性を考えた人は少なからずいたが，王子製紙社史は「最も進歩的な考えを持ち，且つ之を実現する力をもつていた者は渋沢栄一であつた。渋沢は慶応三年一月（1867年）徳川民部卿の随員として渡欧し，つぶさに海外の工場を視察した結果，日本にも早く製紙工業を興す必要を痛感して，明治五年十一月，他に率先して抄紙会社の設立を出願したのであつた。これが後の王子製紙であつて，渋沢栄一こそその生みの親であつた[260]」としている。渋沢は「我国に於いて洋紙の製造

(253)公益財団法人渋沢栄一記念財団『渋沢栄一伝記資料』27巻526ページは，「福地源一郎君のやつて居た東京日々新聞に資金を提供してやることになり，銀行業者側も其発展に力添へしたことがある。私も一万円程出し新聞の発展を望んだ一人である」と述べている。

(254)社史編纂委員会『毎日新聞七十年』，587ページを参考とした。

(255)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻700ページは，「明治十四年以来同新聞社資本主ノ一人トナリ後チ関直彦ノ福地ニ代リ主筆タリシトキ先生ハ業務ニ就テモ指図ヲ与ヘタルコトアリ」と記している。

(256)日本経済新聞社110年史編集委員会『日本経済新聞社110年史』，31ページは，「渋沢氏は実業界の指導者として多くの事業の創立，経営に関与し，また商法会議所の設立等，欧米の進んだ諸制度をわが国に導入することに努めた時代の先覚者であり，益田氏は事あるごとに意見を聞き，兄事した間柄であった」と記している。

(257)日本経済新聞社社史編纂室『日本経済新聞八十年史』，6-7ページを参考とした。

(258)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』下巻，141-142ページ。

(259)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻701ページは，「明治二十二年一月二十七日中外商業新報ト改称ス先生ハ同新聞ノ出資者ノ一人トシテ同新聞ノ改良ニ力ヲ添ヘタリ而シテ同新聞ノ主幹トナリ其拡張ニ最モ力ヲ処シタルハ木村清四郎ニシテ木村ハ常ニ先生ノ指揮ヲ受ケテ従事シタルモノナリ」と記している。

(260)成田潔秀『王子製紙社史』第一巻，2ページ。

を始めたのは，明治五六年の頃である。未だ私が大蔵省の役人をして居つた頃の事であるが，其頃迄は西洋紙は総て海外から其の輸入を仰いで居つたのであるが，明治五年頃には大蔵省紙幣寮に於いて公債証書，紙幣，諸印紙などの発行があり，其外に洋紙の需要が漸次盛んになる傾向が顕著なので，主として私が大体の骨組を案じ出し，紙幣寮から三井組，小野組，島田組に勧めて製紙業を始めるやうに尽力した。之が動機となつて明治五年初めて抄紙会社を創立し，英国から製紙機械を購入し」事業を始め，「此れが後年の王子製紙会社の濫觴であり，且つ我国に於ける洋紙製造業の嚆矢である」と述べている[261]。

そして渋沢は「明治維新後第一に進むべきものは文運である，此文運が進歩致さねば国家の智識は発達する訳に参らぬ，智識が発達せねば凡ての事業も挙らぬ，故に西洋各国は総て此文運の発達に大層注意をする，扨て其文運の発達は百種のことがござりませうが，之を要するに印刷が便利で夫が且つ速でなければならぬと云ふことは最も関係の多いものである，其印刷が価簾く且つ便利にして速になるのは何かと云へは即ち紙を製する事業興つて大に力あると云ふことは欧羅巴なり亜米利加なり各国に例のあることである，当会社は此に見る所があつて始めて此洋紙製造の事業を企て起したのでござります」と述べている[262]。即ち渋沢は，明治維新においては文明（文運）を発展させることが大事で，そのためには，印刷は欠かせないもので，廉価な紙を製造することは大事なことであると論じたのである。

渋沢は，明治6年5月に退官すると，明治7年1月に抄紙会社より会社の事務取扱権限の委任を受けた[263]。そして渋沢は「明治30年頃迄同会社の経営の衝に当つたが，其の基礎を築き上げる迄には一通りならぬ苦心を要した」と述べている[264]。王子製紙は明治8年6月に王子工場が完成し，7月から米国人トーマス・ボットムリー技師の下，イギリス製の機械を使い製紙を試みたが，うまく紙ができず2ヶ月しても紙を作ることはできなかった[265]。渋沢は「隔日位」のペースで工場に見に行き「米国技師に」，「原料も水も薬品も総て君の注文通りの物を取揃へてある」ので，「結局君の技術が未熟であるからだ」と責めたところ，「『一週間だけお待ち願ひたい。其の期間内に旨く行かなかつたら，会社を放逐されても不服は申さぬ』と言ふので，其後一週間の猶予を与へ」，「困つた事だと思つてゐると，天祐と云はうか，技師の熱心な研究の結果か，兎も角紙が漸く延び出すようになつた」と述べている[266]。明治8年10月に白紙製造に成功したことから，12月16日に開業式を挙行した[267]。しかし製品の品質は良くならず，「粗悪な品で，苦心して製造し

(261)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻561ページ。DNP年史センター，27ページも王子製紙の「母体ともいえる抄紙会社の誕生は，明治維新の元勲井上馨大蔵大輔を補佐する大蔵大丞の要職にあった渋沢栄一が，江戸時代以来の豪商，三井・小野・島田の3組に製紙事業を日本で興すことを呼びかけたことに始まる」と記している。

(262)渋沢栄一（青淵先生）「青淵先生の祝辞」（『龍門雑誌』78号），2ページ。

(263)渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』，73ページ。

(264)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，562ページ

(265)渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』，17ページと成田潔秀『王子製紙社史第一巻』5ページを参考とした。

(266)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，563-564ページ。

(267)成田潔秀『王子製紙社史』第一巻，5ページと渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』，17ページを参考とした。

ては見たものの値段が安いから，とても算盤が取れる筈がない」状態で，会社は損失を出し続けることとなった。そして，渋沢は，「会社当局者の苦心といふものは，全く想像以上だつた」と述べている[(268)]。同社の経営は難しい状況が続いたが，渋沢は「欧米先進国に学んで其の長所を採り入れなければならぬ」と考え，「製紙研究の為めに会社から人を派して親しく彼の地の状況を視察せしむと共に，実地の研究をなさしめて之れを会社に応用する為め，明治十二年の秋に社員大川平三郎君をアメリカに派遣した」[(269)]。

大川平三郎は渋沢の甥で，ボットムリー技師に師事し，熱心に製紙技術を学び，「ボットムリーが任期満了で退職するとき（1877年5月）には，機械の仕組みから運転管理に至るまで，すべて師に勝るレベルに達したといわれるほどになっていた」。大川平三郎は，「その後も研究心の旺盛さは変わらず，1879（明治12）年に会社幹部宛に建白書を提出した。内容は製紙業の経営のあり方から技能技術，原料と製法，製品品質，はては給料に至るまで，製紙業の現状を分析，問題点を指摘したもので，解決法は，アメリカの製紙会社の実情を直接学び取るしか方法はないと断言」するものであった[(270)]。研究熱心な大川の進言を後押しする人物も渋沢の周囲にいたが，渋沢は大川の若さ（当時19歳）と英語力に不安を感じ，英語が堪能な三井物産の益田孝に同席を頼み，面接を行った。益田の英語による質問に対して，大川が見事に回答したことから，渋沢は彼を抜擢しアメリカに派遣することを決定した[(271)]。大川は，明治12年より明治13年10月1日に帰国するまでの一年間，米東海岸のホリヨークの製紙会社で働きながら，技術を吸収し，独自の技術・研究成果を逐次本社に文書で報告していた。そして帰国後，修得した技術を応用して，日本で入手しやすい藁を原料とする新しい方法を開発しテスト用の新聞用紙を製造することに成功した[(272)]。

明治16年頃になると輸入品との価格競争となり，生産費を下げる必要に迫られたことから，大川は英国で新技術を修得し，帰国後，木材を原料とした製紙に取り組んだ[(273)]。そして王子製紙は新しい装置を使い，製法もいろいろと工夫し生産費を抑え生産力を増す方法の開発に成功し，明治23年静岡県に気田工場を開設した。我国初の木材パルプ工場であった[(274)]。

明治26年，株式会社組織となり社名を王子製紙株式会社と変更した。この頃に，新聞・雑誌・書籍の発行が伸びたことから，洋紙の需要が増大した。そのことから需要に応えるため，設備投資を行い三井財閥より迎え入れ，経営の実権は三井財閥が掌握することとなった。後に渋沢は，三井側は「会社を渋沢の経営に任じて置いては駄目だと云ふ意向で自ら経営しようとしだした。そこで私はそれを一向に差支えないから手を退かふと云ひ，大川にも此事を云ひ含めたが，大川は聞かない。遂に資本者側の三井派と実際仕事をして居る私等の派とが葛藤を生じ，遂に実際派は連袂辞職して仕舞つたのであります」と述べてい

(268)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，564-565ページ。
(269)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，567-568ページ。
(270)DNP年史センター『王子製紙社史　本編』，37ページ。
(271)渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』，22ページを参考とした。
(272)DNP年史センター『王子製紙社史　本編』，38ページを参考とした。
(273)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，570ページを参考とした。
(274)DNP年史センター『王子製紙社史　本編』，39ページを参考とした。

る[275]。明治 31 年，渋沢は取締役会長を辞任した。そして大川の他，大川に育てられた幹部が退社したことから，経営陣の立て直しに藤山銀次郎が当たるが苦労することとなった[276]。渋沢は辞任後も経営不振が続いた会社のために奔走し，立て直しに世話を焼いたことから，渋沢が私益よりも公益を優先したことが窺える[277]。

後年，渋沢はつぎのようなことを述べている。「会社の組織は一つの共和政体のやうなものである。株主は尚国民のやうなものである，選まれて事に当るものは大統領若しくは国務大臣が政治を執るやうなものである，果して然らば其職に居る間は其会社は我が物である，而して其職を離るる時にはそれこそ直さま敝れたる履を捨つるが如き覚悟を持つて居らねばならぬのである。故に此会社に立つものは，其会社を真に我ものと思はなければならぬ，又或る場合には全く人の物だと思はなければならぬ」というのである[278]。正に王子製紙のように，我が子のように育てても株主の意向により，人の物と考えるべきだと渋沢は述べている。

第 9 章　病院・社会事業・社交・劇場・その他

第 1 節　病院

渋沢は近代的な病院をフランス滞在中に初めて訪問し，この地では，人命が重んじられ天寿が全うできると考えたようである[279]。帰国後，渋沢は多くの医療事業に関わったが，欧州滞在の経験もこのことに関与しているように思われる[280]。

現在の聖路加国際病院は明治 7 年に英国人医師ヘンリー・フォールズが築地の外国人居留地に，築地病院を建てたのが始まりで，明治 35 年に米国聖公会の医師ルドルフ・トイスラーが買取り，聖路加病院と改名した。その後トイスラー院長は，同病院を拡張して国際病院にすることを発案した。米国より寄付金，設立委員も来たことから，大正 3 年 7 月，大隈重信首相が，国際病院設立計画評議会を開き，首相が会長，渋沢ら 3 名が副会長に就任した。大正 4 年 3 月 24 日の評議会で，病院の敷地購入手続きは渋沢に任せられた。渋沢は大正 8 年には，評議会の会長に就任した。新しい敷地は，築地近くの明石町となり，大正 12 年 3 月に工事が始まった。同年 9 月 1 日の関東大震災の火災で病院の施設は全て消失し，患者は建設中の基礎のコンクリートの上に避難した。大正 14 年 3 月 18 日，明石町に産院建物がようやく完成した。建設費の多くは，米国からの寄付などで賄われたが，渋沢栄一の「力強いバック」を得ることができたとトイスラー院長は述べている[281]。そ

(275)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』 別巻第 5603 ページ。

(276)DNP 年史センター『王子製紙社史　本編』，43 ページを参考とした。

(277)渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』，40 ページを参考とした。

(278)渋沢栄一（青淵先生）「渋沢先生の訓言」（『龍門雑誌』第 249 号），6 ページ。

(279)渋沢栄一著，大塚武松編『渋沢栄一滞仏日記（航西日記）』，77 ページに，「此の地にては病者はかならず病院に就て療養を請じ医療の過ちにて夭殞なく其天然の齢を逐るを得せしむといふ是人命を重んずるの道といふべし」と述べている。

(280)稲松孝思，松下正明『渋沢榮一の第三回パリ万博参加体験と明治前期の福祉・医療事業への関与について（一般口演，一般演題抄録，第 41 回日本歯科医史学会・第 114 回日本医史学会合同総会および学術大会）』（「日本歯科医史学会会誌」），195 ページは，「渋沢が関与した福祉医療事業は，パリ・ヨーロッパ滞在中の渋沢自身の体験や，人脈が関与する例が多い」としている。

の後も聖路加病院はトイスラー院長の主導で，増築が行われた。昭和3年に新病院建設の募金のため院長が渡米することとなると，渋沢はわざわざ病院を訪問し院長を激励している[282]。昭和5年3月28日，病院新館の定礎式が行われた。その際には評議員会代表の渋沢の挨拶が代読された[283]。渋沢は晩年まで聖路加病院を応援し続けた。

渋沢は他に，日本結核予防協会副会頭，中央盲人福祉協会会長，籟予防協会会頭，日本赤十字社常議員などを務めた[284]。

第2節　社会事業

渋沢が終生力を注いだ事業に社会福祉事業がある。航西日記に，仏皇帝がロシア皇帝のために開催した競馬を観戦した折に，「仏帝と魯帝と十萬フランクづゝの賭ものせしが魯帝の方勝たりしかば其十萬フランクを以て魯帝より直に巴里貧院に寄付せし」というエピソードが書かれている[285]。この経験が帰国後の社会福祉事業のきっかけの一つになったのかもしれない[286]。またフランスでは福祉が進んでいて慈善活動も盛んに行われていたことから，渋沢の福祉に対する基本的な考え方が形成されたように思える[287]。

渋沢は，晩年に慈善事業について次のように語っている。「慈善事業に金を費す事を以て一種の道楽と思うて居る位である。併し之れは自分一人でいくら心配しても出来るものではなく，是非とも世間一般の有志に向つて助力を乞はなければ」ならないと思っている。

---

(281)聖路加国際病院八十年史編纂委員会『聖路加国際病院八十年史』，13-17ページ，公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』36巻165-168ページを参考とした。

(282)聖路加国際病院八十年史編纂委員会『聖路加国際病院八十年史』，19ページは，「出発の前日，評議員渋沢栄一子爵がトイスラー院長を病院に訪ね『私は衷心からあなたの使命の成功を祈ります』と，送別の挨拶と激励の言葉を贈った。トイスラーと88歳の老子爵は熱意を面に現わして堅い握手を交わした。トイスラー院長は4月，米国聖公会の全米使徒委員会に出席した。この時，265万6500ドル募金が承認されたことを知った」と記している。

(283)聖路加国際病院八十年史編纂委員会『聖路加国際病院八十年史』，20ページは，「松井主教の祝祷をもって祭事を終わる。ここで，マキム主教の説教，評議員会代表渋沢子爵の挨拶（坂谷男爵代読）があり，ウッド博士，米国大使の祝辞があった」と記している。

(284)公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』，86ページ。

(285)渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』66ページ。

(286)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，27ページも，「競馬競技会でロシア皇帝が得た賞金10万フランをパリの『貧院』にそのまま寄付したことが」，「渋沢の後年の社会事業支援のきっかけとなったかもしれない」と記している。

(287)大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想』，60-61ページは，渋沢は「パリ万国博覧会に参加し，さらに各国を歴訪した時，経済力はもとより科学技術，社会の諸システム等において，欧米先進国が日本よりも遥かに進んでいることに驚かされた。」「福祉が進んでいること，裕福な階級の婦人たちが率先して慈善活動を行い多額の寄附を集めていることも新鮮な驚きであった。」「渋沢が具体的な形をともなって社会事業というものをイメージできるようになったのもこのヨーロッパ滞在中のことであった。この時の体験を原点として，先進諸国に学ぶ姿勢を生涯持ち続けながら，その後日本の社会事業において新しい試みを次々と展開していくこととなる」としている。また渋沢が東京養育院の院長を永く務めたのは，フランスでの経験が影響しているようで，一番ヶ瀬康子「講演　渋沢栄一と日本の社会福祉」（『青淵』631号），27ページは，渋沢「先生は幕臣としてフランスに随行して」，「フランスの社会事業などを見ておられ」，「東京養育院の設計図などにも，フランスの慈善施設のあり方，社会事業のあり方がよくあらわれておりまして，若い時期に見た欧州の社会事業の影響は，確かにあったと思います」と述べている。

「外国の実際を見るに先進各国は孰れも驚く可き程多くの力を此の方面に用ゐて居り，中には死後の財産を残らず慈善事業に寄付するなどと遺言する者もある位で」，「丁度私が維新の前に徳川民部公子に随行してフランスに留学して居つた当時の事であるが，或日パリー居住の陸軍将官の夫人の名で書面が参り，『今年の冬は余程寒い様であるから，パリー市街の貧民を暖かにしてやりたいと思ふ。就いては来る何日に某所に来て是非何か買つて下さい』といふ依頼が書いてあつた。」「初めて慈善市といふ事の性質が解り，成程之れは博愛済衆の趣旨に適うて良い事であると感心した様な次第であつた。其後も彼地では度々寄付を勧誘して来たので，其の度毎に民部公子は之れに応ぜられたが，私は其の当時日本に帰つたならば，是非とも斯う云ふ様な習慣を作りたいものと思つたのである。明治元年にフランスから帰朝してからは，私の身の上には色々な変遷があつたが，明治六年役人を廃めて民間に下ると間もなく，養育院の事を世話する事となつた」というのである[288]。また慈善事業について否定的な意見に対して，渋沢は「慈善といふ事は結構な事で，決して悪い事では無いと私は信ずる。」「宗教上の見地からではなく，社会上から見ての事である。従来，社会上から慈善と云う事には大分反対の議論が行はれてゐる。それは不幸の者に対して恵み与へるといふ事は」，「兎角人間を懶怠に導き易い。」「成程此論も無理で無い様にも思はれる。」しかし「人間は本来平等の者である。然るに一方は飽食暖衣して猶余りあるのに，一方は飢餓に瀕して苦悩を訴へて居る。此の場合にも他人は他人で，吾は吾であると云うて，少しも惻隠の心を起さなくとも可いものであらうか。私は矢張り社会政策の上から云うても，貧窮の為めに漸く不良の心を助長して社会に害悪を及ぼす様な人々を，慈善事業に依つて之れを未然に防止する時は，他日斧を用ゐなければならぬ者も嫩葉のうちに摘み取つてしまふ事が出来ると思ふ」と述べている[289]。

渋沢は生涯において，600ほどの社会福祉・教育事業の育成に関与した[290]。その代表的な活動として，東京養育院への関与を挙げることができる[291]。

養育院は，老中松平定信が飢饉や貧民救済のために積み立てさせた七分金という資金で運営された教育所と養生所に由来している。これらの施設は幕府の瓦解によりなくなっていたが，七分金は江戸市民の共有金として残り，窮民救済資金として明治政府の営繕会議所（後の東京会議所）に引き継がれた。この資金で三田と麹町に教育所を設けた[292]。また「明治三年に露国の皇族が日本に来遊されるに就いて，東京市中に乞食が多くて困るから，之等の乞食を処分しなければいけないと云ふので」，「共有金から費用を出して一時を糊塗した」。貧民，身障者，老人・幼児を上野に建物を購入して収容し，東京府養育院と命名された[293]。

東京養育院は明治5年東京の諸環境を整備するために東京会議所が発足し，明治6年に

(288)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，465-469ページ。
(289)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，466-468ページ。
(290)石井里枝，63ページを参考とした。
(291)渋沢著，守屋編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，269-280ページ及び，島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，181-186ページを参考とした。
(292)大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想』，129-130ページと渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，450ページを参考とした。
(293)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，450-451ページを参考とした。

渋沢は取締に就任した。この会議所の事業の一つとして病人・貧民救護のため東京養育院があった[294]。渋沢は明治9年5月11日に東京養育院事務長（事実上のトップ）に就任したが，これが渋沢の福祉活動の開始であると考えられている[295]。

明治9年から12年の間，東京府の直轄事業であったが，経費は依然として共有金から支出されていた。そして明治12年より18年まで地方税で賄われるようになった[296]。この間，度々養育院を廃止するとの意見が出て，明治16年には府議会で廃止の決議がなされた。すると渋沢は「早速芳川知事を訪問して，『東京府会は実に無情である。先に商法講習所の廃校を決議し，今復引続いて養育院を廃止すると云うのは，余りに残酷な処置ではなからうか？』」と論じたが，「全然府廳の手を離れて経営するに就いては，基金の準備が先決問題であるから，此点に就いては私共も大いに苦心した」と述べている[297]。そして養育院の費用は東京会議所の所有地の売却代金を渋沢が頭取であった第一銀行に年6分で預金し，その金利収入で賄われるようになった[298]。この制度は，寛政年間に地主と幕府の資金を飢餓・困窮に備えて運用した七分積金に由来している[299]。渋沢は，この方式を他の社会事業にも利用し[300]，健全な経営を行った[301]。

渋沢は養育院を生涯に亘り58年院長を務めた[302]。そして渋沢は，正に養育院を「自ら手塩に掛けて育てた」[303]と述べているように，親身になって直接養育院の運営にあたった。渋沢は，特に子供の教育には工夫を凝らし，子供に「家族的の親しみと楽しみとを享けさせるのが最も肝腎であると」考え，「書記の一人に云はば親父の役をする様に注意させ，毎日煎餅や薩摩芋等を其の書記の手から与へて，次第に子供等と接近させる様にし，時には是等の子供の遊び相手になつて親しみを増させる様にしたのである。此の方法を実行して見ると仲々成績が良く，今迄沈みがちであつた気持ちも直り，教育の方も以前よりは余程良くなつて来た」と述べている[304]。

---

(294)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，182-183ページを参考とした。
(295)大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想』，128ページを参考とした。
(296)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻494ページは，「創立より明治十一年マテハ共有金ヲ以テ支弁シ十二年ヨリ十八年マテハ地方税ヲ以テ支弁シ，十八年七月一日ヨリ独立スル」と記している。
(297)龍門社編纂『青淵先生六十年史』，第二巻456ページ。
(298)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，183ページを参考とした。
(299)山名敦子「明治期の東京養育院―『公設』の原型をめぐる」（『渋沢研究』第4号），4ページ，および島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，183ページを参考とした。
(300)島田昌和『渋沢栄一　社会企業家の先駆者』，183ページを参考とした。
(301)木村昌人「渋沢栄一研究のグローバル化―合本主義・『論語と算盤』」（『渋沢研究』第27号），76ページは，「渋沢は，フィランソロピー活動に対しても健全経営を強く求め，東京養育院，二松学舎など自らも組織の代表となり，寄付集めと経営を行った」と記している。
(302)渋沢栄一著，守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』，270ページ
(303)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，449ページは，「私は其の創立後間もなく此の事業に関係し，今日に至るまで引続き院長の職を汚して居る。固より私は至つて微力ではあるけれども，自ら手塩に掛けて育てただけに，今日の盛大なる状態を見るにつけても，其間に於ける曲折波瀾が徐ろに思ひだされる」としている。
(304)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，453-454ページ。

第３節　社交

渋沢は，日本を立つ際にフランス文化は何でも勉強しようと考え，その中には社交も含まれていた[305]。渋沢は帰国後，社交を目的に東京商工会議所，日本工業倶楽部などの設立に関わった。渋沢は，社交により企業間の情報交換が行われることが，民間企業の発展に繋がると考え，これらの組織に関わる仕事を熱心に行っている。特に，東京商工会議所については，前身の東京商法会議所，東京商工会を含め，会頭を永年務めるなど発展に尽力した[306]。

前身の市民組織としては，江戸時代に，江戸市民の共有財産を基礎としていた江戸町会所という制度があった。その後身として，明治５年に東京営繕会議所という市民の自治組織ができ，市中の道路・橋の補修，養育院，共同墓地の管理などを行った。この組織は直ぐに名称を東京会議所と変更し，渋沢は明治８年に委員に，９年に会頭となるが，明治10年に全ての業務を東京府に引き継いだことから，東京会議所は解散となった[307]。

しかし，東京会議所がなくなると，「一般商工業の利害に関係ある事柄に対しては，其の利害得失を諮問する事が出来ない[308]」こととなった。「従来の東京会議所の議員は何れも東京府下に於ける名士紳商であつたから，従つて世間でも之れを重く見て居り，府知事も商工業に関する事は総て会議所に諮問し，会議所は民間の実状に基いて意見を開陳して居つたので，府知事の為めには最も必要なる顧問の役目をして居つた」。また「実業家としてもお互ひの聯絡を図り，商工業の発展に資する上に，於いて，有力な団体の無いのは実に心細い次第[309]」という状態となった。民間の商工業者が産業発展のための議論を行ったり，政府に各種事案の諮問をしたりすることができる組織の存在の必要性が感じられるようになった。そのことから，渋沢が工部卿の伊藤博文，大蔵卿の大隈重信に相談したところ，「工部卿，大蔵卿等が先きに立つて誘導される事となつたので[310]」，東京商法会議所の設立が明治11年２月に認可された。

この設立が促進された背景には，不平等条約の改正のための世論の形成と殖産興業の促進の二つが上げられる[311]。条約改正の交渉にあたり，日本政府が世論の反対を理由としたことに対して，英国公使パークスは，日本には商工業者の世論を形成するための代表機関が存在していないことから，日本政府の主張を否定した。条約改正のために，商法会議所の存在が政府としても必要であった[312]。また当時の日本は，殖産興業による富国強兵

---

(305)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，172ページに，後年渋沢は，「フランスの土を踏むと同時に進歩せる文化を研究する事に意を注いだのであつた。殊に政事，軍事，経済，社交を目的として熱心に勉強する決心であつた」と述べている。

(306)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，21ページは，「わが国の商工会議所が今日あるのは，渋沢が献身努力，企画よろしきを得て，その基礎を築いたことによるといっても過言ではなかろう」と記している。

(307)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，18ページと渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，416-418ページを参考とした。

(308)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，420ページ。

(309)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，420-421ページ。

(310)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，422ページ。

(311)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，36ページ。

(312)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，31ページ。

策が急務とされ，そのための貿易の伸展に商法会議所が必要と考えられた(313)。さらに，渋沢は官と民は対等であるべきで，そのためには業界団体を超えた意見交換の場所としての会議所の存在が必要と考えた(314)。東京商法会議所が設立されると渋沢は会頭となり，「委員も当時の民間実業界に於ける一流の人々のみであつたから，頗る有力な商工団体となり他方に於いては政府当局の商工業方面に関する有力な諮問機関たるの実績を挙ぐるに至つた(315)」。「東京商工会議所の歴史は，東京商法会議所の誕生から始まるとされている(316)」。

その後，商法会議所は各地に設立され，明治13年には，全国に28か所，明治14年には34か所に達した(317)。ところが，「政府が推進しようとする産業保護体制と，自由主義，任意組織の会議所体制との間の矛盾は免れなかった(318)」。明治14年に農商工諮問会規則が発布されると，商法会議所の存続は規則に抵触することとなり，さらに商法会議所が受けていた補助金も廃止され，商法会議所は活動できない状況となった(319)。農商工諮問会というような「機関を商法会議所とは全く別個に設立しようとした政府の計画は，商法会議所の存在を無視した措置であるとして，多くの紛糾と論争を捲起こした(320)」。その結果，政府も妥協し明治16年5月，農商工諮問会規則は廃止され，商法会議所は商工会に改編され，東京商法会議所は解散し，新たに東京商工会が設立された。「名称は変つたけれども実質に於いては一旦有名無実となつた商法会議所が復活するに到つたのである(321)」。同年11月，東京商工会の創立総会において，渋沢は，会頭に選出された(322)。新たに設立された東京商工会は，「今や重だった商工同業組合とその組合員および有力な会社を網羅して，真に商工業社を代表する公認の団体となった。」そして「東京商工会の活動分野は，もっぱら意見活動であり，しかも諸官庁を対象にしたものが断然多かった(323)」。東京商工会は，明治23年まで存続し，「其間に於いて商工会自身も相当活動したが，時勢は刻々に進んで東京商工会の如き組織を以てしては，漸次時勢の要求に応ずる事が出来ないやうになつた。何うしても欧米諸国に於ける商業会議所と同一の機能を有し，同様の地位を築き上げるやうにしなければならぬ様になつて来た(324)」。

明治23年9月，商業会議所条例が公布され，翌年1月に東京商業会議所は設立認可され，東京商工会の全ての業務が継承された。同年7月の臨時会議において，渋沢は会頭に選出された(325)。

---

(313)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，36-38ページ。
(314)渋沢史料館『商人の輿論をつくる！』，44ページと渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，420-423ページを参考とした。
(315)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，421ページ。
(316)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，9ページ。
(317)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，49ページ。
(318)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，50ページ。
(319)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，423ページは，「折角発達しつつある商法会議所が挫折したのであるから，私に取つては遺憾此上もなかつたのである」としている。
(320)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，50ページ。
(321)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，424ページ。
(322)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，51ページ。
(323)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，51ページ。
(324)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻，425ページ。

渋沢は，東商や各地の商業会議所を通じて，多くの活動を行っている。その主な内容として，以下の５つを挙げることができる[326]。

① 横浜で日本人の商人が生糸を扱うことができるように外国業者に対抗したこと。
② 日清・日露戦争後，戦時経済を通常経済に戻すための建議を政府に行ったこと。
③ 日露戦争後に，６大都市の商業会議所代表からなる渡米実業団を組織し，米主要都市を訪問したこと。
④ 東北振興のために東京と東北地方の地域経済界の異業種交流を促進したこと。
⑤ 関東大震災からの復興のため内外の商業会議所のネットワークを活用して，募金・救援活動を行ったこと。

第４節　劇場

渋沢は使節の随行員として，パリ滞在中に，オペラを鑑賞して，舞台の仕掛けなどが良くできていると感心した[327]。パリでの観劇の強い印象が渋沢に劇場創設を強く促したと言える[328]。しかし劇場建設の関心は明治８年頃より留学帰国者を中心に高まってはいたが社会的な理解は得られない状況であった。明治19年に演劇改良会の設立を伊藤博文の婿・末松謙澄が主唱し，井上馨らの実力者が発起人，渋沢栄一などが支援者となってなされた。そして，1. 写実的な演劇，2. 脚本を学識者や作家に作らせ品位のあるものとすること，3. 上流階級の観劇に相応しい劇場を建設することを提唱した。しかし経済情勢の悪化,急速な欧化政策に異を唱える風潮の台頭などにより計画はなかなか実現しなかった。明治22年には歌舞伎座が開場した。しかし国賓に歌舞伎などを見せるには設備において，まだ不十分な状態であった。外国では，国賓を待遇するのはまず観兵式と観劇という時代であった。ようやく明治39年10月18日に帝国劇場株式会社の発起人総会が実業家31人により開かれ，渋沢が創立委員長となった。翌40年２月に資本金120万円にて設立手続きが行われ，取締役会長に渋沢栄一，専務取締役に西野恵之助，取締役に大倉喜八郎，福沢桃介らが就任した。劇場の建設場所としては皇居前の丸の内の一画を三菱合資会社より借り受けた。外装はフランス風ルネッサンス様式とし，他の劇場にはない貴賓席を設置し，外国からの貴賓を接遇できるものとした[329]。明治43年２月26日，株主総会にて，渋沢栄一は取締役に再選され取締役会長に再度就任した。そして明治44年３月１日，華々し

(325)東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』，58ページ
(326)渋沢史料館『商人の輿論をつくる！』，44-45ページを参考とした。
(327)渋沢栄一（青淵），杉浦靄人，『航西日記』，51-52ページに，渋沢は「舞台の景象瓦斯灯五色の瑠璃に反射せしめて光彩を取るを自在にし又舞妓の容輝後光或は雨色月光陰晴明暗をなす須臾の変化其自在なる真に迫り観するに堪たり」と記している。
(328)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』25巻364ページは，後年渋沢が「『グランドオペラ』は其頃は建築中であつたが立派に出来上つて世界の大劇場として興行して居ります，私共は其オペラを一夕見ました，是は政府が所持して居る政府の興行のオペラである，何れの国都にも此位立派の場所はなからうと思ひます，音楽・演芸等のことは私共には解りませぬが如何にも欧羅巴の粋を集めた興行でありまして，舞台の設備，又は運動場・休息所等迄も取設けられて実に能く行届いて居ります，其劇場の構造といふものは莫大の資本を以て作られて殆んど有ると有らゆる風流美麗を極めて居ると申して宜い，それで仏蘭西人は自ら称して巴里は世界の中央庭園であるといふて自ら誇つて居ります」と述べたと記している。
(329)『帝国劇場100年のあゆみ』編纂委員会編，26-27ページを参考とした。

い開場式を行った。式場において，渋沢は次のような式辞を述べている。「維新以降事物の進歩著しきが中に，演劇も其間名優の輩出するありて多少の進歩はなしたれども，全体に亘りては未だ欧州の夫れ程には発達せざりき，之を完成せんとするのは吾人の希望にして，今日此劇場の設立を企てたるは即ち其第一歩なり」，「大方諸氏の直接間接に援助せられたるに因って此設立を見るに至りたる事は深く感謝の至りに堪へず，茲に会社を代表して」述べた(330)。渋沢が，日本にも欧州の様な立派な劇場の建設を永年希望していたことが，この式辞によく表れている。後年，渋沢は帝国ホテルと共に帝国劇場は外国の貴賓が訪日した際に必要であると思ったのと演劇の改良の道を講じたいと思ったためであると述べている(331)。帝劇の開場は欧米の劇場にひけをとらないもので，明治の文明開化の象徴的な出来事で日本の演劇・興行制度史上において，一大エポックであった。渋沢は，すでに71歳となっていて，数年前までに多くの役職を辞していて，この時には帝劇の会長と第一銀行の頭取など限られた役職を残すのみであったことからも，近代劇場の創設に渋沢が並々ならぬ力を最後まで注いでいたと言える(332)。

第5節　その他（洋行したことが間接的に影響したもの）

上記の他にも，渋沢が興した事業の中には，例えば富岡製糸工場のように，フランスから機械を導入するなどフランスと関係が深い事業がある。しかし製糸は日本の外貨獲得のために始めたもので，渋沢の洋行との関係は間接的と言えよう(333)。あるいは東京の田園調布などの都市開発事業のように，後に明治期になってから欧米を訪問した際に得た知識などからヒントを得たような事業もある(334)。本稿においては，飽くまで徳川昭武の随行員として洋行した時に得た経験を日本で実践したことが史料などから判明したもののみを取り上げている。

第2部「小括」

渋沢栄一は明治元年にフランスより帰国し，数年間大蔵省に席を置いた後，民間人となり多くの企業の設立に関与した。渋沢が帰国後に日本で実施した施策・事業などは欧州滞在中に得た知識ないし経験に基づくものが少なくないことが確認された。具体的には，フ

(330)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』47巻384ページを参考とした。

(331)渋沢栄一，小貫修一郎編著『青淵回顧録』下巻，46ページは，「今の帝国劇場を創立するのに，私が多少骨を折るに至つたのは私が芸事を解するからでもあるが其の趣意とする所は帝国ホテルを設立するに尽力したのと同一で，外国貴賓の来朝せられた際に，其の観覧を仰ぐべき演芸の場所がないから，之れを利用し得られる建物を一つ設けて置きたいと思つたのと，又一には之れによつて演劇改良の道を講じたいと思つたからである」と記している。

(332)嶺隆『帝国劇場開幕』，32ページを参考とした。

(333)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』2巻516-520ページを参考とした。

(334)公益財団法人渋沢栄一記念財団，『渋沢栄一伝記資料』53巻370ページは，「三度目の欧米視察を終へて帰朝した子爵（渋沢栄一：筆者注）は『東京』が只乱雑に膨張して行くばかりで，其処に系統も調和も無いのをまざまざと見出すと凝然とはしては居られなかつた，子爵が田園都市の計画を思ひ立つのは此の時である」と記している。また藤田，7ページ「渋沢栄一はイギリスの田園都市に関心をもった。この明治財界の大立者の指導のもとに，現在，高級住宅地の代名詞のように語られる田園調布をはじめとする多くの住宅地が建設される」と記している。

ランスで官と民が対等の関係であることを知り，それを実践するために民間の会社は合本主義で自らリスクを取って競争力を付けるべきと主張した。また渋沢はパリ万博会場で，貨幣・度量衡は国家にとって重要なものと知ったことから，それらの整備に努めた。

渋沢は渡欧の途中，スエズにて大規模な工事が行われているのを見て，組織で事業を興し国力を増強すべきで，そのためには合本主義で，商工業者の地位を高めるべきと考えた。渋沢が商工業者を重視している点，渋沢がフランスで万博などを通して間接的に接したサン＝シモン主義の考えと共通する点がある。スエズを運河建設したレセップスもサン＝シモン信奉者で，渋沢は洋行時に，サン＝シモン主義と多くの接点を持って，間接的に影響を受けたものと考えられる。渋沢は人を資本と同様に国家の資源と考え，その資源である個人を組織化するのが合本組織であると考えた。商工業者の位置を上げるべきという考えは，渋沢の立場・経験によるもので，論語からの発想ではない。経営の指針ないし拠り所として論語を考えたというのである。渋沢が言う組織とは株式会社などを指すが,「合本法」とは，単に株式会社を作るテクニックではなく，欧米流の会社組織に渋沢が論語を指針として倫理観・公共性を加味した独自のものと考えることができる。渋沢は一貫して，会社の関係者の利害を調整し，会社の存続を重視し，株主のために利益を求めているが，会社に非社会的な行動を慎むことを常に求めた。渋沢の考え方は同じ日本の財界にあって財閥を形成した岩崎弥太郎とは，渋沢が常に公共性を重視しいた点において異なっていた。

渋沢は，フランスにおいて，銀行の重要性などについてもいろいろとフランス人から学ぶことができた。渋沢は，合本制度を日本で実現するためには銀行制度の導入が大事であることを洋行で学んだと思える。そして，渋沢は日本の産業を発展させるため社会の「動脈の働きをなすべきものは即ち金融機関であつて，先づ以て此の方面の発達を計らなければ」ならないと考えた。民間人となって始めに力を入れたのは，まず第一国立銀行の設立であった。渋沢の事業活動は第一銀行を中心に行われ，渋沢は,「銀行自身の利益よりも寧ろ日本全体の経済の事を先きに考へるといふ態度であつた。即ち日本の実業を振興せしむる為めに，銀行を全国的に活用せしめるやうにしなければならぬと信じた」と述べている。また渋沢は証券の保管制度についてフランスで勉強したことから，渋沢は倉庫業の重要性を良く認識していて，日本でも倉庫業が必要になったと判断して，明治 30 年に渋沢倉庫を設立した。

また渋沢は，渡欧が決まった際に，船舶，器械とかいうことはとうてい外国に叶わないから，何でもあちらの好いものは取りたいと考えた。そして帰国後，非財閥系の重工業を発展させる観点から後の東京石川島造船所，東京製綱，日本鋼管などの非財閥系の造船，鉄鋼メーカーに深く関与した。特に東京石川島造船所については，直接経営に携わった。渋沢は近代産業を発展させるには,「合本組織」によって経営を行うべきと考えた。明治 26 年個人会社から株式会社組織に変更され，社名が株式会社東京石川島造船所となると渋沢は取締役会長に就任した。明治 27 年に渋沢会長は大型船の建造・修理を目的としたドックを新しく浦賀に建造した。しかし，浦賀船渠との過当競争などから赤字経営が続き，明治 35 年 5 月に石川島より浦賀の工場全部が浦賀船渠の新規発行の株式 90 万円と現金 10 万円で譲渡された。石川島が浦賀で行った大型投資は非財閥系の造船会社を育成するという渋沢の意志が働いたものであったが，私企業の投資としては失敗という結果であった。

渋沢は渡欧の際に，船や汽車に乗り強く心を動かされ，交通機関の発達が国家発展の基礎となることをよく理解したようである。明治7-8年頃より海運事業は三菱の独占状態となっていたころから，渋沢は，明治13年に，三菱の独占を阻止するために，三井物産社長の益田孝と図って東京風帆船会社を設立した。そして明治15年東京風帆船会社，北海道運輸会社，越中風帆船会社の三社を渋沢が「発起人の一人として奔走し」設立された共同運輸会社が吸収した。すると岩崎（三菱）は渋沢の動きを阻止しようと向島の料亭で渋沢に合本組織の考え方を見直すように説得を試みるなどして，正に渋沢合本組織対岩崎個人経営の対立の構図となり，双方，共倒れとなりかねないような激しい競争となった。政府が中に入って，両社の合併の検討が重ねられ，明治18年，両社は合併し新会社を日本郵船と命名し設立がなされた。明治26年10月に渋沢は，日本郵船の取締役に就任した。そして，明治30年に，日本郵船は欧州航路，米国航路，豪州航路を開設した際に，渋沢は，「茲に至つて昔日一片の理想視され，空想視された私の主張が漸次具体化さるるに到つた」と述べている。

渋沢は，鉄道業に関しては，日本鉄道（現東日本旅客鉄道）の株主総会の議長を務め，北海道炭礦鉄道，九州鉄道についても関係者の利害調整を図るなどの尽力を行った。

渋沢はパリ滞在中に，はじめて新聞というものを知った。渋沢は，新聞について，世間の出来事や国家レベルの重要な問題まで報道して，皆が知ることができ，非常に重宝なものだと考えるようになった。これが帰国後に新聞社（後の毎日新聞，日本経済新聞）への関与に繋がったと考えられる。

渋沢は，洋紙の将来的な需要を考え製紙の重要性を気付いていた。そして渋沢は王子製紙に深く関与し，同社の社史には，「渋沢は慶応三年一月（1867年）徳川民部卿の随員として渡欧し」，「日本にも早く製紙工業を興す必要を痛感して，明治五年十一月，他に率先して抄紙会社の設立を出願したのであつた。これが後の王子製紙であつて，渋沢栄一こそその生みの親であつた」と記されている。渋沢は，明治6年に事務取扱権限の委任を受け，明治30年まで，会社の経営に直接あたった。そして，明治31年に会長を辞任した後も，渋沢は経営不振が続いた会社のために奔走し，立て直しに世話を焼いたことから，渋沢が私益よりも公益を優先したことが窺える。

渋沢は近代的な病院をフランス滞在中に初めて訪問し，この地では，人命が重んじられ天寿が全うできると考えたようである。帰国後，渋沢は多くの医療事業に関わったが，欧州滞在の経験もこのことに関与しているように思われる。例えば，渋沢は晩年まで聖路加病院を応援し続けた。あるいは，渋沢は他に，日本結核予防協会副会頭，中央盲人福祉協会会長，籟予防協会会頭，日本赤十字社常議員などを務めた。

渋沢が終生力を注いだ事業に社会福祉事業がある。渋沢は，晩年に慈善事業について次のように語っている。フランスから「日本に帰つたならば，是非とも斯う云ふ様な習慣を作りたいものと思つたのである。明治元年にフランスから帰朝してからは，私の身の上には色々な変遷があつたが，明治六年役人を廃めて民間に下ると間もなく，養育院の事を世話する事となつた」というのである。渋沢は生涯において，600ほどの社会福祉・教育事業の育成に関与した。その代表的な活動として，東京養育院への関与を挙げることができる。渋沢は養育院を生涯に亘り58年院長を務めた。そして渋沢は，正に養育院を「自ら手塩に掛けて育てた」と述べているように，親身になって直接養育院の運営にあたった。

渋沢は，日本を立つ際にフランス文化は何でも勉強しようと考え，その中には社交も含まれていた。渋沢は帰国後，社交を目的に東京商工会議所，日本工業倶楽部などの設立に関わった。渋沢は，社交により企業間の情報交換が行われることが，民間企業の発展に繋がると考え，これらの組織に関わる仕事を熱心に行っている。

渋沢は，パリ滞在中に，オペラを鑑賞して，舞台の仕掛けなどに驚き，日本にもあれば良いと考えた。パリでの観劇の強い印象が渋沢に劇場創設を強く促したと言える。明治39年10月18日に帝国劇場株式会社の発起人総会が実業家31人により開かれ，渋沢が創立委員長となった。翌40年2月に設立手続きが行われ，取締役会長に渋沢栄一が選ばれた。そして明治44年3月1日，華々しい開場式を行った。この時，渋沢は，すでに71歳となっていて，残っている役職は，帝劇の会長と第一銀行の頭取など限られたものを残すのみで，近代劇場の創設に渋沢が並々ならぬ力を最後まで注いでいた。

これらの他にも，渋沢が興した事業の中には，例えば富岡製糸工場のように，フランスから機械を導入するなどフランスと関係が深い事業がある。しかし，本稿においては，飽くまで徳川昭武の随行員として洋行した時に得た経験を日本で実践したことが史料などから判明したもののみを取り上げたのである。

〈結論〉

明治期に多くの事業の設立に多大な貢献をなした渋沢栄一は，27歳の時に徳川昭武の随行員として洋行した。この経験がとても良い経験になったと，渋沢は後に述べている。筆者はたまたま，渋沢と同年齢の時期にスペインなどに留学し，筆者は生涯に亘るような強い影響を受けたように感じている。渋沢と筆者では，日本の産業の発展状況も諸環境も大きく異なるが，27歳という年齢は社会やビジネスを多少理解した時期で，この時期に留学することは，日本と外国の違いが良く見え，いろいろと外国の社会から強い印象を受ける。この点においては，渋沢と筆者には共通したものがあるように思える。そのことから，渋沢の洋行は彼の生涯に強い影響を与えたはずだと考え，本稿において検証してみた。

そして，渋沢が洋行で得た知識，特に滞在したパリや見学した万博にて得た知識・経験がどのようなものであったかを検証した。パリに向け横浜を出発した渋沢は，初めてフランス文化に接するが，バターやコーヒーなどをおいしいと感ずるなど西洋文明に対して高い順応性を示した。そして渋沢は西洋文明を理解するために外国語が重要と考えて，フランス語の勉強を始めた。最初の寄港地である上海で，ガスや電信に接し，渋沢は早くも西洋人の科学知識が進んでいることに気が付いた。香港，サイゴン，シンガポール，セイロンなどに寄港するが渋沢は現地の風俗に旺盛な好奇心を示した。そして中東のスエズで上陸した。ここで，渋沢は大規模な運河工事を目にして，工事の規模よりも西洋人が国家の枠を超えて計画を進めていることに感激し，同時に大規模な工事を行うための資金を集める方法と高度な技術を勉強したいという気持ちを強く持った。横浜を出発してから56日目にパリに到着し，グランドホテルに投宿した。このホテルは現存しており，開業当時とほとんど様子が変わっていないことを筆者が撮影した定点写真で確認した。現在の日本人が訪ねても豪華で立派な建物という印象を受ける。当時の江戸は，お城以外に，石造りの建物はなく，渋沢らは，パリの近代的な街並みに，驚いたことであろう。

徳川昭武一行が皇帝ナポレオン3世に謁見に向かうと，一行の姿をフランス人は珍しがり，多くの見物人が通りに出た。このことは，一行にとってもフランス文化は珍しいものであったということを同時に意味していた。渋沢は劇場でパレエを見て，感激し，帰国後に劇場建設に関わったほどであった。また病院を見学した際も渋沢は感激し病人は病院で治療を受けるべきだと考えた。

見学した万博で渋沢は，各国の計り器具や貨幣に興味を示し，大事な制度という印象を得て，帰国後に実践することとなる。そして，新しい技術・文明に直接触れることができ，感激した。また渋沢はフランス滞在中，新聞からいろいろな情報を得て，新聞は便利なものと高く評価した。

フランスでの公式行事が終わると一行は欧州各国を歴訪した。その際に徳川昭武のお供に何人着くかということで，随行員らの間で議論が紛糾した際に，渋沢は素晴らしい調整力を発揮し，問題を解決させた。これは渋沢の高い調整能力の片鱗を見せるようなエピソードであった。スイスの軍事施設を見学した際は，志願者による民兵組織が良くできていると感心した。しかし有名な時計工場を見学してもあまり興味を示すことはなかった。一行は各国において軍事施設や武器などを見学することが多かったが，公式日記に記録を残していない。ベルギーを訪問した際に，皇帝が「わが国の鉄を使うように」と発言し，自国の商売を手伝うことに渋沢は大変驚いた。洋行で最も印象に残った事柄の一つであった。イタリアでは鉄道が一部開通しておらず，馬車で移動し，鉄道の重要性を渋沢は良く理解することとなった。イタリアの大理石でできた立派な建築物に渋沢はあまり興味を示さなかった。イギリスでは武器類を多く見学するが，むしろタイムス新聞社とイングランド銀行の近代的な様子に渋沢は強い興味を示した。

欧州各国への訪問からパリに戻ると直に，幕府が崩壊したという新聞報道がなされた。その情報に対して，一行のメンバーや留学生らは，半信半疑であった。しかし，渋沢は「報道が事実であろう」と口にした。渋沢の状況分析が正確であることを意味するエピソードであった。帰国準備にあたり，渋沢は徳川昭武の留学資金で購入した公債を処分し，利益を得て，金融取引を実体験した。貴重な経験となり，帰国後の金融に関わる素地を得た。

後年渋沢は，「最初の四十四年前の旅行は非常に不便極まるもので」あったが，「自分の一身上一番効能のあつた旅は四十四年前の洋行と思ひます」と述べている(335)。渋沢が使節に参加するに際して取った姿勢はつぎのようなものであった。渋沢は使節に参加できることを大いに喜び積極的な態度で渡航した。そしてフランス語の習得に積極的に努めた。渋沢は，帰国後に日本で実践しようと積極的に進んだフランスの産業・文化の吸収に努めた。渋沢の目線で当時のパリがどのように見えたかを滞在ホテルの定点写真，万博会場の写真やイラストなども利用し再現することを試みたところ，当時の渋沢には印象的であったことを確認することができた。また航海での寄港地，パリ，あるいは欧州各国を渋沢は訪問することで電信などの新しいシステムの効能，産業全般の発展の重要性，教育の重要性，財政健全の重要性，資本を合わせる仕組みの重要性，劇場の効能，社会事業の重要性，病院の重要性，度量衡の重要性，新聞の便利性，実業の重要性，鉄道の便利性など多くの

(335)渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』第265号），12ページ。

知識を得ることができたことを確認した。

第2部では，渋沢が洋行で得た知識・経験に基づいて日本で行った事業にはどのようなものがあり，洋行とどのような関係があるか調査した。その結果，渋沢が民間の事業に関与するようになったのは，フランスの官と民の関係が平等であることに感銘を受けたことと深い関係があり，また私利を追わず，会社制度を利用して，日本の産業発展に寄与したのも洋行時に知った合本制度を日本で実践したことによったことに他ならないことが確認できた。重要なことは渋沢は洋行で学んだ制度を基盤として，渋沢は日本の国家の繁栄を目的とする後に“合本主義”と呼ばれる独自の企業経営を実践したことである。彼の実践した経営とは，まずサンシモン主義の影響と思える「商工業者の地位を上げ」，あるいは「リスクに応じた会社形態とし」，「会社に非社会的な行動を慎むことを求め」るというもので，利益追求型の欧米流の資本主義とは異なる独自のものであった。

2008年に起きたリーマンショックに象徴される行き過ぎたファイナンシャリゼーションはカネと私的な利益を第一に考える資本主義の悪い点が現れたものと言え，渋沢栄一が実践した合本主義を再度見直すことが望まれる。2011年に，渋沢栄一記念財団では，「合本主義プロジェクト」を立ち上げ，通常の資本主義観との違いを分析している(336)。同プロジェクトによると，合本主義においては，①財閥が形成した閉鎖的な経済システムに比べ，市場メカニズムを活用した解放的なものを目指した点　②株主や経営者などのステークホルダーに長期的な関与を求めた点　③ステークホルダーに道徳的観点を強調し，利己的な行動を戒めた点　④企業間競争に一定の秩序を求めた点が，異なっているとしている(337)。

最近，渋沢の国や社会を優先する企業経営哲学は新興国を中心に見直す動きがある。リーマンショックを経験し，企業が暴走することの歯止めとなることが期待されているのである(338)。

渋沢の活動・事業にはフランスでの経験が強く影響したものが多く，「貨幣と度量衡」，「合本組織と有価証券」，「租税制度・金融事業」，「船舶，機械」，「鉄道と海運事業」，「劇場」，「新聞・製紙」，「病院」，「社会事業」，「社交」などがそれに当たることが確認できた。

以上のことから，渋沢が徳川昭武の随行員として洋行して得た知識・経験は，帰国後の事業活動に十分と多大な影響を渋沢に与えたと言える。

---

(336)財団ホームページ http://www.shibusawa.or.jp/research/newsletter/759.html

(337)橘川武郎，島田昌和，田中一弘編著『渋沢栄一と人づくり』，245ページを参考とした。

(338)日経新聞記事「社会派『B企業』の逆襲」は，リーマンショックの「前は高収益企業として輝いていたウォール街だが，今は世論を背景とする規制強化が収益を圧迫し，社会を敵に回した代償を払っている。存在感があるのはかつて『理想先行』と軽んじられ，文字通り『B級』扱いされていた社会派企業の方だ」。「5月，東京で興味深い学会が開かれた。日本とトルコの経営学者が，渋沢栄一（1840-1931）の理念をトルコ企業にどう応用できるか討論した。渋沢の発想はB企業と重なる。明治以降，500以上の会社を創設した渋沢には『社会あっての会社』という信念があった。その渋沢が今『新興国の関心を集めている』。学会を運営した文京学院大学の島田昌和教授（55）は証言する。政府との蜜月で成長した新興国の家族事業も，株式市場を舞台とする経営に変わる。そこにはリーマン危機を迎えたウォール街のように暴走の芽がある。だからこそ，社会の歯止めを持つ渋沢に経営のヒントがあると新興国は期待する」と記している。

資料　渋沢栄一が出発した当時の日本及び日本人の様子

慶応3年（1867年）にフランスなど欧州を訪問した渋沢栄一は，当時の日本と比べると，進んだ科学技術，文化的な生活に驚いたことと思われる。どれほど驚いたか，あるいは欧州の文化をどのように感じたかを確認するために，当時の日本の状況を確認しておく必要がある。なぜならば，日本にはないような物を見たり，日本よりも進んでいる技術を知ったりした時に，より強い印象を受けたと考えられるからである。当時の日本を知るために，ドイツ人地理学者リヒトホーフェンの書いた日本滞在記(339)，スイス人ルドルフ・リンダウの書いた日本旅行記(340)，そしてフランス人モンブラン伯が書いた日本見聞記(341)あるいは当時の写真が参考となる。

尚，幕末期の横浜開港（1859年）後は，特に外国人が移動を許された横浜などの居留区は，既に維新前から急速に西洋文化の影響を受け，街並みなども変化したようである(342)。そのことから，日本滞在記などの書かれた日時や街並みの写真の撮影された日時は，極力，渋沢栄一が日本を出発した日時に近いものに限定して検討した。

①リヒトホーフェンが見た幕末の日本

リヒトホーフェンは，ボン大学で地理学科の基礎を作り，ベルリン大学の総長なども歴任した人物で，日本を観察した彼の目は確かと言える。彼は幕末期（1860・61年）と維新後（1870・71年）に二度日本に滞在し日本に関する記録を残しているが，一度目の幕末期の記述が維新前の状況を示している。彼の見た幕末期の日本は以下のようなものであった。

大型の船を独自に建造する技術はほとんどなく，東京湾で見た船について，リヒトホーフェンは「三隻のひどく動きの不器用な」船は，「オランダ船をモデルに日本人によって建造されたものだ」と述べている(343)。つぎに産業に関しては，「巨大な産業（巨大建築，機械製作など）は欠けているようであるが，小さいもの，微細なものを恐らく到達しうる最も素晴らしく，最も完全なものに発展させた」とリヒトホーフェンは述べ，建築，重機械は発展していないが「小規模の産業，いわば座って行う産業の完璧さ」に気づき，家内工業的な技術のレベルはとても高いと分析している(344)。さらに日用雑貨などについては，「この国民の産業は驚嘆すべきものがある。市場を歩いて，店々が軒を連ねているのを見，またそれらのどの店にも驚くほど多様な日常生活の必需品にあふれ，ヨーロッパではまだ多くの方面で達成されていない完成度にあるのを見ると，完全に孤立し外界との交流のない国民がこれらのすべてを生産し，様々な方面でそのような高みに発展することがどうし

(339) リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』
(340) ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』
(341) C．モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，25-56ページ
(342) ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，148-149ページに，リンダウが日本に滞在した1860年前後の日本が，「日本近辺を何週間もかけて旅をして以来，至る所に，次第にはっきりと強くなっていくヨーロッパの影響を見て取った」と記されている。
(343) リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，17ページ
(344) リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，26ページ

て可能であったのか，それを理解するのは困難である」などと述べている[345]。

建物に関しては，当初滞在した赤羽接遭遇所について，リヒトホーフェンは，「すべてが単純で，広々として風通しがよい。こういうものは熱帯地方では見たこともなかった。どうして温暖な国でこうした単純な建築様式が生まれたのか，理解しがたい。床は二十畳以上から成っていて，私がこれまで知っている限り最も快適なものだ」と自身の宿舎については満足していた模様である[346]。また「無数の寺院があり，江戸だけでも 3,000 以上の仏教の寺院があり」，「絵のような木造の寺院」であると述べている。一方，庶民の家については，「どの家も宝石小箱のようで，とてもきれいで清潔です。隅々まで変わらず細心の注意を払ってすべて手入れされています」とリヒトホーフェンは述べている[347]。ただし，離日直前に自身が住んでいた横浜の家については，「劣悪な住居」と全く満足していなかった[348]。外見などについては，清潔などと高く評価したが，住むためには，母国の住居に慣れた彼には，一般的な住居では満足していなかったことが窺える。

ところで，家具や窓ガラスなどは，明治維新になる前に既に，横浜などでは急速に欧米のものが入っていたようである。リヒトホーフェンが到着した翌年の日記に，「横浜は，私がそこを離れて以来，随分変わった。新しい家が多く建った。以前からあった多くの家はより美しくなっていた。ガラス窓はもう珍しくない。大抵の住宅には，じゅうたん，ひじ掛け椅子，奢侈品が見られる」と記している[349]。

②ルドルフ・リンダウが見た幕末の日本

スイス人のルドルフ・リンダウは，1859 年と 1861-1862 年の 2 回日本に来て，通算で約 2 年間日本に滞在した。彼の見た日本はつぎのようなものであった。

まずリンダウは日本の造船技術について，「今では日本人は蒸気船を建造することが出来るのである。これらの船は，実をいうと，ヨーロッパやアメリカの造船技術の傑作とは比較にならないが，日本人が，外国の模倣をしようと思ったものを同化吸収してしまう。素晴らしい才能の持ち主であることを見せしめるものである」と述べている[350]。

そして，家について，「家は小さくて低く，石灰で白く塗られ，黒と白の瓦葺きの屋根で覆われている。その上，家の構造はこの上なく単純で軽い」などと述べ[351]，さらに家の内部の様子について，「日本の家屋の内部は大変簡素である。厳格な清潔さがその主要な装飾なのである。部屋は天井が低く，それぞれ移動可能な枠で仕切られている」。「部屋に備え付けの，椅子，机，箪笥，寝台といったわれわれの国で日常使われる家具は何一つ見られない。手紙を書く必要のある時には，日本人は押入れから一尺ばかりの高さの小さな円卓を引っ張り出」す，と述べている[352]。

---

(345)リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，26 ページ
(346)リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，19 ページ
(347)リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，116 ページ
(348)リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，49 ページ
(349)リヒトホーフェン著，上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』，112 ページ
(350)ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，35 ペー
(351)ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，41 ページ
(352)ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，43 ページ

日本人の宗教観について，「迷信的な偏見の染み込んだ国民のど真中にいるんだと信じたい気持ちになろう。だが全然そうではないのだ。宗教に関して日本人は，私の出会った中で最も無関心な民族である。この点に関してシナ人を遥かに凌駕している」などと述べている(353)。

長崎で接した日本人の性質について，「火鉢の周りにうずくまって，お茶を飲み，小さなキセルを吸い，彼等の表情豊かな顔にはっきりと現れている満足げな様子で話をしたり，聞いたりしながら，長い時間を過ごすのである。彼等日本人の優しい気質，親切な礼儀作法そしてまた矯正不可能な怠惰を真に味わえるのは，こんな風に寄り集まった日本人に接する時である」と述べている。

下田開港（1854年）の影響について，「風景を眺めているうちに，われわれの思いはヨーロッパへと向けられて行った。日本近辺を何週間もかけて旅をして以来，至る所に，次第にはっきりと強くなっていくヨーロッパの影響を見て取ったからである」と彼は述べている(354)。彼の日本滞在は，下田開港から5年後から8年後の期間であり，少なくとも外国人が移動を許されていたような範囲においては，急速に西洋文明が流入していたことが窺える。

③モンブラン伯が見た幕末の日本

つぎに幕末史の史料に頻繁に登場するフランス人のモンブラン伯が書き残した日本見聞記(355)の内容を見てみよう。彼は，文久2年（1862年）と慶応3年（1867年）に2回，来日している。幕府の中枢とも通じていた人物で参考となる(356)。

彼は，日本の産業ないし日本人について，「魚という富は日本では最も重要なものである。極東の他の国民と同じように日本人も殆ど専ら魚と米で生きている」。「日本人はかれらの本来の性質に属している細かい配慮と知性を自分たちの仕事において発揮する。漆器は見事で，この種のものの中では何物にも勝っている。絹は恐らくはシナの類似の製品ほどの値はないが，日本の磁器は陶土のきめの細かさ，形の優雅さ，色の輝き，そして絵付けの調和によって，どんな比較にも耐え得るものである。日本人は青銅ものの真の芸術家であり，信じ難い完成度と忍耐力でもって彫刻を施すのである。」「日本人の刀は，重いとはいえ，鋼鉄の硬さ，磨きの繊細さ，刃切れの鋭さ，それに柄と鞘の芸術的な仕上げは見事である。」などと述べている(357)。彼は，刀と一部の工芸品を評価しているが，他の，軽工業ないし家内工業の製品については，言及すらしておらず，モンブラン伯にとって，興味ある製品が当時の日本には，ほとんどなかったことが窺える。

日本の家屋について，「家は殆ど高くはなく，軽い材質で建てられている。というのも日本では地震が頻繁にあるので，建築上の法律が課せられてきたからである。」「江戸の大君の住居は，石の頑丈な壁に包まれた深い濠に囲まれている。」「大名屋敷も，同じように

(353)ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，45ページ
(354)ルドルフ・リンダウ著，森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』，148-149ページ
(355)C.モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，25-56ページ
(356)C.モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，17ページを参考とした。
(357)C.モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，50-51ページ

通りに面した方は護られ，兵舎に囲まれた広い空間を占めている。」「外国人は庶民の生活の中にしか入ることが出来ない。その簡素さはヨーロッパ人には驚くべきもので，自分の生活に不可欠な家具など何一つ見当たらず，椅子も，机も，寝台も探せど無駄である。床がすべての代用をしているのである。「窓ガラスの使用は日本人には知られていない。かれらはその代わりに紙を用いるのである。」などとモンブラン伯は述べている(358)。日本の住居の様子が西洋と全く異なると大変驚いたようである。

学問全般について，「物理学および自然学における日本人の知識は，大層貧弱なように思われる。かれらは数学に若干の基本的な特質を有しており，これがこの学問を特別なもののように扱わせているのである。」「かれらは問題を，数字を書かずに，ヨーロッパ人よりもずっと迅速に解くのである。」「シナと同じように，外科とそれに依存する学問は，日本でも殆ど知られていない。しかし，医学は不完全であるとは言え，遥かに進んだ知識の総体を示している。日本の医者は動脈拍に多大の関心を向ける。」「病気を抑えるためにかれらは次の四つの主要な方法を用いる。大部分が植物性の多種の物質の混じった飲み薬，もぐさという形での火ないし単に熱の適用，針治療，それに評判の高い按摩。」「日本の学問が殆ど進んでいないことの影響を受けて，一般教育はとりわけ宗教性，道徳性，文学性が強い。」などとモンブラン伯は述べている。

モンブラン伯は，日本人と中国人を比較して，つぎのような興味深いことを述べている。「日本人とシナ人を比較すると，これら二国民において際立った性質が認められるのである。シナでは行動の支えとなる原動力は物質的関心である。」「日本人も行動を支配する主要な原動力を所有している。しかしこの原動力は名誉である。」「かれらは躊躇なくそのために自分の命を捧げる。」「シナの国民は腐敗し，物質的で，怠け者である。日本国民は，排他的ではない特権的な貴族に支配されているが，芸術的で，勇気があり，素直で，活動的である。それ故個人の水準はシナよりも日本の方が遥かに高い。」というのである(359)。そして，「西洋の要素を利用することが出来るようになれば，日本人は，この新しい要素の中で，知的な活動の気運ある強力な武器をみいだすであろう」などと，日本人の潜在的な能力を彼は高く評価している(360)。

まとめ

上記のとおり，幕末期の1860年代に日本に滞在したドイツ人，スイス人，フランス人の日本滞在記を通して，当時の日本を概観することができた。日本ないし日本人に対する3名の評価，印象は概ね似ている。つまりヨーロッパ人にとって，例えば，日本の家は小さく，簡素で，家具らしい家具は見当たらなかった。漆器，食器など日常品は豊富で，素晴らしい刀を作ることができた。ただし，器械などの製造は全くできず，ヨーロッパ人の指導の下やっと修理をすることができる程度である。ヨーロッパの物を真似して作る技術があり，日本人はヨーロッパの技術を学ぶことにより，大きく飛躍できる可能性を持って

(358) C. モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，41-42ページ
(359) C. モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，36-37ページ
(360) C. モンブラン他著，森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞録』，47-48ページ

いた。物理学，医学などの学問の水準はとても低く，算術が速くできる程度であった。日本人は，勇気があって，素直で，活動的で潜在的な高い能力を持っていた。

このような状況の日本から，渋沢栄一は，日本を出発してヨーロッパの文化に触れたこととなる。つまり現在の日本人がヨーロッパを訪問した時の印象とは全く異なり，渋沢栄一はヨーロッパの建物の高さ立派さ，大型の機械設備などに驚き，資本主義制度や学問が発達していることなどにも驚いたことであろう。

写真⑰

島原藩下屋敷（現在の慶応三田近く）、F. ベアト 1860 年代撮影
出典：『レンズが撮らえた F. ベアトの幕末』35 ページより複写

写真⑱

上野彦馬邸付近、上野彦馬 1866 年頃撮影
出典：『レンズが撮えた 150 年前の日本』172 ページより複写

〔参考文献〕

石井里枝　研究ノート「『社会企業家』としての渋沢栄一と社会事業」2016 年 1 月（『渋沢研究』28 号）、渋沢資料館
一番ヶ瀬康子「講演　渋沢栄一と日本の社会福祉」2001 年 10 月（『青淵』631 号）、渋沢栄一記念財団
稲松 孝思、松下 正明『渋沢榮一の第三回パリ万博参加体験と明治前期の福祉・医療事業への関与について（一般口演、一般演題抄録、第 41 回日本歯科医史学会・第 114 回日本医史学会合同総会および学術大会）』（「日本歯科医史学会会誌」）30（2), 195, 2013-04）
浦賀船渠株式会社編『浦賀船渠六十年史』1957 年 6 月、浦賀船渠株式会社
大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想』2011 年 4 月、ミネルヴァ書房
岡田俊平『明治期通貨論争史研究』1975 年 3 月、千倉書房
尾佐竹猛「慶應三年の遣仏使節に就て」1939 年 3 月、（『龍門雑誌』486 号）、龍門社
小沢健志監修、三井圭平編『外国人カメラマンが見た幕末日本Ⅰ』2014 年 8 月、山川出版
恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」2012 年 1 月（『渋沢研究』第 24 号）、渋沢史料館
恩田睦「渋沢栄一の鉄道構想」2013 年 1 月（『渋沢研究』第 25 号）、渋沢史料館
笠原英彦『天皇親政』1995 年 2 月、中央公論社
橘川武郎、島田昌和、田中一弘編著『渋沢栄一と人づくり』2013 年 3 月、有斐閣
木村昌人「渋沢栄一研究のグローバル化―合本主義・『論語と算盤』」2015 年 1 月（『渋沢研究』第 27 号）、渋沢史料館
公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』2012 年 10 月、東京堂出版
公益財団法人渋沢栄一記念財団、『渋沢栄一伝記資料』2 巻・53 巻、1955 年
公益財団法人渋沢栄一記念財団、『渋沢栄一伝記資料』25 巻、1959 年
公益財団法人渋沢栄一記念財団、『雨夜譚会談話筆記』（「渋沢栄一伝記資料別巻第 5」）、1968 年
公益財団法人渋沢栄一記念財団、『渋沢栄一伝記資料』36 巻、1959 年
公益財団法人渋沢栄一記念財団、『渋沢栄一伝記資料』47 巻、1963 年
サン＝シモン著、森博訳『産業者の教理問答』2001 年 6 月、岩波書店
渋沢栄一『立会略則』、1871 年 9 月、大蔵省
渋沢栄一、小貫修一郎編著『青淵回顧録』上巻・下巻、1927 年 8 月、青淵回顧録刊行会
渋沢栄一『論語と算盤』1985 年 10 月、国書刊行会
渋沢栄一著、守屋淳編訳『現代語訳　渋沢栄一自伝』2012 年 2 月、平凡社
渋沢栄一著、長幸男校注『雨夜譚』1984 年 11 月、岩波書店
渋沢栄一（青淵）、杉浦靄人『航西日記』1871 年、耐寒同社（近代デジタルライブラリー利用）http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1076220
渋沢栄一著、大塚武松編『渋沢栄一滞仏日記（航西日記）』1928 年 1 月、日本史籍協会
渋沢栄一（青淵先生）「青淵先生の祝辞」（『龍門雑誌』78 号）、1894 年 11 月、龍門社
渋沢栄一（青淵先生）「青淵先生の訓言」『龍門雑誌』第 249 号、1909 年 2 月、龍門社
渋沢栄一（青淵先生）「本邦公債制度の起源」（『龍門雑誌』265 号）、1910 年 6 月、龍門社

渋沢栄一（青淵先生）「年頭謹話」（『龍門雑誌』485号）、1929年2月、龍門社
渋沢栄一（青淵先生）「偶然の転換と目的の達成」（『龍門雑誌』510号）、1931年3月　龍門社
渋沢史料館『渋沢倉庫株式会社と渋沢栄一』2012年3月、渋沢史料館
渋沢史料館『渋沢栄一と王子製紙株式会社』2013年3月、渋沢史料館
渋沢史料館『商人の輿論をつくる！』2014年10月、渋沢史料館
渋沢史料館『私ヲ去リ、公ニ就ク―渋沢栄一と銀行業―』2015年10月、渋沢史料館
渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会『渋沢倉庫の80年』1977年3月、渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会
島田昌和『原典で読む　渋沢栄一のメッセージ』2004年7月、岩波書店
島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』2007年1月、日本経済評論社
島田昌和『渋沢栄一 社会企業家の先駆者』2011年7月、岩波書店
島田昌和「「民」のリーダー・渋沢栄一の視点から」2012年3月、（『日本経済思想史研究』第12号）、日本経済思想史研究会
聖路加国際病院八十年史編纂委員会『聖路加国際病院八十年史』聖路加国際病院、1982年10月
高田誠二『久米邦武』2007年11月、ミネルヴァ書房
寺谷武明『日本近代造船史序説』1979年2月、巌南堂書店
東京石川島造船所編『東京石川島造船所五十年史』1930年12月、東京石川島造船所
東京商工会議所百年史編纂委員会『東京商工会議所百年史』1979年7月、東京商工会議所
鍋島高明『岩崎弥太郎―海坊主と恐れられた男』2010年9月、河出書房新社
成田潔秀『王子製紙社史　』第一巻1956年6月、王子製紙社史編纂所
日本経済新聞社「社会派『B企業』の逆襲」2016年6月27日、朝刊記事
日本経済新聞社社史編纂室『日本経済新聞八十年史』1956年12月、日本経済新聞
日本経済新聞社110年史編集委員会『日本経済新聞社110年史』1986年12月、日本経済新聞社
日本郵船株式会社『七十年史』1956年7月、日本郵船株式会社
パトリック・フリデンソン、橋川武郎編『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』2014年2月、東洋経済新報社
藤田弘夫他編『都市社会学』　1999年7月、慶応通信
毎日新聞百年史刊行委員会『毎日新聞百年史』1972年2月、毎日新聞
嶺隆『帝国劇場開幕』1996年11月、中央公論
リヒトホーフェン著、上村直己訳『リヒトホーフェン日本滞在記』2013年12月、九州大学出版会
龍門社編纂『青淵先生六十年史』第一巻、第二巻、1900年2月、龍門社
ルドルフ・リンダウ著、森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』1986年2月、新人物往来社
山名敦子「明治期の東京養育院―『公設』の原型をめぐる」1991年10月（『渋沢研究』第4号）、渋沢史料館

Charles Marville, Photographer of Paris, National Gallery of Art Washington［1986］
Ｃ. モンブラン他著、森本英夫訳『モンブラン伯の日本見聞記』1987 年 10 月、新人物往来社
DNP 年史センター『王子製紙社史　本編』2001 年 8 月、王子製紙株式会社
Laurence Solnais, Exposition universelles 1855 Paris 1937, PARIGRAMME［2011］
M. Fr. Ducuing, L'Exposition Universelle de 1867 Illustrée, Administration［1867］（参考にしたホームページ）
国会図書館の電子版「博覧会」http://ndl.go.jp/exposition/s1/1867.html　2016.1.18. 閲覧
三菱史料館　成田誠一　三菱グループのポータルサイトの三菱人物伝 vol.22「渋沢栄一と弥太郎」
https://www.mitsubishi.com/j/history/series/yataro/yataro22.html　2016.6.27. 閲覧
三菱史料館　成田誠一　三菱グループのポータルサイトの三菱人物伝 vol.23「共同運輸との消耗戦と日本郵船の誕生」
https://www.mitsubishi.com/j/history/series/yataro/yataro22.html　2016.6.27. 閲覧
商船三井「商船三井の歴史」
http://www.mol.co.jp/saiyou/kaisya/history02.html　2016.6.30. 閲覧

（2018.5.7 受稿，2018.6.3 受理）

〔抄　録〕

明治期に多くの事業の設立に多大な貢献をなした渋沢栄一は，27歳の時に徳川昭武の随行員として洋行した。

渋沢は，航海での寄港地や目的地のパリで，そして万国博覧会会場において，さらに欧州各国を訪問することで電信などの新しいシステムの効能，産業全般の発展の重要性，教育の重要性，財政健全の重要性，資本を合わせる仕組みの重要性，劇場の効能，社会事業の重要性，病院の重要性，度量衡の重要性，新聞の便利性，実業の重要性，鉄道の便利性など多くの知識を得た。

渋沢が帰国後，会社制度を利用して，日本の産業発展に寄与したのも洋行時に知った合本制度を日本で実践したことに他ならないことが確認できた。重要なことは渋沢が洋行で学んだ制度を基盤として，独自の企業経営を実践したことである。彼の実践した経営とは，まずサンシモン主義の影響と思える「商工業者の地位を上げ」，そして「リスクに応じた会社形態とし」，「会社に非社会的な行動を慎むことを求め」るというもので，利益追求型の欧米流の資本主義とは異なる独自のものであった。

渋沢が洋行して得た知識・経験は，帰国後の事業活動に多大な影響を渋沢に与えたことを本稿で検証した。